

神戸女学院学舎の建築史学（Ⅱ）

——計画されざるキャンパス・山本通の学舎（1875～1933）——

川 島 智 生

Summary

Schools on the Yamamoto Street: The Campus Completed without Elaborate Plans

KAWASHIMA Tomoo

Kobe College started as a Christian school on the Yamamoto Street. It was one of the mission schools managed by the American board. The campus opened without any prospect for the future. As the educational contents changed from those of a girls' school to a higher education, the campus was arranged with the new buildings built in the adjacent land that was purchased later. Mount Holyoke, a women's college in the U. S., was a school model to follow.

There were four construction periods to complete the campus. The first period followed the Colonial style; the second the Stick style, the third the Queen Ann style, and the brick construction was first employed in the fourth period. The wooden western style was adopted all through the four periods. The Japanese style was also adopted and a new design called Jugendstil was executed on the exterior of the auditorium.

Holbrook and Allchin, missionaries from the American board, designed the campus. It is notable that the campus was designed by these amateur architects. A group of the elegant western-style school buildings in Kobe College attracted public attention as the architecture representing Kobe in the Meiji Era.

序 — 研究をおこなう意義と目的

最初、神戸女学院のキャンパスは神戸・諏訪山麓の山本通にあった。

神戸女学院とは、明治8(1875)年の創設以来、昭和8(1933)年に現在の岡田山に移転するまでの五十八年間、この地であって、鄙びた漁村から一挙に大都市に成り上がった新興都市・神戸の大躍進とある意味では歩みをともした。

山本通にあった時点ですでに、神戸女学院は女子教育についてのわが国有数のステイタスの位置を得ていた。今では、本学院は、阪神間の山手であって、上質な洋風建築の校舎からなる岡田山キャンパスというイメージがあまりに強いが、山本通に存在した時点で、すでに今日という「神戸女学院」というひとつのイメージを創りあげることに成功していた。それはキリスト教布教を目的とし、アメリカから海を渡ってやってきた宣教師たちの女子教育へのためまぬ熱意と、アメリカン・ボードによる財政もふくめた様々な支援、そして旧三田藩主・九鬼隆義をはじめとする日本側協力者による受容と支援の体制、この3つの要素が、開港都市神戸の先進的気風のなかで出逢ったからにはほかならない。

そのことは明治24(1891)年の高等部設置からはじまり、現在の大学へとつながる専門部を明治42(1909)年という早い時期に設置して、実際に大正8(1919)年には大学部の名称を得ていたことに結実していた。すなわち、西日本では活水女学院とならび、もっとも早い時期に高等教育機関を有し、わが国の女子高等教育のパイオニア的な位相にあったといつてよい。

一方でその成立とは、キリスト教主義学校の放つ、ある種のエキゾチシズムとも無関係ではあるまい。そのことを可視させるものが、学舎の一群である。山本通キャンパスに展開された校舎を撮影した古い絵葉書からは、塔が美しい洋館と煉瓦造建築が松林のなかに点在する景観が形成されていたことが読み取れる。このようなキャンパスが演出する風景は当時の女学生ならずとも、見る人の心のある一面に何らかの影響を及ぼしたものと考えるのが自然だ。このような視覚的な側面もまた、学校イメージを形成する際に無視できない要素だと、考えられる。このような問題意識から、この研究は開始された。

残念ながら、その時の校舎は実際にはひとつも残っていない。図書館本館の一階に、模型となって辛うじて形を伝えるにすぎない。それは実際の写真や設計図と照合すれば、幾分デフォルメされた内容ではあるが、当時のキャンパスの様態が一望できるという意味では貴重なものである。模型は写真6から20に示した。そこからは、山本通キャンパスもまた、それなりにひとつのキャンパスを形成していたことがうかがえる。

それは、必要に迫られて隣地を買い足すなど、全体計画が未定のなかでの試行錯誤が繰り返された結果に生まれた。したがって、キャンパスとしてけっして満足される内容ではなかった。すなわち、山本通のキャンパスは前稿で論じた明石・大蔵谷キャンパス計画や西宮・岡田山キャンパスと異なり、将来の予測がつかない、いってみれば、学校のありようが不可視の状態

でスタートしたために、「計画されざる」キャンパスとなっていたことは否めないだろう。

ここで実現した学舎とは、木造と煉瓦造の洋館の一群から織りなされるもので、もし今かりに存在していたならば、おそらくは多くの建物が文化財として指定されるだけの値打ちのあるものであった。その痕跡として、運動場の北東側の片隅に煉瓦の塀¹が残るだけである。この煉瓦の構築物は急勾配の雨水側溝の堤としてつくられたから、撤去されることがなかった。それ以外はすべての建物は建て替えられ、神戸女学院時代の風景は元敷地跡では完璧に消滅している。敷地の過半は神港学園²の校地になるものの、理化学館や寄宿舎、尚^{しょうけい}製館、家齋館のあった場所は新たに道路が敷設され、ふつうの住宅地と化した。その住宅ですら近年建て替えが進み、嘗てそこに校舎があったとは誰も想像できないだろう。

住宅地になった経緯は詳らかではないが、神港学園には校地のみならず、講堂をはじめ、^{ほうこう}葆光館、雨天体操場が引き継がれた。大半の校舎の喪失とは戦災による焼失ではなく、戦後高度経済成長期に神戸女学院の後を受けた神港学園が校舎増築時に建て替えたことによる。すなわち、戦災をくぐりぬけ、昭和30年代までは神戸女学院の時代のままに、これら過半の校舎は神港学園の男子高等学校として使われていた。神戸女学院時代の煉瓦造の講堂は、昭和39(1964)年3月26日に神港学園の校舎増築のために解体されるまでは残っていた。山本通の学舎は昭和8(1933)年に岡田山キャンパスに一斉に移転した時点で、取り壊されたのかのように思われているが、実はたかだか四十年前まで、それら一群の校舎は存在していた。現在、山本通四丁目十九番地の元キャンパス跡地には「神戸女学院創設の地 1875-1933」と刻まれたひとつの石碑(写真1)がある。

昨年(2003)、神戸女学院は岡田山キャンパスに移転して七十年を迎えたが、ほぼそれに匹敵する時間、山本通にあったのである。神戸女学院が西宮市内の岡田山にあるにもかかわらず、「神戸」という名称が入った校名を名乗るゆえんである。岡田山に移転して以来、地域との関わりは阪神間という郊外に移ってしまい、神戸という都市との繋がりは薄れた感は否めない。実は神戸という町の存在が神戸女学院を育んだ一面があったのではなかったのかという感触も得ている。それは開港地ゆえにキリスト教に寛容ということと、移住者が多く進取の気風に富むという2点が挙げられる。また、その後の五十年で神戸という都市が経済的に驚異的な発達を遂げて、大正期には我が国第三の大都市になっていた。

本研究は失われた山本通の学舎の一群について、建築史の視点で解明をおこなうものである。幸い筆者は、この秋に神戸女学院大学の倉庫のひとつから、山本通関連の一群の校舎の設計図を見つけることができた。それらの史料の解読からはじめ、まず、いかなる建物が建設されていたのかを、その建造物の「もの」としての物理的側面からの検証をおこなう。その際に、この一群の学舎が個々にどのような要請により必要とされ、建設されていったのかを、神戸女学院の教育制度の整備との関係からみる。次に学舎の意味について、外部から見られる対象であると同時に使用される器として、何がそこで目指されたのかをさぐり、神戸という都市とどのような関係にあったのかを考察する。きわめて短期間で形成された「外人」都市としての神戸と無関係ではないからだ。神戸女学院という学校は明治になって人為的につくられていった

都市・神戸の発展とある意味では軌を一とする。そして、その都市の都市計画によって移転せざるをえない状況下に追い込まれ、その結果神戸市外に転出していった。このような歴史的経緯を考えれば、神戸という都市との関係は重要な問題のひとつといえる。

近代前半に成立した教育施設がいちおうに学生数激減を迎えて、その存続に対して大きな危機にある現在、このような校舎に着目して「学校」というものを考えた歴史研究とは、学校のアイデンティティの形成を鑑みる考究でもある。また、このような校舎という「もの」に即しての科学的な分析は、今後の学校のありようをめぐる議論の際に、より客観的なデータを提示できるものと思われる。そのような意味で、この研究は現在の学校が抱える問題解決の糸口に繋がっていく可能性がある有益なものと、筆者は考える。

先行する研究としては、本学教授であった和島芳男による『神戸女学院八十年史』³⁾(以下「八十年史」と称す)がある。その知見を踏まえたものに『神戸女学院百年史総論』、『神戸女学院百年史各論』がある。だが、明治期の女子高等教育全般にかかわる学舎についての建築学からの研究は管見の限りではない。建築史学によるまなごしの不在は、なにも神戸女学院学舎に限ってのことではなく、多くの学校においても同様な様態を示す。女子教育ではなかったキリスト教主義の学舎については、同志社や関西学院、明治学院において、建築的視点による研究⁴⁾がある。

本研究は明治期の神戸女学院の学舎をとおして、その一端を解明しようとする試みでもある。本稿は前号『神戸女学院学舎の建築史学(I)—計画されたキャンパス—』の続稿をなすものである。なお、本研究は神戸女学院大学研究所の総合研究「日本の近代化と神戸女学院」による助成を受けている。

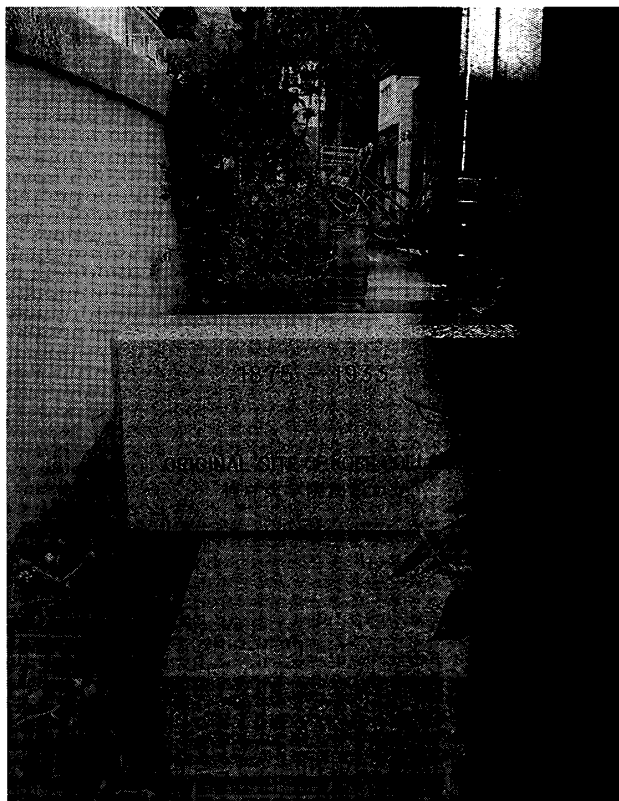


写真1 「神港学園に残る石碑」

I 「外人雑居地」での誕生

1) キリスト教主義女学校の系譜

多くのミッション・スクールはその出発点を明治初期に遡ることができる。「十九世紀は外国伝道の時代」⁶⁾であって、アメリカの伝道会社は宣教師をアジア一円に派遣していた。日本においては明治へと時代が変わるや、伝道会社は一斉に多くの宣教師たちを派遣する。彼ら彼女らは伝道の拠点として教会をつくる一方で、教育施設としてミッション・スクールを全国にわたって設立していく。神戸女学院もその例外ではなく、アメリカン・ボード⁶⁾によって神戸ホームという名のもとで、明治8(1875)年に神戸・山本通の雑居地に創設された。西日本では最古の女学校のひとつで、設立当初から新築の独立した校舎を有したことは注目に値する。

わが国女子教育に関するミッション・スクールの嚆矢は、明治3(1870)年に創立の東京・築地のA六番女学校⁷⁾と、同じく明治3(1870)年の創設の横浜のフェリス女学校⁸⁾だった。その出現は神戸ホームよりも五年早い。A六番女学校は築地六番館(図1)という洋館を校舎に利用したものだ。フェリス女学校が横浜山手に独立した校舎(図2)を建設したのは明治8(1875)年5月であり、神戸ホームと同年にあたる。独立した校舎を最初に有したミッション・スクールは明治4年に横浜で開校したアメリカン・ミッション・ホーム⁹⁾だった。翌明治5(1872)年に校舎(図3)を建設し、その後横浜共立学園に名称を変える。

神戸女学院の創設史を振り返ってみれば、神戸ホーム設立以前の明治6(1873)年に、その創立者タルカットとダッドレーは花隈村で私塾を開いていた。この私塾は明治5(1872)年に宇治野村に開設される英語学校と関連する。タルカットとダッドレーは来日後、宇治野英語学校の運営に関わる。後に詳述するが、神戸ホームの最初の校舎を設計したデイヴィスがその校長に就任していた。この学校は神戸女学院と、同志社の共通の祖といわれている。ちなみに日本でキリスト教が許可されたのはこの年、明治6(1873)年2月19日以降であり、そのような意味では神戸ホームは禁教が解けたことによって成立したものと捉えられる。

その後のミッション・スクールの様相をみると、東京と横浜では毎年のように新しい学校¹⁰⁾が開設されるものの、過半は数年の内に廃校となる。京都では同志社女学校が明治9(1876)年に同志社と隣接して開校する。神戸の居留地と密接な関係にあった大阪の居留地に建設されたミッション・スクールの様相¹¹⁾を観察すると、男子教育ではあるが、聖提摩太(テモス)学校が明治6(1873)年に雑居地で開校していた。その後名称を大阪英和学舎と変え、のちに東京の立教学校に統合される。明治8(1875)年には大阪川口の居留地に照暗女学校(のちに京都に移転して平安女学院)が開校していた。続き川口居留地には次々とミッション・スクールが創設されていく。明治12(1879)年の永生女学校(のちにプール女学校)、明治17(1884)年の式番館女学校(のちに大阪信愛女学院)、同年ウキルミナ女学校(のちに浪華女学校に統合し、その後大阪女学院)、明治19(1886)年の大阪一致女学校(のちに大阪女学院)、の5校の女学校が居留地内につくられていた。アメリカン・ボードと深く関わる梅花女学校の前身とも考えられる梅本女学校が、雑居地であった与力町で明治9(1876)年に開校していた。翌明治10(1877)年に土佐堀

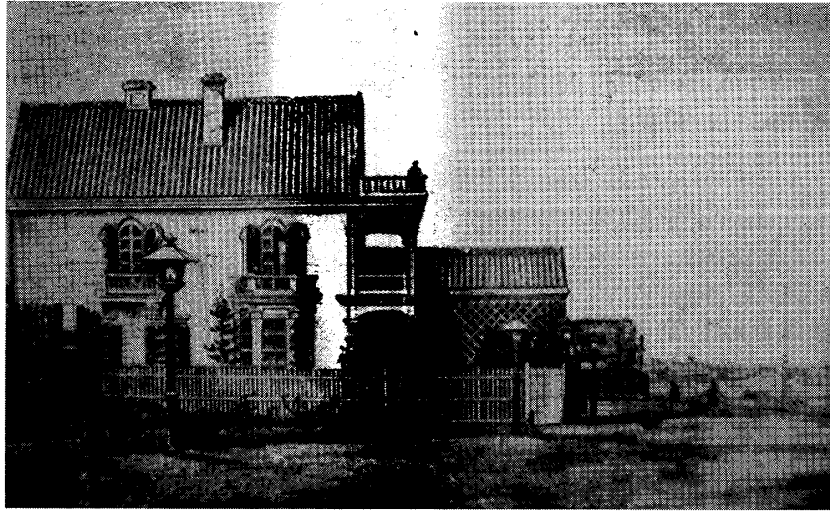


図1 「築地六番館」



図2 「フェリス女学校」

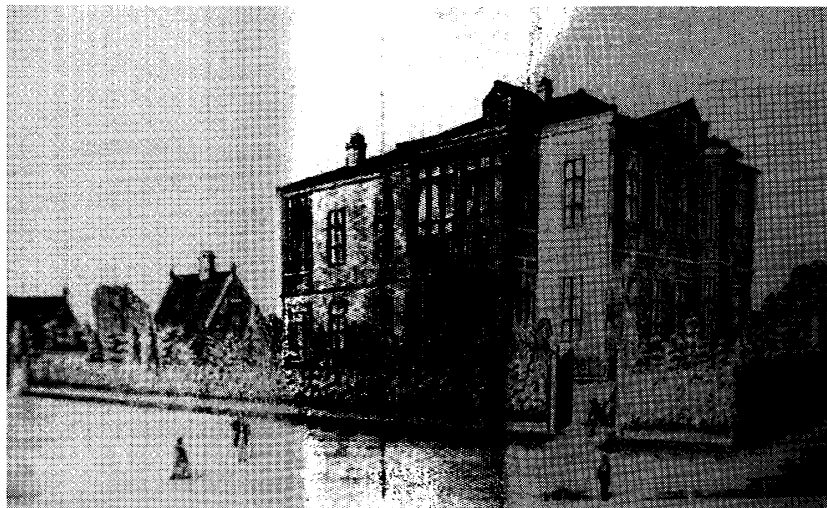


図3 「共立女学校」

で梅花女学校は開校する。

神戸では神戸女学院のほかには、神戸女子神学校¹²⁾とランバス記念伝道女学校の、計3校にとどまったのに対して、隣接する大阪では居留地を中心として、以上みたような数多くのキリスト教主義女学校の出現をみていた。全国的にみれば、大都市や開港地のみならず、金沢や弘前、松山など地方中心都市にも明治前期までにキリスト教主義女学校は設立されていくことになる。このようなキリスト教主義学校は府県立の高等女学校が制度的に成立する明治32(1899)年までは、女子教育の主だった担い手であり、そこで演出された洋風の学舎の風景は「女学校」というもののイメージ形成の重要な要素となったことを指摘しておきたい。

2) 「外人雑居地」で

すでに見たように東京や大阪では居留地内に学校が設立されることが多かったのに対して、神戸女学院は居留地のなかではなく、その外の「外人雑居地」とよばれた場所に開設される。神戸の居留地は、建設途中で明治維新という大事件が勃発したことで、その完成は遅れる。そのこともあって「外国人雑居地」が設定された。その理由は、

開港の際に居留地未だ成就せざるに既に開港を許せし為、外国人の来る者多く之を置く所無るべからざるに因り、内国人と相雜りて居住することを許せしものなり¹³⁾

というものであった。

神戸女学院が雑居地の写真2で示すような山裾のはずれで開校したことは、昭和初期に至るまでの長期間にわたり、山本通にキャンパスを存続させることを可能とした大きな要因であった。



現 神戸女学院の敷地

写真2 「明治十四年頃の神戸市」

商館が建ち並ぶ居留地内では、一区画の面積に制約があり、キャンパスにふさわしい校地へ拡張することはいうまでもないことだが、物理的に困難であった。東京や大阪の、最初居留地内で開校した学校の多くが、明治期という早い段階で、郊外に移転を余儀なくされたことを考えれば、そのことは理解されるであろう。つまり、神戸女学院は「雑居地」、しかも市街地化が進展していない、まったくの田畑が残る郊外に最初から位置したことで、同一の場所で長期間、存続が可能になった数少ない事例と見られる。

ではなぜ、神戸では東京や大阪のように居留地に学校が建設されることがなかったのだろうか。神戸の居留地は外国からの大型船が係留できる港に直面するという、貿易上の好条件があったために、明治8(1875)年¹⁴⁾以降、大阪の居留地から多くの外国人貿易商が移転してくる。そのために、神戸の居留地は商館がひしめきあって、とても学校を設置するような土地の余裕はなかったという状態だった。神戸で、ミッション・スクールが居留地内に成立することは、このような居留地の盛況が物理的に不可能とした。大阪のキリスト教宣教師たちが、居留地の衰退で空き家になった商館を学校に変えて、川口居留地をミッション・スクールのメッカ¹⁵⁾へと変えていったのとは、まさに対極だった。

また、神戸の場合は居留地が繁盛したことで、早くから雑居地に家を構える外国人も多かった。居留地撤廃までの神戸の外国人は、居留地内だけで生きていたのではなく、雑居地と一対になってはじめて、その生活は完結した。神戸の居留地は大慌てで砂地を埋立て造成したために、よい飲水に欠いた。が、隣接する北側の雑居地ではよい湧き水に恵まれた。つまり、居留地はビジネスのための商館を置き、住居は高台の雑居地に構えるというスタイルが選択された。

その雑居地は北が山で、南が海へ繋がる傾斜地という理想的なロケーションだった。このような神戸特有の自然地形は外国人に気に入られた。その結果、居留地と雑居地は空間的に連続する。このように、ほかの都市の居留地とはいささか様相を異とした。

居留地廃止の二年前の明治30(1897)年の時点¹⁶⁾で、神戸の居留地と雑居地をあわせて1,912人の外国人がいて、清国を筆頭に、イギリス、ドイツ、アメリカ、ポルトガルなど世界各国からの外国人が居住していた。神戸女学院と深く関わるアメリカ人は131人いたことが判明している。

居留地が廃された後の雑居地の様態は次のように記述される。

明治元年三月七日許可されたる内地雑居の遺物にして、当時其境界は東は生田川、西は宇治川、北邊は山、南は海岸と区画せられ、此地内に於して日本人より地面または家屋を借り、或は其家屋を買受けたる上は、取除け自普請、勝手たるべきことありて、在留外人は続々其邸宅を建築せり。其多くは自邸にして、彼等は此処より元居留地其他の商館へ通勤す、庭園を広く取りたる西洋建築の色ペンキと、棟割長屋の日本家屋と入り混じりて町家を作せるは、如何にも居留地の特色を示せり。殊に眺望美はしき山邊に接近するに従い、斯かる西洋建物多く¹⁷⁾

3) 山本通という場所

神戸港や居留地が見下ろせた山本通のキャンパスについて、デフォレストは神戸女学院五十周年記念の祝会で、

此の学校は海岸近い町の中心地よりずっと離れた、其時は未だ梅林と田畑のみであった所に獨り立って居る小さな物でありました¹⁸⁾

と、開校時の山本通の様相を語った。明治16(1883)年の地図(図4)からは、この地が田圃と畑とあるものの、女学院の建物と名称は記載されていない。中山手通りに近い場所は溜池になっている。このことから、この時点では地図に明記されるほどの存在になっていなかったものと理解される。中山手通は敷設されてはいるものの、その道路に沿って家屋が建てられている形跡はない。下山手通ではところどころ街路にそって家屋が建っている。県庁舎が現在地に設けられていた。

明治19(1886)年の地図(図5)ではじめて神戸女学院は、「英和女学校」として記載される。まさに真北に諏訪山公園があり、温泉と記される。ところどころに溜池がある。

諏訪山麓の中山本通のこの敷地は、明治8(1875)年に創立者・ダッドレーによって発見される。この場所は眺めのよい高台にあり、居留地を仕事場とする外国人の多くが居宅を構えた北野町に連なり、この界限にも外国人の異人館は散在していた。

神戸女学院の全景を南面から撮影した一枚の絵葉書(写真3)¹⁹⁾がある。現地調査の際に偶然



理化学館

音楽館

講堂

写真3 「大正後期から昭和初期の神戸女学院の南面からの全景」の絵葉書



図4 「兵庫神戸実測図」 内務省地理局測量課
 明治16(1883)年 S 1:10,000
 「網かけ部分が神戸女学院敷地」

に手に入れたものだが、この絵葉書からは、この界隈に神戸女学院のみならず、洋風住宅がかなり多く建設されていたかがわかる。その多くは南面がヴェランダになった二階建てのコロニアル・スタイルとよばれるものだった。このような異人館は現在、北野町に数多く残っている。そのために、今では北野町だけが洋風住宅が建設されていた場所だと捉えてしまいがちだが、諏訪山の下に至る場所までそのような住宅が連続していたことがここからは読み取れる。

この地域の歴史的文脈をみると、山本通キャンパスのすぐ北側にせまる諏訪山で明治10年代後半に鉱泉が発見されることを契機に、諏訪山遊園という神戸でも有数の料亭街と遊園地が形成される。また、北野町側は主に外国人の住宅地となるのに対して、神戸女学院がある諏訪山よりの地域では、日本人実業家の邸宅が設けられる場所となる。そのことは今では相樂園となった旧小寺謙吉邸をはじめ、神戸女学院の東に隣接した松方正義の屋敷の存在からもわかる。このように山本通界隈とは、明治期の神戸という町を経済的に支えた神戸財界の中心人物たちの邸宅がおかれる住宅地だった。なお、この中山本通は女学院創設の二年前の明治6(1873)年に新設された。神戸の町は大阪と同じく東西の道を「通り」と、南北の道を「筋」と呼ぶ。

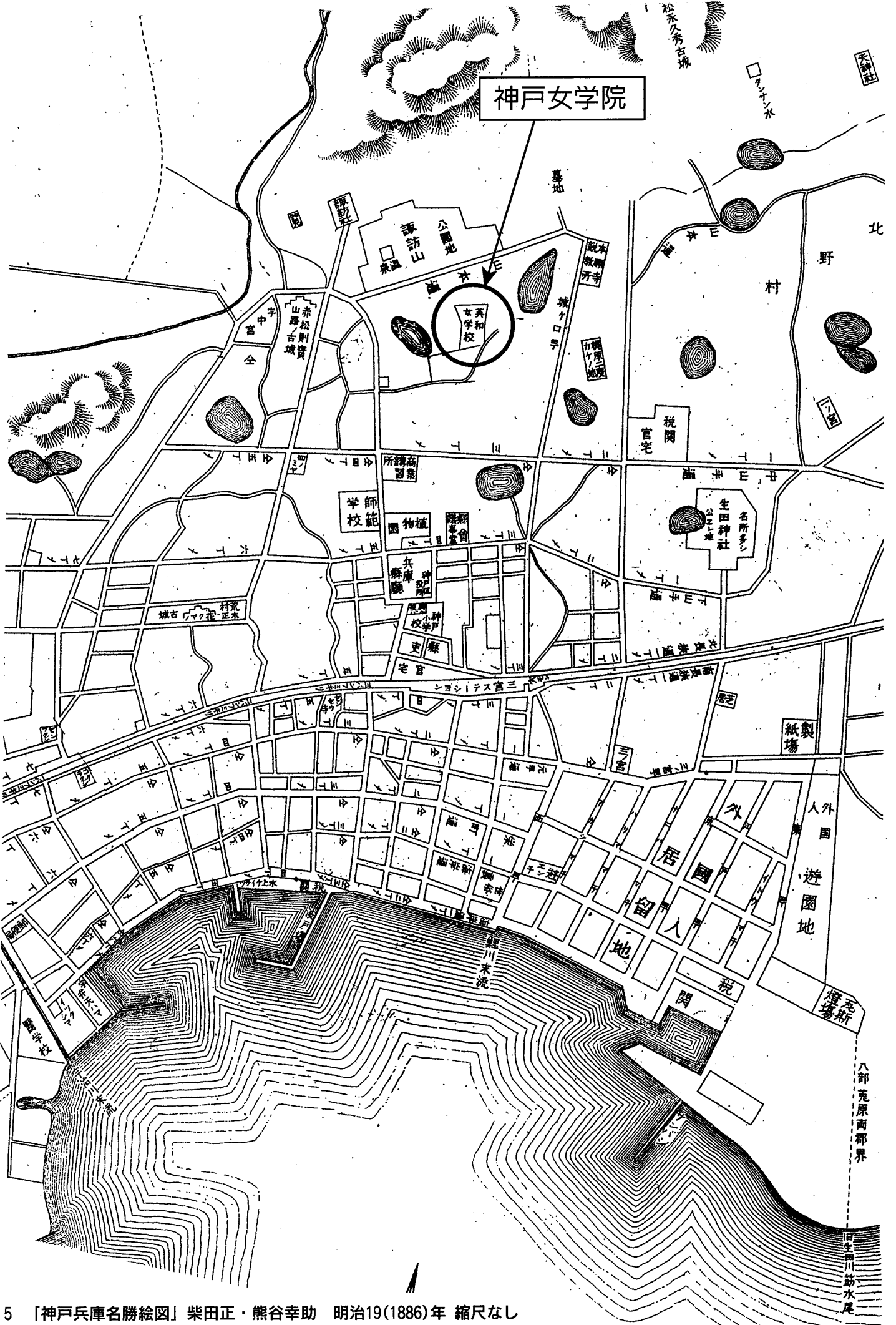


图5 「神戸兵庫名勝絵図」柴田正・熊谷幸助 明治19(1886)年 縮尺なし

Ⅱ 計画されざるキャンパス

1) 「計画できなかった」キャンパス

山本通キャンパスとは、一挙に計画されてつくられたキャンパスでなかったことをまず、指摘しておく。いってみれば、「計画できなかった」キャンパスだった。ではなぜ、計画できなかったのだろうか。

それは、最初から大学という高等教育機関を目指していたものではなかったからだ。当初はキリスト教主義の教育施設というものの実現が第一の目標にあり、将来のビジョンはおろか、数年後の行く末すら予測不可能な状況下にあった。そのことは明治初期に日本につくられた数多くのミッション・スクールがきわめて短期間で廃校になったことから読み取れる。

もうひとつの理由としては、学校の経営が日本人の手によるものではなく、アメリカン・ボードによっておこなわれていたことが挙げられる。そのことは大正15(1926)年の財団法人神戸女学院の設立まで続くことになる。すなわち、日本での運営者に最終的な決定権がなかったことも影響を及ぼしていた。

このような、明確な教育内容とレベル設定の読みが不可能なかでは、校舎についても差し迫った問題に対する場当たりの対応しか、展開できないという限界があったものと推察される。そのことは神戸女学院のみならず、他のミッション・スクールでも同様な様態を示す。

だが、このような計画できなかったキャンパスは、近代日本の教育施設のありようを俯瞰すれば、けっして例外的なものではなく、むしろ一挙に計画されたキャンパスの方が希有な存在



View from the Front Gate of Kobe College

神戸女学院正門

写真4 「神戸女学院正門」の絵葉書

であった。「キャンパス」というものが意識され、本格的に整えられていくのは、過半の学校では創設の地から、より広い敷地が可能になった郊外移転という、キャンパス成立史上の第二ステージに入る時点、つまり、大正期以降のことであった。その契機になったのは教育内容のレベルアップ、すなわち制度的な昇格、あるいは学校規模の拡大などが原因となった。

最初から計画されたものは、一般に新設された学校に多く見られるが、その時期もまた大正期以降に多く観察される。

2) 高等科設置とカレッジ計画

「計画できなかった」キャンパスゆえに、次々と隣接地を敷地に取り込み、校舎の増改築が繰り返された。このようなプロセスは近代期におけるわが国の多くの私立学校にみられるものと共通するが、神戸女学院の歴史に顕著な特徴とは、高等科と専門部の早い設置があって、それぞれの過程に応じた専用棟が建設されていた。すなわち、物理的には一見自然発生的な校舎の展開をみせたが、教育制度の進展との関連からみれば、そこにはある整合性が読み取れる。

とりわけ、高等科の設置は、「カレッジ計画」²⁰⁾が念頭にあってなされたという点で、キャンパス形成に大きな影響を及ぼした。その結果、敷地の拡充と理化学館と音楽館という校舎の新築、そして庭園の整備がおこなわれた。つまり、山本通の時代は全体としては「計画できなかった」キャンパスであったが、そのなかで唯一、小規模ではあるが、なんらかのまとまりのあるキャンパスらしき空間が、高等科設置を契機に誕生することになる。

では、そのモデルとはどこに求められるのか。日本におけるアメリカン・ボード最初の宣教師・グリーン²¹⁾の構想によれば、神戸女学院のモデルとして、米国の女子大学であるマウント・ホリヨーク・タイプのカレッジが考えられていた、という。

マウント・ホリヨーク女子大学とは、1837年にマサチューセッツ州サウス・ハドレーに創立される、米国で最初の女子高等教育機関であり、宗教的な要素はあったものの、リベラル・アーツの理念によって、女子教育の元祖として知られた。19世紀の後半に起きる米国の女子大学設立運動に、マウント・ホリヨークは大きな影響を与えた。山本通に完成したキャンパスの空間は、マウント・ホリヨークと比べようもないが、明治18(1885)年にはじまる神戸女学院の高等科設置は、そのような米国での女子大学設立が集中する時期と比較しても、それほどタイムラグは認められない。このことから、いまだ女子大学設立運動の熱気が冷めやらぬ同時代におこなわれたと、みることができる。

神戸英和女学校の高等教育への着手は、明治15(1882)年にブラウンが赴任したことから開始される。翌明治16(1883)年にソールが赴任し、両女子は英和女学校の教育内容のレベルアップをはかるために、明治18(1885)年に一年制の高等科の設置をはじめた。その背景には、明治15(1882)年に起きたふたつの動向、ひとつは同じアメリカン・ボードによる同志社のカレッジとしての整備と、もうひとつは文部省による東京女子師範学校附属高等女学校の創設とがあった。神戸英和女学校の高等科はそのあと、明治20(1887)年に二年制、明治24(1891)年に三年制となり、完成する。

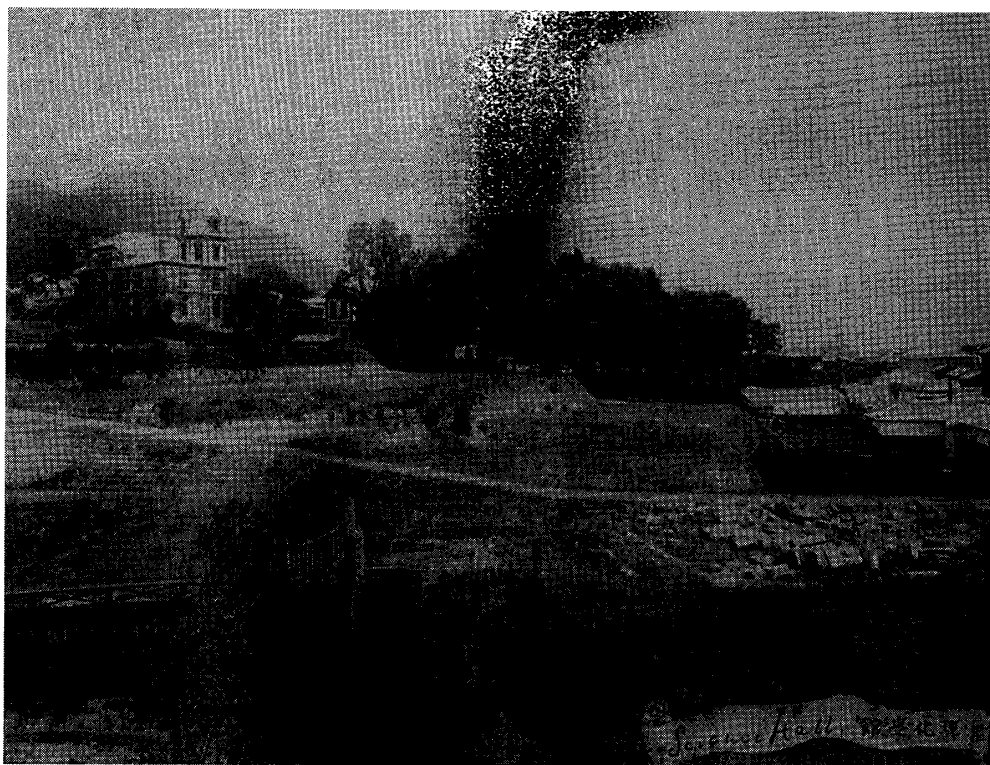


写真5 「明治二十六年の神戸女学院」(建設中の理化学館)

後に詳述する、理化学館や音楽館の設計者として知られるホルブルックが、米国の大学に入学できるレベルの高等科を持つ必要があるとの主張を明治23(1890)年におこなっていたことも、高等科設置に大きく作用した。同時期では、長崎の活水女学校、横浜のフェリス和英女学校、東京の明治女学校が高等教育をおこなっており、神戸英和女学校も含め、この4つの女学校の高等科の教育レベルは、新制大学の教養課程に匹敵していた²²⁾、ともいわれる。なお、神戸で県立の高等女学校が設立されたのは明治34(1901)年であって、それまでは公教育からの女子教育の取り組みは皆無であり、大半はキリスト教主義女学校が担っていた。

このような高等科設置の目的は、キリスト教主義女学校の教師を育成することにあつたと、指摘するのは岡本道雄²³⁾である。明治23(1890)年の教育勅語の発令までは、欧化主義によってキリスト教主義学校は繁栄を謳歌しており、日本中に続々と設立されていくラッシュにあつた。このような背景が大きく作用していた。高等科の設置によって、各地のキリスト教主義女学校の卒業生たちが神戸女学院に入学することになる。その結果、西日本における女子高等教育の中心²⁴⁾をになう学校へと変容していく。

このように、いち早く上級学校を設置したことが、高等教育機関としての実績と名声につながっていき、神戸女学院というひとつのブランド・イメージの醸成につながったとみることができる。

3) 教育レベルの変遷と校舎および敷地の関係

キャンパスの学舎をめぐる建築的現象とは、そこで展開された教育内容を色濃く反映することになる。とりわけ教育制度の転換期には校舎の建設ならびに、その敷地として校地の拡充がなされていくことになる。

創立以降、岡田山に移転までの神戸女学院の教育内容の歴史をみると、誕生後、次の3つの段階²⁵⁾を経ていたことがわかる。第一は明治13(1880)年より五年制の神戸英和女学校への改称、第二は明治24(1891)年の高等科の設置、第三は明治42(1907)年の専門部の設置だった。続く大正8(1919)年の大学部²⁶⁾の設置は、大蔵谷キャンパス計画を経て、岡田山移転へと繋がった。

第一段階の神戸英和女学校への改称以前の神戸ホームとは、「小学校程度」の内容のものであり、そこでは「宗教教育を主として学科を従とする傾向」²⁷⁾であったが、改称後には学科組織を変更して「女学校程度」にグレードアップし、「学科を主として合わせて基督教的信仰を養う方針」²⁸⁾と内容を大きく刷新させ、「これまでの塾のようなものから組織的な中等程度の学校」²⁹⁾に進展した。

そのことを受けて、明治18(1885)年に寄宿舎東舎が、明治20(1887)年には講堂が、明治21(1888)年には寄宿舎中舎、寄宿舎西舎がそれぞれ完成する。敷地の拡大との関係からいえば、寄宿舎東舎の建設にあたり、明治18(1885)年に東隣の白州邸を借り受け修繕し、同建築とその敷地を明治20(1887)年に購入していた。

第二段階の高等科設置が、明治26(1893)の理化学館と音楽館の2つの独立した校舎を誕生させることになる。敷地拡充からみれば、このふたつを建設する土地を明治22(1889)年に購入していた。敷地前面の南側と西側である。その結果、山本通の「南本通り」に面するキャンパス敷地が完成する。

高等科設置の背景に、カレッジ計画が存在した。

第三段階の専門部設置は、明治39(1906)の葆光館^{ほうこうかん}、明治40(1907)年の講堂、明治41(1908)年の雨天体操場の竣工に繋がった。

葆光館^{ほうこう}と雨天体操場が建設された道路を挟んだ北東側の敷地は、神戸市有地であって、明治38(1905)年に20年契約で借り入れられた。神戸女学院は明治36(1903)年に公布される専門学校令にもとづき、明治42(1909)年に普通部および音楽部より構成される専門学校になる。そのため校舎として葆光館^{ほうこう}、講堂、雨天体操場がつくられることになった。

このように神戸女学院にとっての明治期は、新しい校舎建設の度に、隣接地を買い求め、あるいは借り受け、規模を拡大していく時代だったといえる。

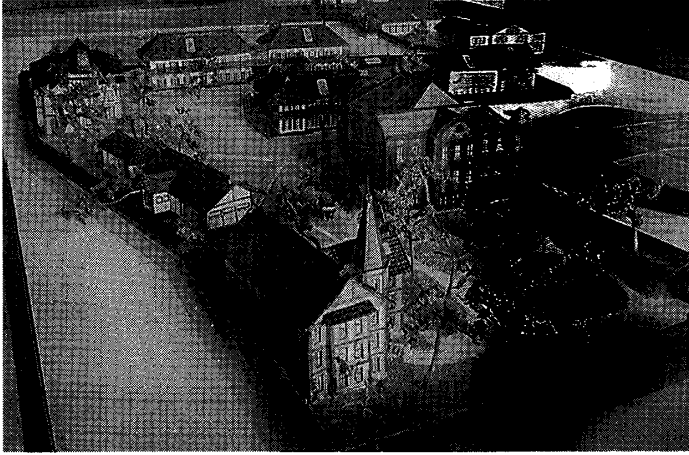


写真6 「全景・南面」 模型(1)

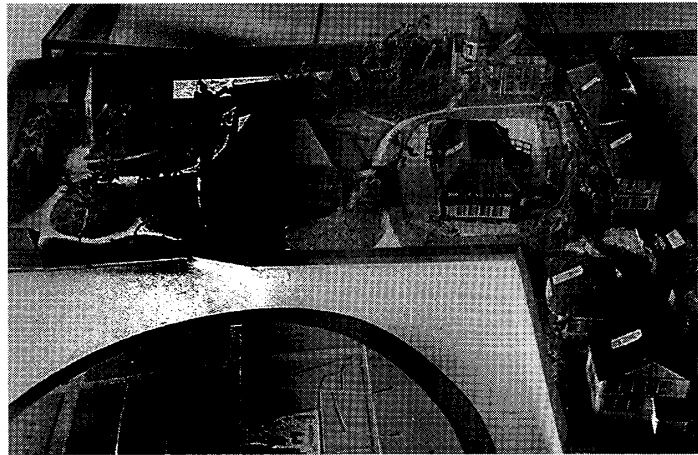


写真7 「全景・東面」 模型(2)

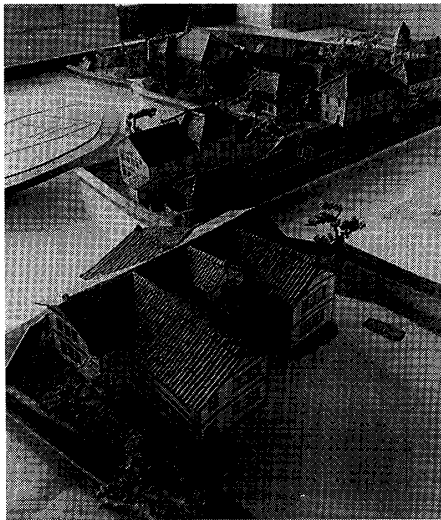


写真8 「全景・北東面」 模型(3)



写真9 「講堂・南面」 模型(4)

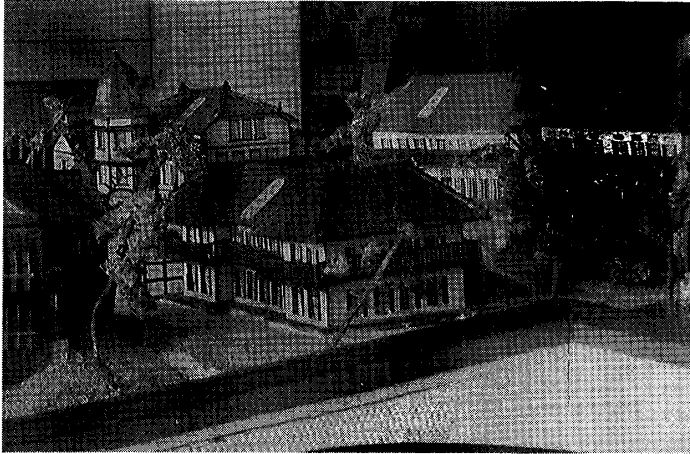


写真10 「教師館・寄宿舍・南東面」模型(5)

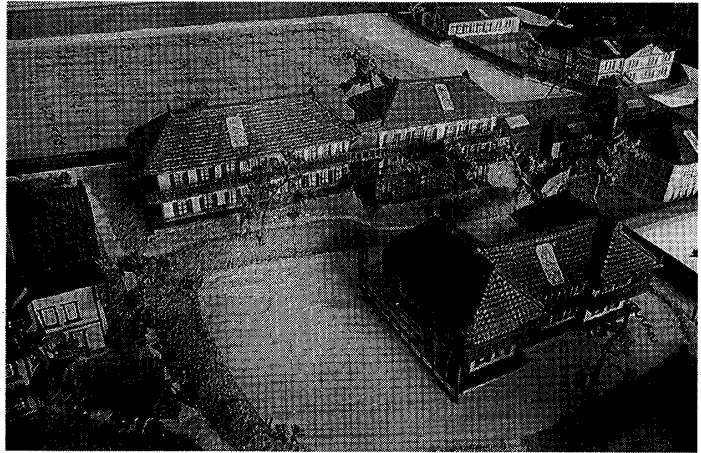


写真11 「教師館・寄宿舍・南面」模型(6)

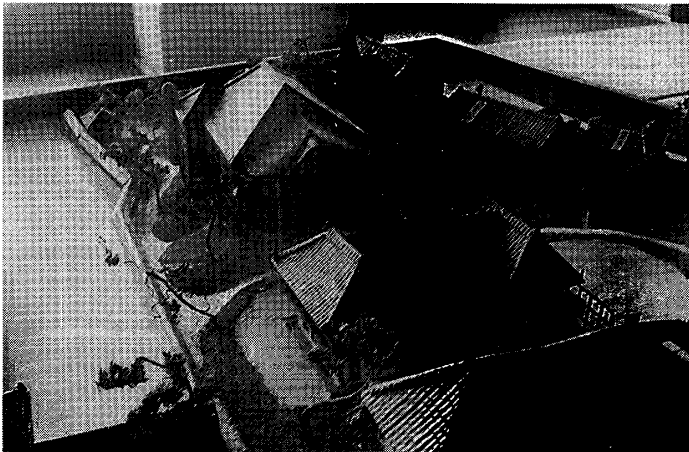


写真12 「講堂・教師館・寄宿舍・屋根」模型(7)

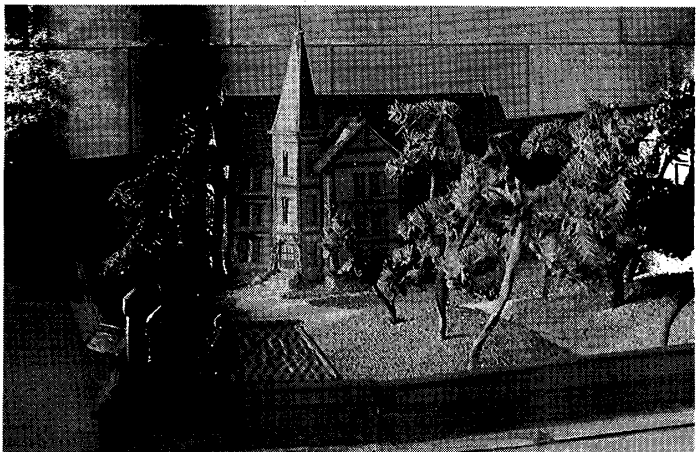


写真13 「音楽館・東面」模型(8)

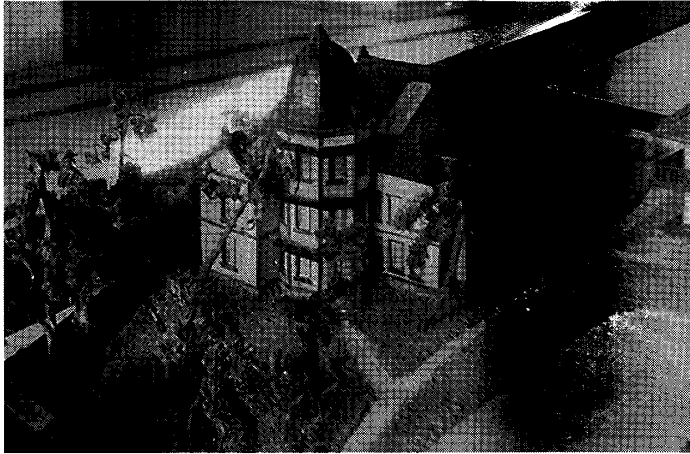


写真14 「理化学館・南面」模型(9)

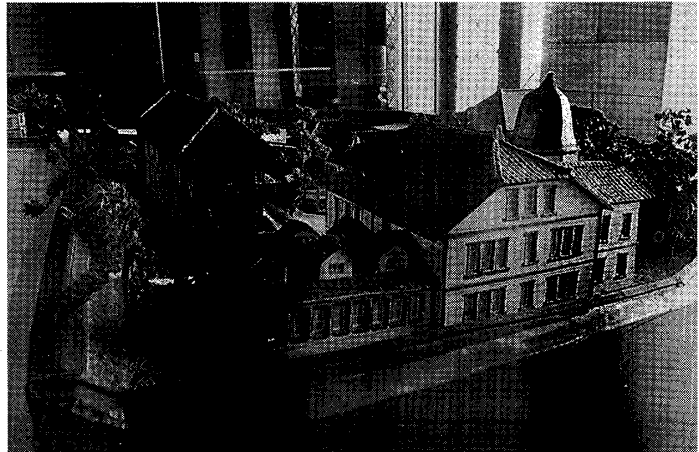


写真15 「理化学館・西面」模型(10)



写真16 ^{しょうけい}「尚齋館・家齋館・東面」模型(11)

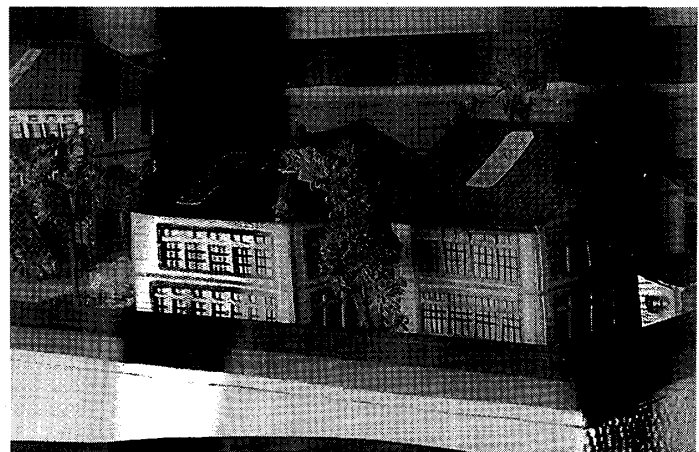


写真17 ^{しょうけい}「尚齋館・家齋館・南面」模型(12)



写真18 ^{しょうけい}「尚賢館・家齋館・北面」模型
(13)

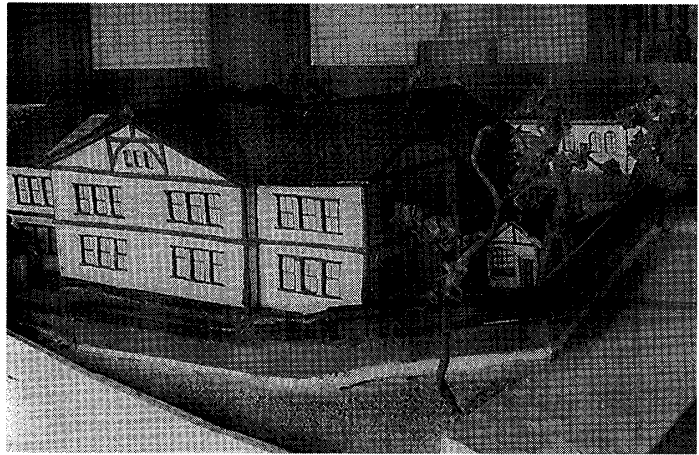


写真19 ^{ほしこう}「葆光館・南面」模型(14)

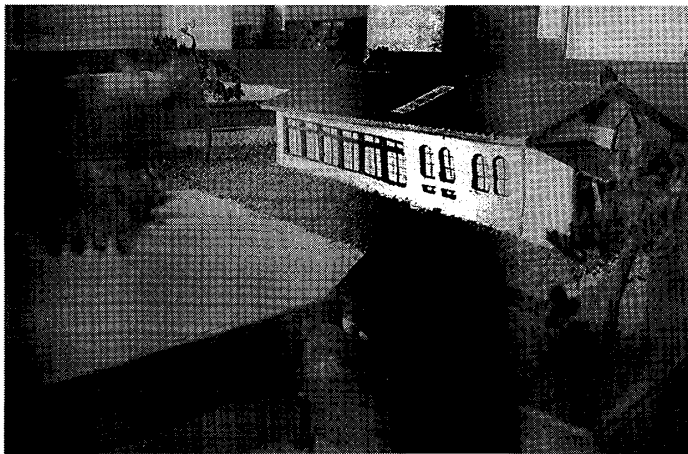


写真20 「雨天体操場・南面」模型(15)

表1 山本通に存在した校舎一覧

番号	建物名称	竣工年	階別用途	階数	建築面積(坪)	延床面積(坪)	構造	外観の特徴	設計者	工費(円)	備考
1	第一校舎	M8.11	一階は教室 二階は寄宿舎	2	80	153	木造	ベランダ付. 漆喰壁	デヴィス	3.323	南舎といわれ、のちに米国教師館となる
2	第二校舎	M11.2 *1	一階は講堂 二階は教室	2	69	138	木造	ベランダ付. 漆喰壁. ベティメントあり	アッキンソン	1.421	旧講堂 移築され西舎となる
3	増築校舎	M17	一階は教室 二階は寄宿舎	2	—	—	木造	不明	不明	不明	
4	東舎	M19	寄宿舎	—	—	—	木造	不明	不明	2.750 *2	既存の白州邸の改修 M28に取り壊される
5	講堂	M20	講堂	2	97	168	木造	下見板張	不明	不明	M39に取り壊される
6	中舎	M21	一階は食堂 二階・三階は 寄宿舎	3	47	135	一階は煉瓦 二階・三階 は木造	ベランダ付. 漆喰壁	不明	2.553	
7	西舎	M21	一階・二階は 寄宿舎	2	69	138	木造	ベランダ付. 漆喰壁	不明	5.200	第二校舎を移築した ものだが、改築がな されていない
8	理化学館	M26.9	一階・二階は 教室	3	116	249	木造	下見板張	ホルブルック	6.572	施工は吉田某 塔屋あり
9	音楽館	M26.12	一階・二階は 教室	3	71	204	木造	下見板張	ホルブルック	4.810	施工は吉田某 塔屋あり
10	門衛	M26	門衛室	1	8	8	木造	和風	不明	778	
11	尚装館	M30.11	家庭科教室	2	38	73	木造	簡素な和風 改装後は下見板 張	不明	1.573	M33(38)に洋風に改 装*3
12	炊事場	M37	炊事場	1	19	19	木造	簡素な和風	不明	不明	
13	炊婦宿舎	M37	宿舎	2	—	—	木造	簡素な和風	不明	不明	
14	浴場及小使 部屋	M37	浴場 小使室	1	38	38	木造	下見板張	不明	1734	
15	葆光館	M39	普通科教室	3	174	345	木造	下見板張	オルチン	19.986	
16	大講堂	M40.12	講堂のほかに 一階は事務所 二階は教室 三階は図書室	3	172	448	煉瓦造	煉瓦表わし. オランダ風破風 ニーゲントシュ テイル風	オルチン	32.124	
17	米国教師館	M40	住宅	2	14	24	木造	下見板張	ホルブルック	不明	ポルティコあり
18	雨天体操場	M41	体操場	1	116	116	木造	下見板張	不明	8.032	T8に増築
19	家斎館	T35	一階は実習室 二階は大広間	2	53	98	木造	下見板張	ヴォーリス	8.857	解体して岡田山に移 築され、同窓会館と なる
20	向上館	T11	教室	1	54	54	木造	簡素な和風	不明	5.042	諏訪山小学校舎の移 築
21	門衛 (北側敷地)	不明	門衛室	1	—	—	木造	下見板張	不明	不明	

出典：『神戸女学院史一創立五十年一』神戸女学院1925、に記されたデータを基にして、『神戸女学院百年史総説』神戸女学院1976、筆者の分析をくわえて作成した。

* 1：西舎の竣工年をここではM11としている。

* 2：土地と建物の合算。建築面積ならびに延床面積での「—」という表示は不明を表わす。

* 3：洋風に改装の時期は2説あり、一説はM33、もう一説はM38をしめした。

Ⅲ 学舎の建築学的意味

山本通にかつて存在した神戸女学院の建築は、全部で21棟が確認される。そのことを筆者は表1に示した。ここで出現した校舎の一群は建築学的にどれほど価値があったのかを、今回発見できた新資料である10枚の設計図面を用いて考察する。実際に個々の校舎の平面に分け入り、失われた室内空間を、残された写真から想像する。図書館に所蔵の古写真と模型からは、個々の校舎の外観を鑑み、どのようなキャンパスがつくられていたのかをイメージする。

考究の手順は、前章での分類、すなわち、和島芳男のいう創設期のあとに、三度の建設時期があったという時間軸にしたがっておこなう。なお配置計画については、徐々に土地を買い足し、必要に迫られて校舎を増築していったために、計画的なキャンパスでないということを最大の特徴とする。そのことは現在の岡田山キャンパスと比較すれば明確な差異が読み取れる。たしかに今後の予測が困難であり、限られた敷地といった制約により、場当たりの展開を余儀なくされたという側面は否定できないものの、得られた敷地内で建物配置に対して、ひとつのルールのようなものが見られるのではないかと考える。それが抽出できれば、神戸女学院の山本通キャンパスの特質を捉えることができた、といえるからだ。

1) 第一期創設期(明治8年から明治11年まで) — 第一校舎・第二校舎

第一期は宣教師たちがとりあえず専用の建物を建設したもので、教室と寄宿舎からなる寄宿学校の時代だった。第一校舎と第二校舎の2校舎がある。



写真21 「第一校舎の外観」

①第一校舎

最初の校舎は、明治8(1875)年10月12日に完成する第一校舎(写真21)だった。その外観は西洋風の木造二階建てで、各階にヴェランダが張りめぐらされ、外壁は土壁の上に漆喰塗り仕上げ、屋根は日本瓦葺き、開口部には鎧戸となる。日本は夏期に高温多湿になるということで、南アジア各地に建設されたコロニアル・スタイルが採択された。それは熱帯地方向きの、風通しを重視した建築だった。プランはコの字型をとり、屋根に突き出た煙突の存在からは暖炉が設けられていたことが読み取れる。一階は主に教室、二階は生徒の寄宿室に充てられた。のちにこの校舎は南舎とよばれるようになる。

②第二校舎

その二年後の明治11(1877)年2月30に、第二校舎は竣工する。第一校舎と共通する外観を示すもので、二階建てでヴェランダ付きのコロニアル・スタイルだった。写真22から判断すると、実際には図7のような軒破風がペディメントになったものは実現しなかったと考えられる。第二校舎の内部は、一階に講堂と教室、二階に寄宿舎と教室が、それぞれ配置されていた。この講堂を有したことが、おそらくは中央部にペディメントを設ける案につながっていったのだろう。すなわち、講堂ということで、一定の格式性が求められたことを外部に表出した記号が、ペディメントであったとみることもできよう。

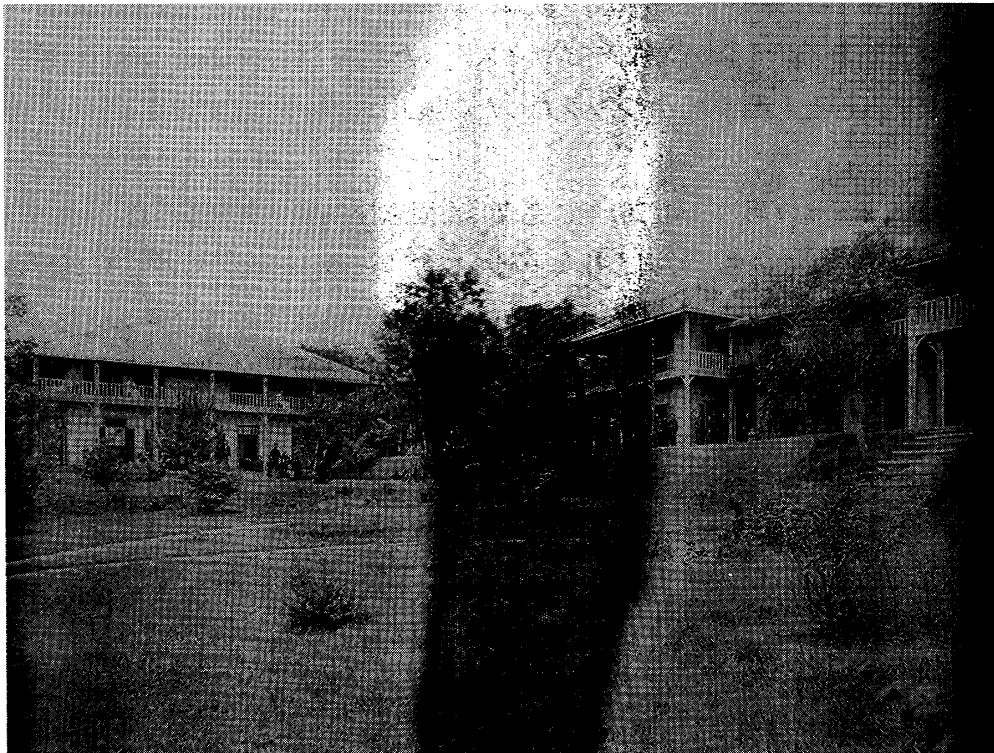


写真22 「第一校舎(右側)と第二校舎(左側)の外観」

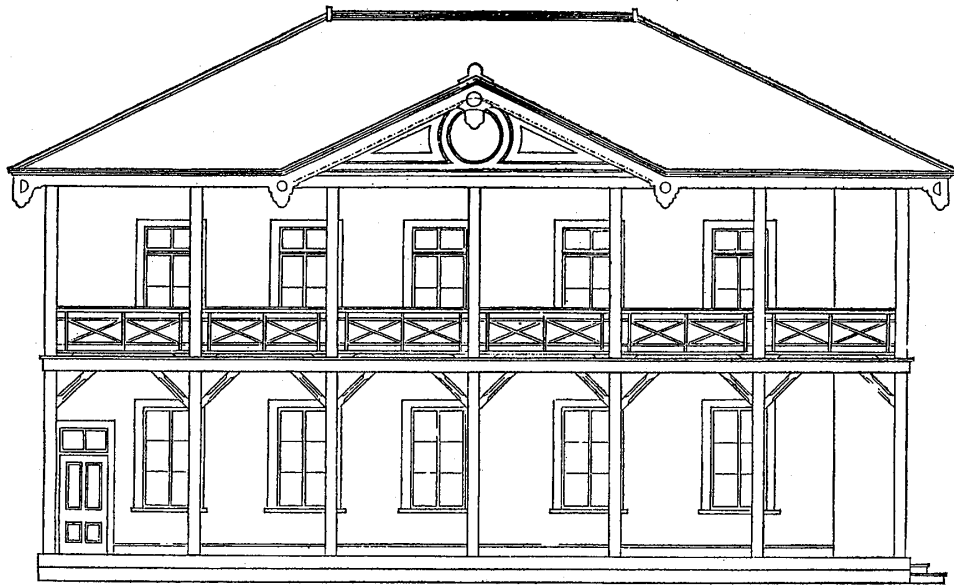


図7 「第二校舎の立面」

③共通するもの

ここから判断できることは、この時期は寄宿学校が目指されていたことだ。このことは同時期のキリスト教主義の女子教育機関では一般的なものだった。また、採択されたコロニアル・スタイルは寄宿学校という建築類型だけではなく、初期における居留地建築の一般的な形態³¹⁾だった。

設計は第一校舎と第二校舎、ともに、宣教師によって担われた。第一校舎の設計者は次章で詳述するアメリカン・ボードの宣教師デイヴィスだった。第二校舎の設計は神戸伝道区のもうひとりの委員であった宣教師アッキンソンだった。施工は日本の大工がおこなったものと思われる。

このようなスタイルは明治9(1876)年に完成した同志社の第一寮・第二寮(写真23)³²⁾・食堂、明治11(1878)年に建設された同志社女子部の校舎「京都ホーム」³³⁾、明治11(1878)年9月に竣工する新島襄邸でも出現していた。それらは史料的な制約があって、デイヴィスによる設計という確証はとれないが、ヴェランダの桁を受ける一階の柱上部の持ち送りの形状など、神戸ホーム南舎との共通項が多くみられる。デイヴィスは第一校舎完成の直後から京都に移り、同志社の設立に関わっていく。このことから判断すれば、デイヴィスが設計に関与した可能性は高いものと考えてよいだろう。このうち第二寮と新島襄邸は現存する。第一期の時期の校舎の面影は、同志社のこのふたつの建築にみることができる。

この時期の校舎は同じアメリカン・ボードの関与ということで、同志社、同志社女学校との共通性が指摘できる。その根拠に、デイヴィスが両方に関わっていたことが挙げられよう。



写真23 「同志社旧第二寮(1876年)の外観」

④建築的位置

またこの時期、明治一桁台後半から十年代にかけては、東京・築地や大阪・川口の外国人居留地では多くのキリスト教主義学校が成立し、しだいに「ミッション町」³⁴⁾になっていく。だが、最初から独立した校舎を建設するケースは少なく、東京、大阪の両居留地ではその多くが、当初商館の建物を校舎に転用していた。その好例として、わが国でもっとも古い女学校であったA六番女学校をあげることができる。

一方、開港に関して神戸に先行した横浜では、共立女学校を嚆矢として、フェリス女学校、美美新教会英和学校(図8)³⁵⁾が早くから独立した校舎を有していた。いずれもが山手において、丘のうえにそびえ、西洋の建築とはいかなるものであるのかをしめすようなものが多かった。ヴェランダ・コロニアルが用いられているという点で、美美新教会英和学校の校舎がこのなかでもっとも神戸ホームの校舎に近い。また東京・築地の海岸女学校(写真24)³⁶⁾もまた明治14(1879)年の建設ながら、ヴェランダ・コロニアルを使っており、神戸ホームと共通するスタイルといえる。

明治一桁代という時期に、独立した専用校舎を建設していた学校は横浜には以上の3校が確認されるが、東京や大阪では管見のかぎり見出せていない。そのようなことを考えれば、神戸ホームは横浜のそれらの学校とならび、きわめて早い時期に建設された事例のひとつと位置づけられるだろう。



図8 「美美新教会英和学校」

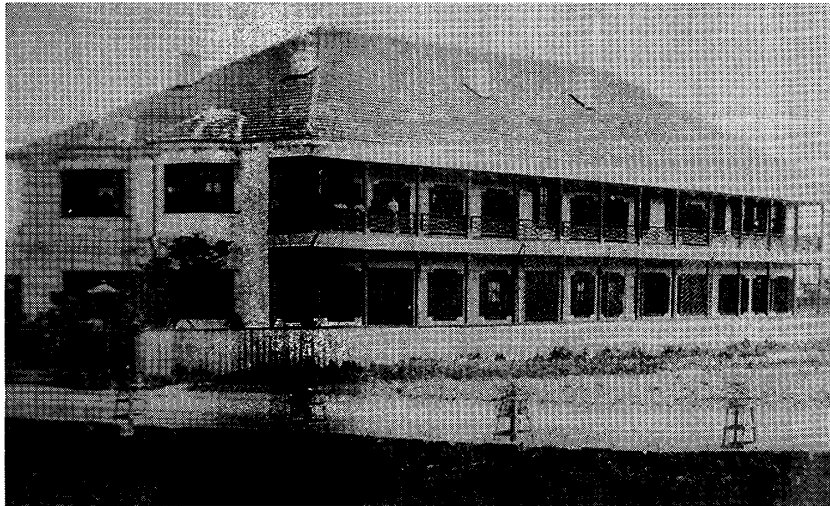


写真24 「海岸女学校」

2) 第二期(明治17年から明治21年まで) — 第二校舎の増築校舎・東舎・中舎・西舎・講堂

第二期は専用の講堂と寄宿舎が完成する時期にあたる。ここではスタイルの異なるふたつの種類の建築がほぼ同時に出現することになる。ひとつは寄宿舎東舎・寄宿舎中舎・寄宿舎西舎であり、もうひとつは講堂である。明治17(1884)年に、第二校舎の西南に接して増築された二階建ての一棟は、写真や図面などの史料に欠けるために、外観は判別できないが、おそらくはコロニアル・スタイルの第二校舎にあわせてつくられたものと考えられる。

①寄宿舎(東舎・中舎・西舎)

寄宿舎は建築スタイルのうえでは、第一期の延長線上にあり、東舎以外はコロニアル・スタイルとなる。

まず明治18(1885)年につくられた東舎をみると、既存の白州邸を改修して寄宿舎としたものだった。その外観と平面は判明しない。この建物は明治28(1895)年には解体され、その部材をもって次節で詳述する尚^{しょうけい}裴館が建設されることになる。

次に建設されるのが、第一期でつくられた講堂を内包した第二校舎を敷地内で移築して再構築されたもので、西舎とよばれた。明治21(1888)年のことで、二階建てのベランダが前面に取り付くコロニアル・スタイルで建設された。第二校舎の時は6つの柱間からなったが、西舎では柱間間隔は10スパンとなる。そこで表れたものは、次にみる中舎という寄宿舎とひと繋がりになった外観のスタイル(写真25)だった。このことから、外観上の統一ということが意識されて設計されていたものと考えられる。すなわち、このような外観にみられるものが、この時期には寄宿舎という建築類型にふさわしい建物と考えられていたのだろう。だから、移築の際に元の建物とは異なった形態になったものと捉えられよう。

そこでは漆喰塗りの壁に鎧戸という手法が用いられていたが、模型制作の段階、つまりは山本通キャンパスから移転する直前の昭和(1933)年の時点では下見板貼となっていたことが判明する。また、模型ではベランダを支える柱はなく、キャンティレバー(片持梁)で張り出た構造になるが、完成した当初は柱が連続して、ロτζアあるいはギャラリーの光景をつくりだしていた。それらがいつの時点で改装がなされたのかは史料的な制約もあって、確認できていない。

同年の明治21(1888)年には、三階建の中舎がつくられる。二階三階は西舎などと同様に、ベランダが前面に取り付き、外壁は漆喰で塗られたコロニアル・スタイルの寄宿寮で、一階

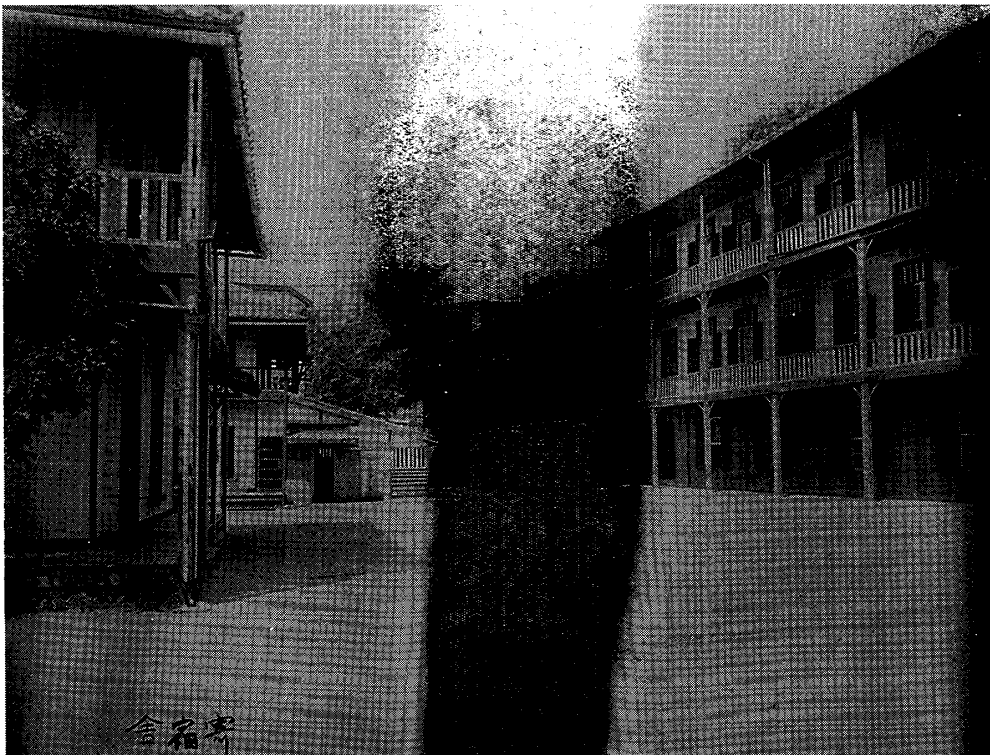
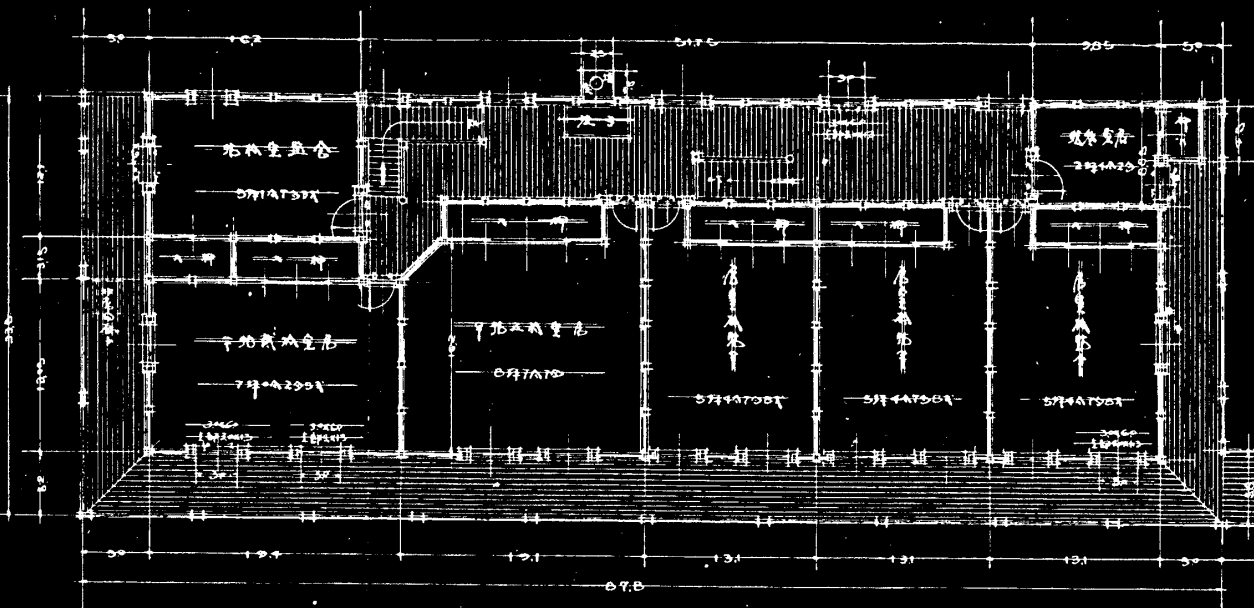


写真25 「中舎の外観」

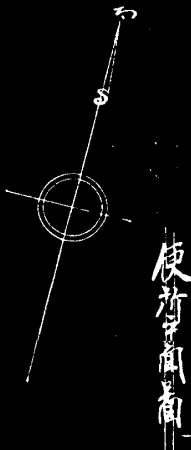
西側寄宿舍平面圖
 其ノ外観



寄宿舍各部

神戸女学院各階建築面積表

階別	第壹階	第貳階	第参階
東側教室面積	60坪25	60坪25	60坪25
西側教室面積	81坪70	81坪70	
食堂	5坪188		
東側図書室	3坪765	2坪46	
合計建築面積	151坪60.0		
合計各階面積	357坪60.0		



使行平面圖

西側寄宿舍平面圖
 其ノ外観

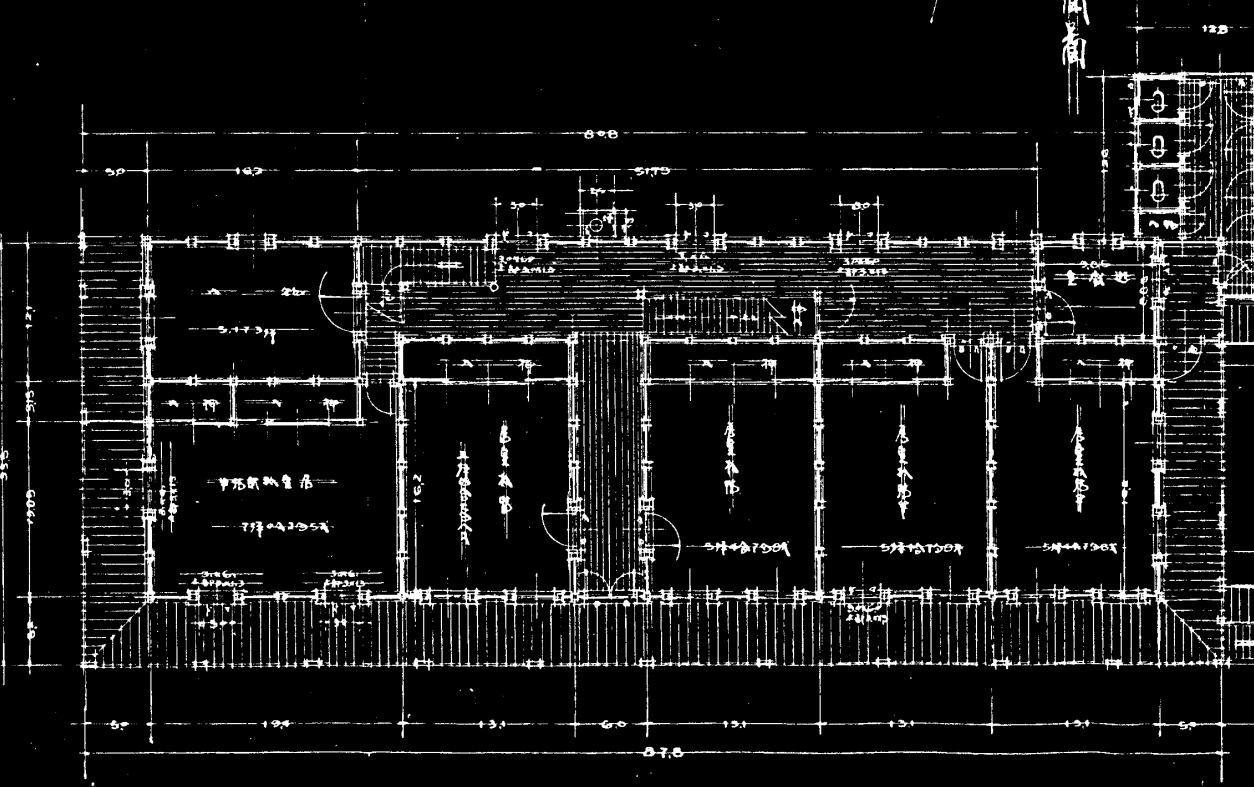


図9 「寄宿舍(西側)の平面図1(一階・二階・三階)」

神戸女学院寄宿舎平面縮尺圖

井倉階
東側寄宿舎平面圖

東側寄宿舎基壇階平面圖

井倉階
東側寄宿舎平面圖

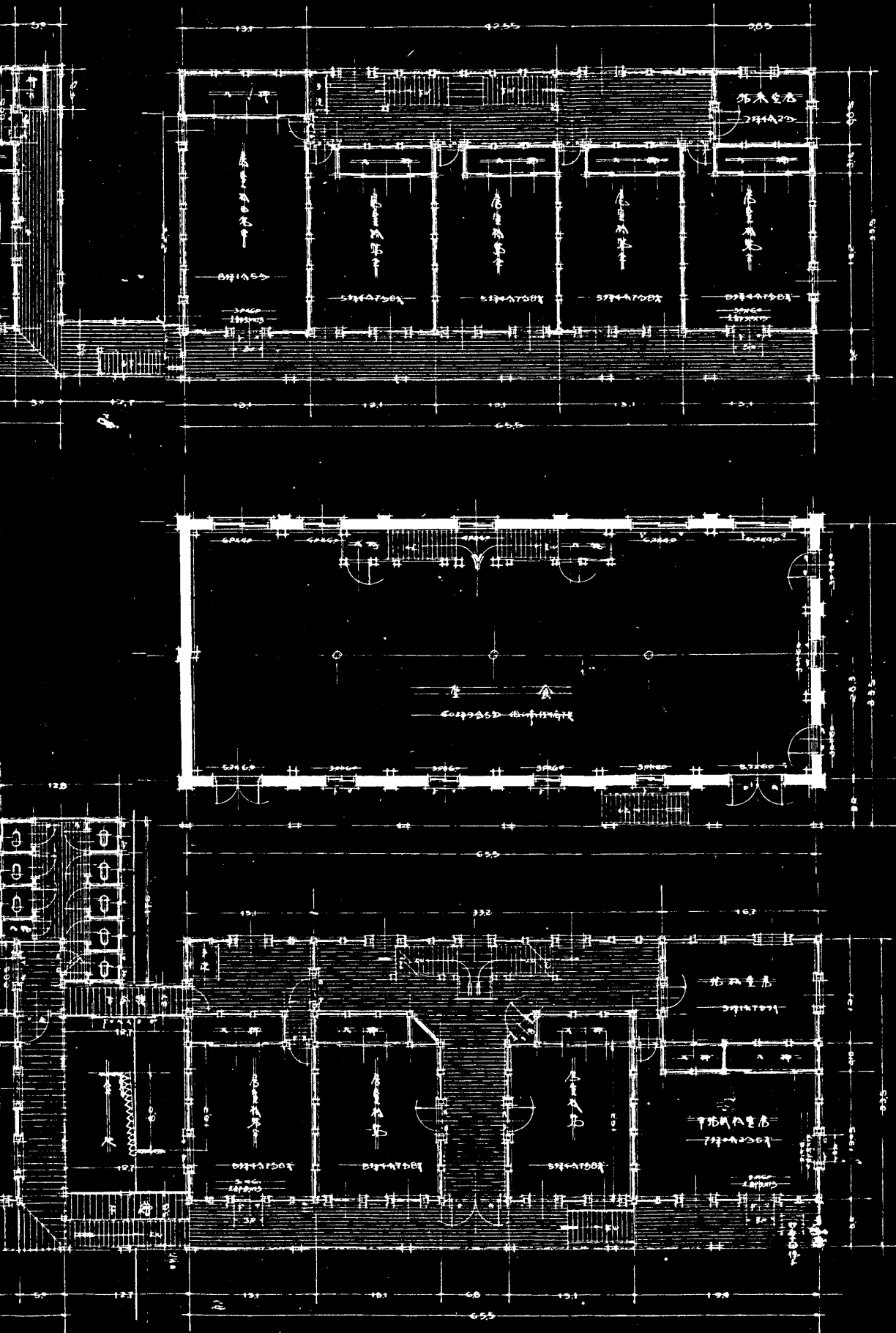


図10 「寄宿舎(東側)の平面図2(一階・二階)」

部分だけが煉瓦造となり、洋風の食堂とされた。この中舎は後には、東側寄宿舍とよばれるようになる。また、この時期に炊事場や浴場なども建設されることになる。

平面図(図9と図10)の発見できた西舎と中舎について、そのプランをみる。共通して二舎ともに、居室は基本的に間口が13.1尺(約3.9メートル)、奥行が16.2尺(約4.9メートル)のおよそ10.7畳大の室からなり、それぞれ踏み込みと押入が用意されていた。このことから、二舎とも同時に同じ設計思想で設計されたものと考えられる。生徒の居室数は、西舎が一階に5室、二階に6室の計11室、中舎が二階に5室、三階に5室の計10室、西舎中舎あわせて、21室あった。西舎二階には舎監室があり、西舎と中舎、おそらくは東舎をも統合して監督していたのだろう。

注目すべきは、ほとんどの室にわたって北側と南側の二箇所からアプローチできるようになっていたことだ。上下階をつなぐ階段の存在からは、北側の廊下が日常的な動線として用いられていたことがわかる。北側廊下は開放された吹き放ちの南側ベランダとは異なって、窓と壁で囲われていた。一方南側のベランダは各室およびに、西舎と南舎をつなぐ通路として機能していた。

②講堂

専用講堂は明治20(1887)年12月に誕生するものの、模型になって残っておらず、また設計図も見つかっていないために、その実像は定かではないが、外観を写した写真が二枚(そのうちの1枚が写真26)あり、どのような建築がつけられていたのか、ある程度判明する。それらに

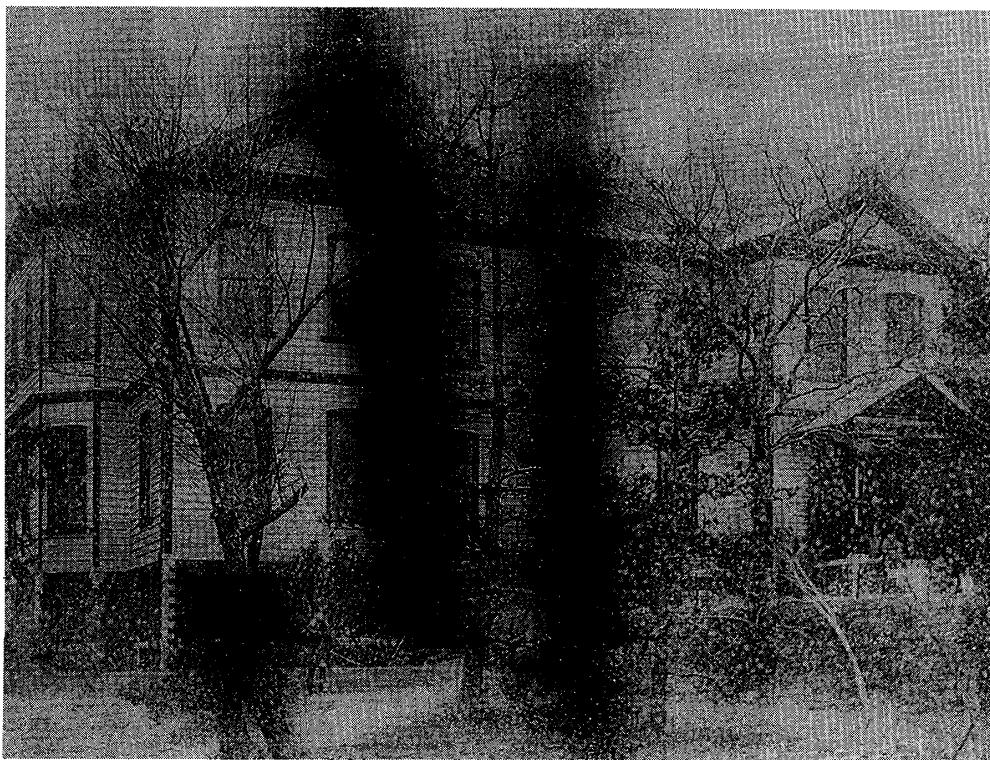


写真26 「講堂(1888年)の外観」

よると、木造下見板貼、瓦葺きの屋根で、東側立面が正面だった。東西軸線で南北にほぼ左右対称のプランを有した。北側の翼部に玄関があり、南側に建物が突出していた。

ここで注目すべきは、スティック・スタイル³⁷⁾とよばれるものが出現していたことだ。それは木造下見板貼を基調としながらも、軒や窓廻り、破風の笠木、出隅の柱、ストリング・コース³⁸⁾など、要所の見切りの部材を外壁面より突出させ、しかも濃い色彩にペイントして浮かべあがらせるという手法だった。このスタイルは以降、岡田山に移転するまでの間、神戸女学院の校舎の基調スタイルとなる。外壁のペンキ仕上げを壁面と「棒状」の部分との二色に塗り分けることで、「軽さと明るさと鮮やかさ」³⁹⁾を表現するスタイルだった。バルーン・フレーム構法⁴⁰⁾の骨組部材を露出させるというコンセプトから始まったこのスタイルは、19世紀後半の米国東部で流行する。スティックという名称は、「棒状」という意味から来ているが、その起源⁴¹⁾はスイス風コテージや初期ゴシック様式を模倣したコテージにあったとされる。

細部の意匠を観察すると、玄関部の軒下に装飾的な持ち送りが確認される。また開口上部のラインが弓形になっている点も特徴のひとつである。足元の煉瓦の基礎は出隅部は白色の隅石があしらわれていた。

なぜ、このようなスタイルが神戸女学院校舎に出現したのだろうか。このスタイルはこの時期に米国での建造物に一般的な手法であったことと関連する。明治前期の日本でも北海道や東北など北日本では早い時期から導入⁴²⁾されていた。明治11(1878)札幌時計台(旧札幌農学校演武場)を嚆矢として、明治12(1879)年の山形の済生館本館、明治13(1880)年の札幌の豊平館があり、明治17(1884)年以来、文部省管轄の官立学校建築でも用いられることになる。その建築を代表するものに、明治23(1890)年に完成した東京音楽学校音楽ホール⁴³⁾がある。このように、スティック・スタイルはコロニアル・スタイルや漆喰塗りによる擬洋風のスタイルに続く、次の時期の建築スタイルとして、現われる。なお、この講堂は煉瓦造の新講堂建設のために、明治39(1906)年に解体され、その部材でもって、雨天体操場の新築がなされた。

③共通するもの

こうしてみると、ひとつの校舎が機能を果たし用済みになっても、その解体した部材を再度組み立て直し、別の建物に再生されるということが、神戸女学院のなかでは日常におこなわれていたことがわかる。最初は第二校舎が西舎に、次に東舎が尚^{しょうけい}装館に、そして講堂が雨天体操場へと、それぞれ生まれ変わる。これはなにも神戸女学院に限っての現象ではなく、戦前期までの日本における一般的な建設形態のひとつだった。そのことが容易におこないえたのは、この時期まで大半の建築が木造であったことを理由とする。

第二期の設計者は両者ともに、現時点では判明しないが、後者についてはオルチンの可能性も考えられる。

3) 第三期(明治26年から明治30年まで) — 理化学館・音楽館・尚^{しょうけい}装館

第三の時期はキャンパスというもののありようが、神戸女学院においてようやく考えられはじめた時期と推測できる。それは明治26(1893)年に完成する理化学館・音楽館の2校舎に端的にうかがえる。このふたつは木造洋風建築ながらも、塔がそなわった華麗なものであって、それらは「港都の新名物」⁴⁴⁾と称された。このような校舎出現の背景には、三年制の高等科に相応しい外観と内実が校舎に求められたことが関連する。このふたつの出現によって、山本通のキャンパス風景は大きく変容する。

①理化学館

八角形の塔を併設していた点に理化学館の外観上の最大の特徴がある。写真27にみられるように、その塔屋はドイツ・バロック風に影響を受けた、曲線でうねるカーブをみせ、その屋根の四方向にドーマー窓⁴⁵⁾が設置されていた。その内には半鐘が吊下げられ、時刻を報じた。つまり火の見櫓や時計塔のような機能を有した。四層分の高さを誇ったこの塔屋は、赤茶色の素材でつくられ、神戸女学院の学舎の目印となる。頂点には頂華という装飾が付いた。ドーマー窓に注目すると、渦巻形彫刻の破風板が見出せる。それは19世紀中期に米国で流行したカーペ^{カー}ンター・ゴシック⁴⁶⁾という、住宅を装飾する手法に影響を受けたものだった。

この建物は塔屋、三階建の主要部、平屋建ての付属屋、の3つから構成されるが、いずれもが一階でつながり、同一の建物である。3つの差異は屋根の形状にもっとも大きく表れており、屋根のスタイルを観察すれば、塔屋は凹面マンサード屋根で、瓦葺きではなく、スレートもし

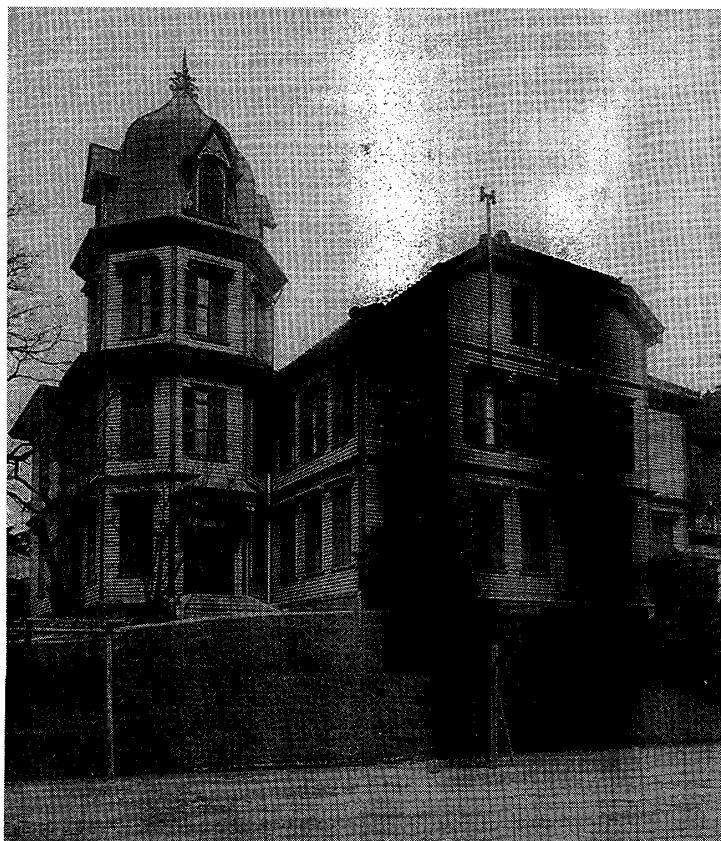


写真27 「理化学館の外観」

くは金属板で葺かれた可能性がある。三階建の主要部は半寄棟屋根⁴⁷⁾で、棧瓦葺きとなる。平屋建ての付属屋は切妻屋根で、棧瓦葺きであるが、切妻屋根の両側に換気用の越屋根を合計6つ掲げていた点に特徴があった。すなわち、この平屋建ての付属屋の教室が実験をおこなう部屋であったことがわかる。

平面図⁴⁸⁾(図11)からは、塔屋の下が玄関ホールになっており、そこはまた階段室を兼ねた。階段は八角形の塔の形状に沿ってしつらえられ、写真28からも判別できるように階段親柱の形状はゴシックの意匠をしめす。平面構成をみると、一階は7教室、二階は6教室とひとつの教員室からなる。三階についての図面は未発見ゆえに、その内容は不明だが、ふたつの教室は十分に取れる広さがあったものと思われる。また、塔屋の三階、あるいは四階の部分についても詳細はわからないが、眺望室などが設けられていた可能性がある。

ではなぜ、突然、理科教育をおこなう専用校舎が出現したのだろうか。たしかに高等教育への指向は高等科設置以降により高まるものと考えられるが、その背景には三年前の明治23(1890)年に、建築家・ハンセル⁴⁹⁾の設計したハリス理化学館(図12)⁵⁰⁾が同志社に完成していたことが関連する。それはわが国私学の最初の、科学技術を専門とする高等教育機関の誕生であって、キリスト教主義学校、とりわけ同じアメリカン・ボードの影響下にある数少ない学校のひとつ、神戸女学院に及ぼした影響はきわめて大きなものがあったと、想像できる。

また興味深いことに、ハリス理化学館は煉瓦造の建築であったが、神戸女学院の理化学館と同じく、八角形の塔屋⁵¹⁾が天文台として当初設けられていたことや、神戸女学院と同様に付属屋が実験室になっている点など、木造と煉瓦造の違いはあったもののプランや形態の上でも、



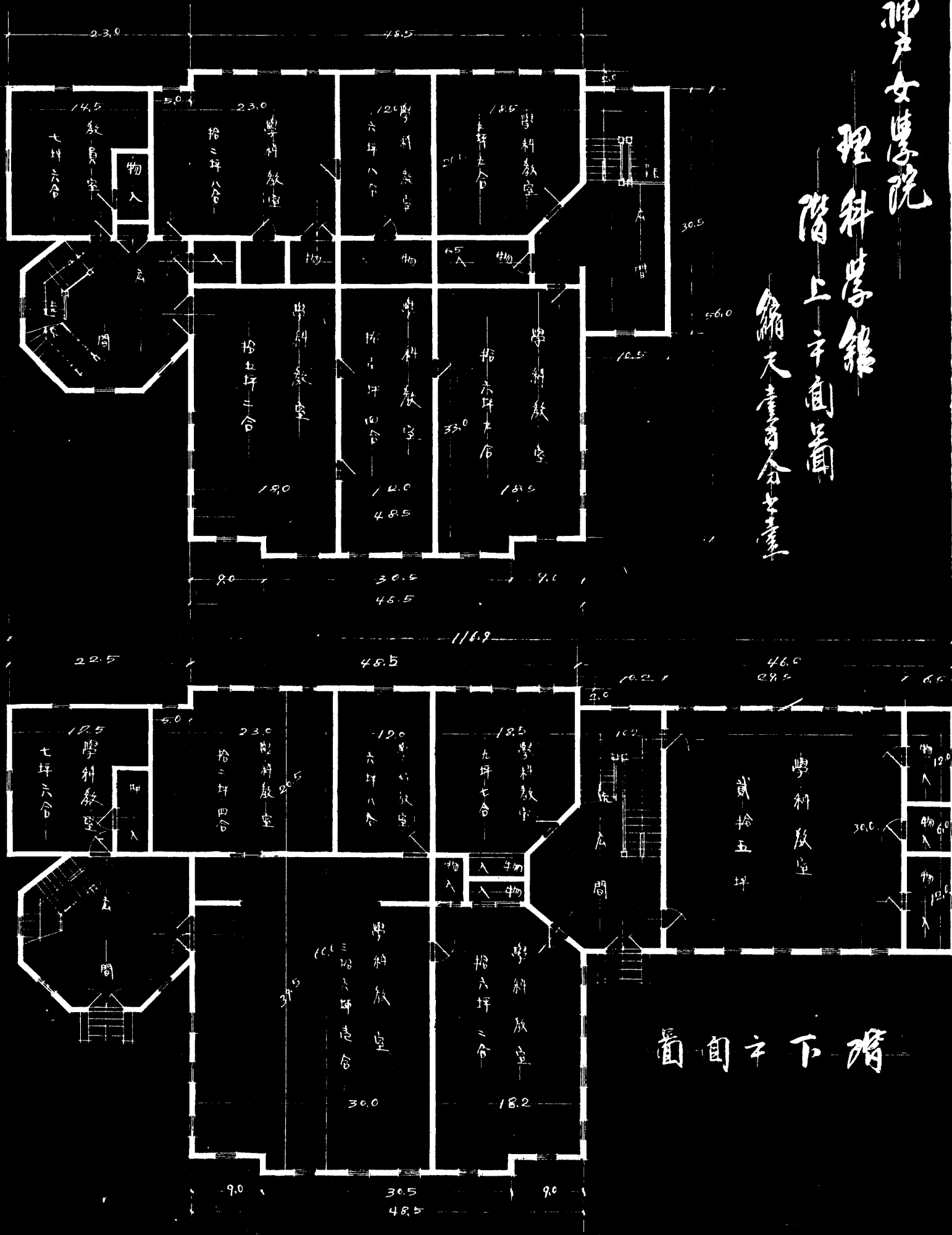
写真28 「理化学館 玄関ホール」

神戸女学院

理科學館

階上平面圖

縮尺 1/1000



階下平面圖

図11 「理化学館の平面図(一階・二階)」

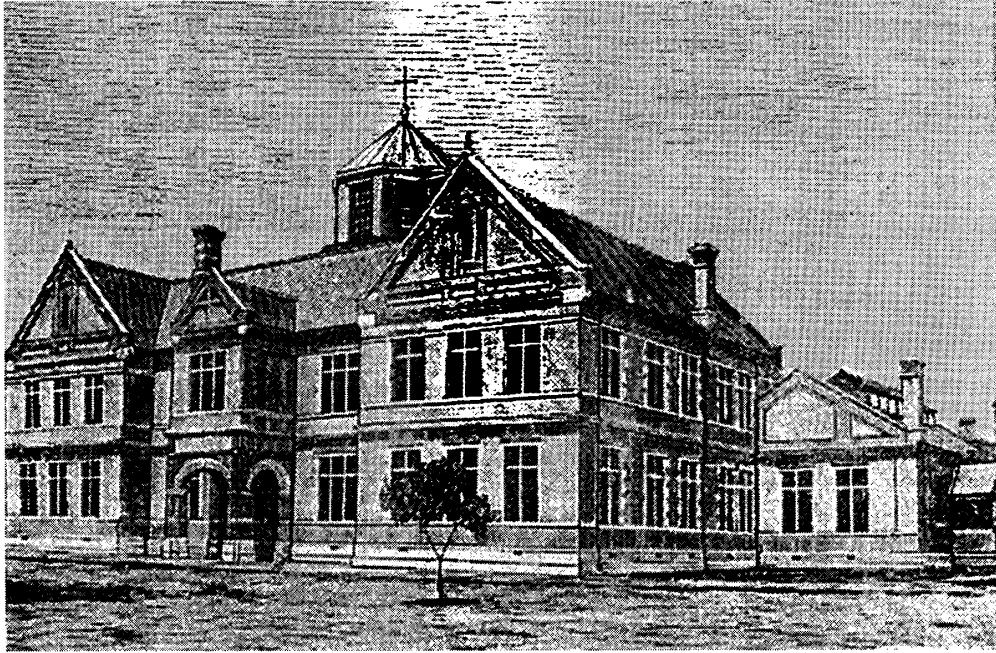


図12 「建設時の同志社・ハリス理化学館」

ハリス理化学館は神戸女学院の理化学館のモデルとしての役割を果たしていたものと捉えることもできる。

このような理科教育の専用棟を有したことは、神戸女学院をわが国の女子高等教育の先頭に立たせることになった。

②音楽館

音楽館は理化学館と同じく塔を有したが、その形状は六角形であり、急勾配の傾斜屋根だった。写真29に示した外観写真からは、ドーマー窓等の設置はなく、いたってシンプルな印象を受ける。その高さは三階建の上部にそびえる。この塔屋もまた、赤茶色の色彩でもって神戸女学院の学舎の目印のひとつとなる。塔屋の軒のフリーズ⁵²⁾部分には装飾が施されていた。その真下、玄関部ポーチの上部の二階には彫刻された手摺り子が連なるテラスが設けられ、エントランス廻りをより格調高い空間にみせる演出がなされていた。模型写真(写真13)ではテラスはなく、塔も細い形態になるなど実際の写真と少し異なる。その相違については模型制作に際し、正確に復元されなかったものと考えられる。

この建物は塔屋、三階建の主要部、主要部に直交する三階建の翼屋部分、二階建ての車寄せにつながる導入部、の4つから構成されるが、いずれもが内の広間などを介してつながり、理化学館以上に一体化した建築となる。屋根の形状をみると、塔屋は瓦葺きではなく、スレートもしくは金属板で葺かれたものと思われる。三階建の主要部は切妻屋根で、棧瓦葺きとなる。同じく主要部に直交する建屋もまた切妻屋根で、棧瓦葺きとなる。北側の向上館側からのこの建物へのアプローチは、この建物が傾斜地に建つために、地盤の高さが北側では高くなり、二階の高さで地盤に接するために、このような二階の位置での車寄せとなった。

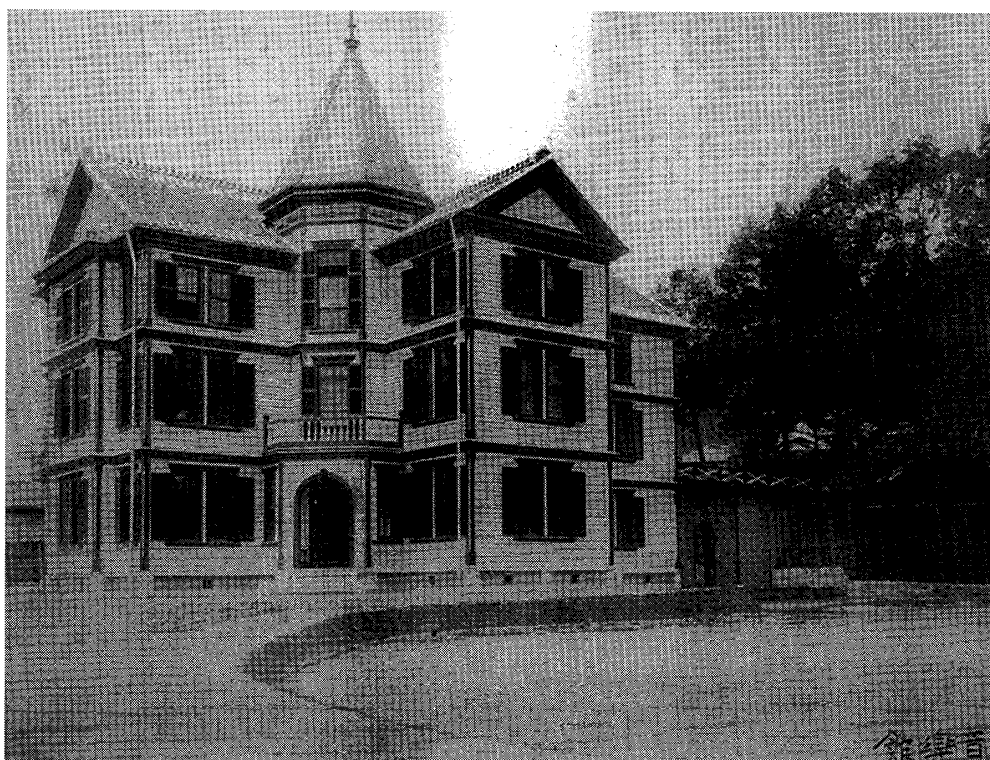


写真29 「音楽館の外観」

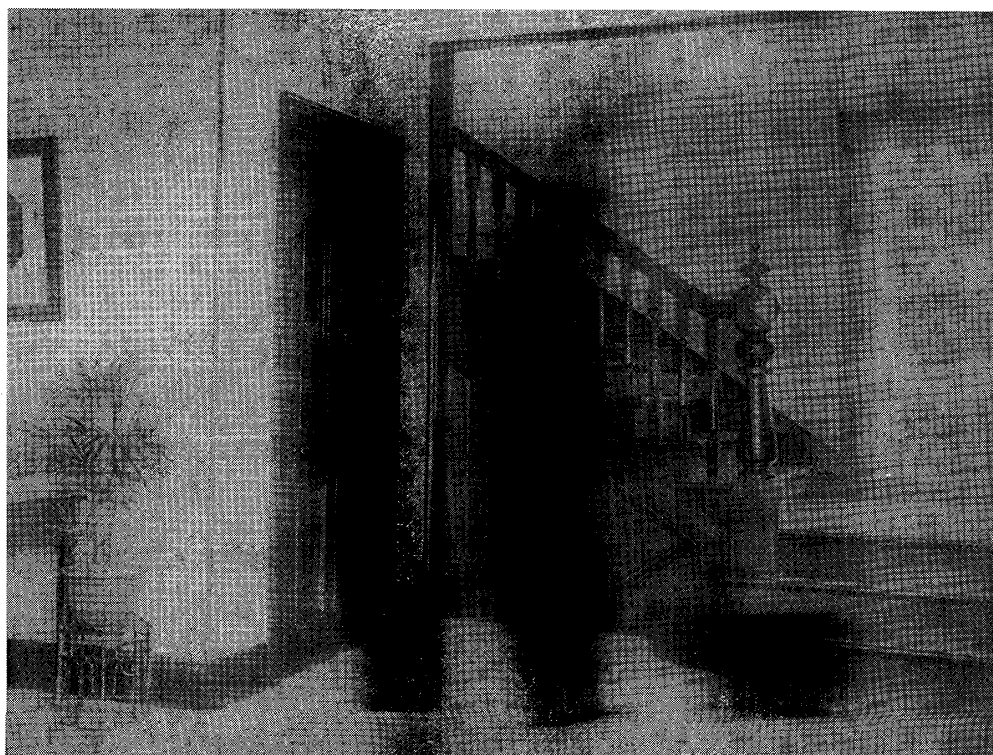


写真30 「音楽館 玄関ホール」

次に平面(写真13)をみると、塔屋の下が玄関になっており、そこは広間と称されるが上階へつながる階段室(写真30)でもあった。現時点で一階と三階の平面図が見出せていないため、一階と三階のプランについては不明だが、二階については図面が発見されており、それによれば、7つの小部屋の練習室、広い唱歌室、生徒控え室、教員室が配されていた。

このような音楽教育専用棟の出現は、関西では最初のものであり、わが国では三年前の明治23(1890)年に竣工した東京音楽学校に次ぐものであった。

③理化学館と音楽館の共通点

以上みてきた理化学館と音楽館は、塔屋の形状に端的にうかがえるように、一見、建物の形態に大きな違いはある。が、建築学的視角にたてば、その構成要素は共通していた。そのことは設計手法がおなじであったことを意味する。ホルブルックというひとりの設計者がほぼ同時

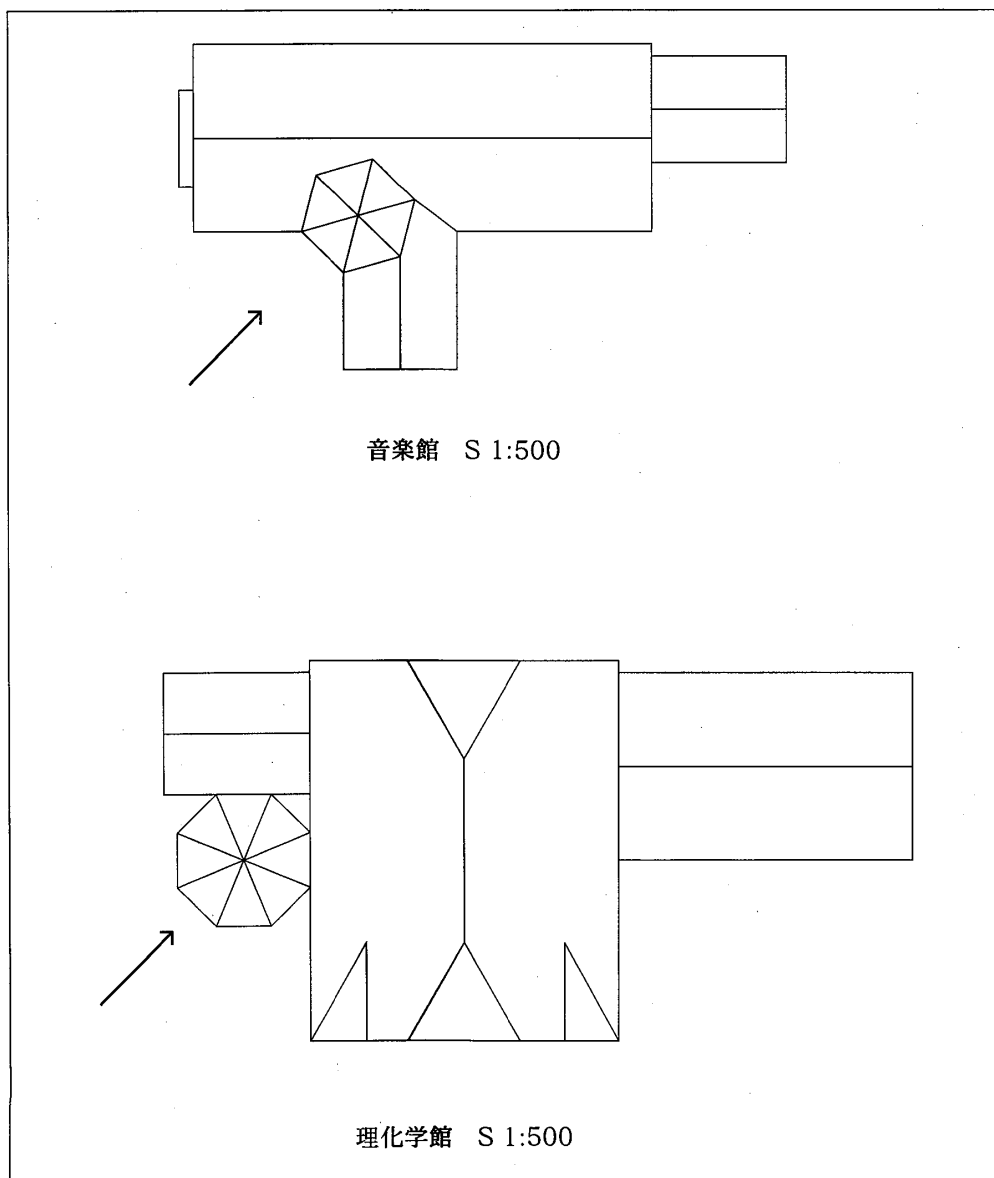


図14 理化学館・音楽館の屋根状図とアプローチ方法の模式図：筆者作成
「矢印は玄関部への動線を示す」

に設計をおこなっていたことを考えれば、そのことは理解されるだろう。共通点は大きく分けてふたつあり、ひとつは平面計画上の手法、もうひとつは外観意匠、である。

前者からみると、共通して玄関ホールの上部が塔屋になっていた点に特徴がある。平面的に主要部の棟の屋根地からあらたに棟を直交して突き出し、翼屋がつけられる。ただし、両側に付くのではなく、片側に一棟だけが取り付く。その結果、交差部の外側に入隅部分が生じる。そこに塔をもうけ、その下を玄関部とする手法が用いられていた。すなわち対角線を軸線と仮定し、その軸線の左右対称形に建物を配するという方法であった。そのことは図14のような模式図にまとめることができる。このようなアプローチの仕方は左右の棟の中心に位置する玄関部に向かって視線が収斂していくことで、自然な動線を得るという計画上の利点があった。つまり塔屋がアイ・ストップとなる。それは、一点消去法という透視図法を応用したものともいえる。建物正面に配された車寄せからの導入という、一般的なアプローチの手法と比較すれば、コーナー部が玄関という機能だけに限定されることによって、より包み込まれた気分のなかで建物に導かれるという効果が狙われたのだろう。このようなプランニングはこのふたつの建物以外には神戸女学院は有していない。

このような手法を用いた建築は、大正15(1926)年に完成した長崎の活水女学院本館⁵³⁾に現存する。そこでは神戸女学院の理化学館や音楽館と同様に、棟と棟がL型に交差する場所に塔屋が設けられていた。

後者の外観をみる。前節でみた講堂と同じく、理化学館と音楽館では共通して、木造下見板貼のスティック・スタイルが採用されていた。前述の講堂との差異は、窓開口部廻りにあって、ここでは鎧戸が付き、霧除けの庇が取り付けいていたことだ。

外観上のもっとも大きな特質は、塔の存在にある。このような塔屋をもうけるスタイルとは、1880年以降、米国中を席卷したクイーン・アン⁵⁴⁾のスタイルの特徴のひとつだった。おそらくは、そのような建築様式の影響を受けて、塔屋がつけられたものと考えられる。その理由を、筆者は次のように推測している。スティック・スタイルだけでは、建造物としての魅力に欠ける。外観上、劇的な要素が乏しい。そのような平板的なファサードを変じるために、クイーン・アンの有した華麗な意匠が求められたのだろう。ちょうどこの時期には、住宅など比較的小規模な建築にも塔をもうけ、外観を重視したスタイルへと、建築の方向性に変容が生じつつあった。それは1875年以降に米国で流行する盛期ビクトリア・ゴシック⁵⁵⁾からスタートしたともいえるが、ある意味でそれを引き継いだクイーン・アンでもっとも華やかなものとなる。ここでは、円錐形、多角形などの塔が、主に出隅部分などの角部に設けられた。

クイーン・アンの構造的な特徴として、木造という構造手法の採択がある。したがって、標準的な外壁の仕様は水平下見板貼とされた。木造ゆえの長所は二点あって、ひとつは建設期間が短いこと、もうひとつは安価な建設費で建てられるということだった。このふたつの長所は、華麗な装飾を建築に纏わせることをいとも容易く可能とした。さらにそのことは、クイーン・アンを20世紀の初頭までの米国にもっとも幅広く普及するスタイルとした。

ならば、クイーン・アンの建築が、1880年以降の米国の人文的景観のなかで、日常的にみら

れる住宅のひとつとなっていたものと考えられる。おそらくは、そのことに着目したのが、設計担当者・ホルブルックだった。ホルブルックについては、次章で詳述するが、正式な建築家ではなかったために、却ってこのようなポピュラリティに満ちた建築スタイルを、校舎の意匠としてそのまま持ち込むことができたのではないかと、筆者は推測する。

ここでの二棟の建築と、同時期に建設されたわが国官公立学校との一番大きな違いは、後者が左右に翼部を設けるなど、シンメトリーを強調し、ルネッサンスやバロックに影響を受けた古典的な平面計画を有するのに対し、この二棟の建築は平面的に非対称⁵⁶⁾になるなど権威的な要素は少なく、プロポーションにおいてもより住宅に近い建造物といえる。このことはひとり神戸女学院だけにみられた現象ではなく、明治期の私立学校には一般的な傾向であったといえよう。

なお、このようなスタイルを有した建物のひとつに、明治39(1906)年に建てられた弘前学院外人宣教師館⁵⁷⁾があって、多角形の塔を設置するなど多くの共通項をみることができる。現存事例としては、理化学館や音楽館にもっとも形態上近い建築として挙げられる。

④理化学館と音楽館の背景

この時期の他校の様相をみると、大阪・川口居留地に展開された明治24(1891)年に完成するプール女学院の校舎は煉瓦造で、神戸の居留地や雑居地の数多くの洋館をつくったハンセルの手によるものであった。街路に面した外壁は煉瓦によって構成されており、欧米の町角にあってもおかしくないような景観を演出していた。同じ組合教会派に所属する京都の同志社では、明治17(1884)年に煉瓦造の彰栄館(講堂で設計・グリーン⁵⁸⁾)が竣工するのを嚆矢として、明治19(1886)年に煉瓦造のチャペル(設計・グリーン)、明治20(1887)年に有終館(書籍館で設計・グリーン)、明治23(1890)年にはハリス理化学館(設計・ハンセル)が、明治26(1893)年にはクラーク記念館(設計・ゼール⁵⁹⁾)と、次々に塔屋が付いた華麗な煉瓦造建築⁶⁰⁾が竣工し、それまでのキャンパスの風景は一新する。

神戸女学院の理化学館と音楽館は同じアメリカン・ボードが関与するこのようなキリスト教主義学校での校舎整備の動向とはけっして無縁ではあるまい。神戸ということでは当時、神戸市外の郊外であった原田の森に明治22(1889)年に設立される関西学院は、まだこの時期には木造二階建ての寮を兼ねた校舎ひとつを有したにすぎない。のちに数多く建設される煉瓦造の校舎はもちろん、塔屋のあった本館とよばれた木造建築は未だ出現していない。この関西学院の本館は木造二階建てで、中央部に三角形破風と塔屋を設置したスタイルであった。

同志社では宣教師グリーンだけにとどまらずに、建築家でもあったハンセルの手による本格的な、しかも煉瓦造という半永久的な建築が建設される。なぜ、神戸女学院ではそうではなく、しかも建築家によって設計が成されなかったのだろうか。

⑤設計と施工の経緯

設計者はホルブルックについては後に詳述するが、明治25(1892)年以来、神戸女学院教員として赴任しており、動物学を専門とし、理科教育を担当した。

この時期の校舎については、ソールによる興味深い書簡⁶¹⁾が残されている。そこからは当時の建設経緯の一端がうかがえる。次に引用する。

両棟の美しさとその用途への完き適応とは、他のどなたよりもまずホルブルック博士に負うものでございます。女子は、最初の設計図を引くことから支払いの完了まで、間断なく、あらゆる細部にご配慮下さいました。オルチン氏も偉大なる助力者でいらっしゃいました。(中略)勾配をつける、芝を植える、排水をするという仕事に手と頭を使ってこの上ない有用な奉仕をして下さいました。建築家の吉田氏についても申し上げないわけには参りません。氏は御自分の商売を御自分の信仰と切り離して考える方ではありません。そして氏がこれまでに手がけた最大の建物二棟によって、氏御自身と御子息のために究極の名声を博されたのです。(訳、若山晴子)

ここで登場する吉田氏とは請負をおこなった大工棟梁だと考えられるが、史料的な制約があり詳細は不明である。だが、明治37(1904)年に関西学院原田キャンパスで建設されるブランチ・メモリアル・チャペルの施工を、吉田伊之助⁶²⁾が担当しており、おそらくは同一人物だった可能性がある。またオルチンが庭園に関して設計施工を担っていたことがわかる。

⑥^{しょうけい}尚裴館の和風スタイル

このような洋風意匠を基調としたキャンパス景観のなかに、ただひとつ和風意匠の校舎(写



写真31 「尚裴館(1897年)の外観」



図15 尚裴館・家齋館の平面図1(一階)



図16 尚裴館・家齋館の平面図2(二階)

真31)がつくられる。明治30(1897)年11月20日に竣工する。木造二階建ての住宅クラスの規模の建物で、二階建ての主要部と東側に突き出た浴室部分である平屋建て付属屋からなる。屋根は瓦葺きで、外壁は縦張の板壁と土壁仕上げだった。意匠的特徴としては、格式が高いとされた入母屋⁶³⁾屋根となるものの、そのほかは至って簡素な外観をしめす。

平面図(図15. 16)からは、一階は床の間付きの和室が3室に、炊事場や浴室からなり、二階は1室だけが床付きの和室、他の3室は床なしの和室だったことが読み取れる。つまり図面上はこの時期の、日本の一般の住宅と同内容のものと捉えられる。用途としては、日本式の作法、裁縫、家事など家政関係の特別教室として使用することを目的としたが、実際にはくわえて同窓会や親睦会など社交的な空間としても機能した。建設費については卒業生などからの寄付を中心にしてまかない、木材などの建築部材は解体された東舎の用材が用いられた。

なお、この平面図には縁側廊下が記されており、洋風に改装する前の様態をしめすものとも考えられるが、大正3(1914)年にできる家齋館と同一の図面に記されていることから、大正3(1914)年にまでは、このような縁側のある形態を有していた可能性もある。

ではなぜ、洋風建築の一群からなるキャンパスでは異物のような「和風」のスタイルが、唐突に出現したのだろうか。

このような意匠が採択されたのは、二つの理由が考えられる。第一は、作法や裁縫、料理など「日本」の習慣と深く関連する教育にふさわしい内容ゆえに、「日本」風が求められたものと推測される。第二としては、卒業生をはじめとする有志による寄付金でもって、この建物が建設されたことによるものと考えられる。つまり、建設費がアメリカン・ボードの資金によるものではなかったために、それほど厳しい制約がなかったのだろう。そのため、建築スタイルについても自由度が高く、「吾國風の建物」⁶⁴⁾をつくることができたと推理することができる。

また、このような意匠の誕生の背景には、日本中に共時する「近代和風」⁶⁵⁾という和風をより過剰に演出した建築スタイルの爆発的な流行が関係する。尚褻館という一般の住宅に近い建物は唐破風や千鳥破風の屋根が付き、玄関式台や車寄せなどによって豪華さを競った近代和風というカテゴリーとは一見異なるようにも見えるが、このような「和風」スタイルが明治20年代後半より復活するという、時代的な背景もなんらかの影響を及ぼしていたものと考えられる。明治20年代後半という時代は、条約改正の失敗、教育勅語の下賜、そして日清戦争と、「日本」というもののアイデンティティが強く意識される時期にあたった。ここで現われた、取るに足らないような小さくて簡素な建物でさえも、「皇国風」⁶⁶⁾と称されていたことに、そのような「意識された日本」の影をみないわけにはいかない。

同時期には、公立小学校の過半が「近代和風」という建築スタイルに変容していったという歴史的な事実⁶⁷⁾がある。それは小学校だけではなく、公会堂や役場、裁判所などの地域の公共建築のひとつのスタイルとなっていた。

さらに生徒や卒業生のメンタリティの問題が関連する。竣工時の同窓会の祝歌⁶⁸⁾では次のようにうたわれた。

音楽館理科館などいづれも外国ふうなるに今度新築せられしは皇国風なるよしききてあたらしき軒端を見ればふるさとの家にかへりしところこそすれ

この時期、神戸女学院には華麗な洋風スタイルの校舎が次々と建設されたが、一步神戸女学院校地から外に出ると、すぐにふつうの日本の家々からなる市街地が広がった。また多くの生徒や卒業生にしても、そだち、物心の付いた家とは皆、木造の和風の建築だったから、このような無意識下の「本音」が吐露されたのだろう。

⑦^{しょうけい}尚裴館の洋風化

この和風校舎は早くも、明治33(1900)年1月⁶⁹⁾、もしくは明治38(1908)年1月⁷⁰⁾には洋風意匠に改装されることになる。その時期についてはこの二説があり、そのどちらが史実なのかは判断材料に欠けるために特定できない。しかしわずか二年余で改築するだろうかという疑問も湧く。が、いづれにしても前説でわずか二年あまり、後説でも七年間という時間しか、和風スタイルは続かなかった。

神戸女学院の創立五十年を記念して刊行された『神戸女学院史 明治八年大正十四年』⁷¹⁾によれば、「外部は凡て洋風に改築し、唯内部だけを従来のままに保存する事にした」とある。その改築費は千三百七十円がかかっていた。この建物の最初の建設費が、千五百七十三円だったことを考えれば、建設費に匹敵する費用を費やして、改装がなされたことがわかる。しかも内部をいじらないで、外壁や屋根、窓廻りだけでこのような工費がかかっていることから、洋風仕様が当時はいかに高額なものであったかがうかがえよう。

どのように改装されたのかは、改装後の写真など外観が判明する史料に欠けるために、詳細は不明だが、山本通キャンパスの模型(写真16、17、18)からは、次のようなことがわかる。屋根は切妻、外壁は下見板貼という神戸女学院木造校舎の基調デザインであるスティック・スタイルという洋風意匠だった。いつの時代の改装かは定かではない。

模型に見る変更点は、まず入母屋屋根が切妻の形状に変わる。次に和風の時期は縁側になっていた南側の下屋およびに、そのなかの縁側を無くし、そのまま二階の外壁を真下におろした位置で一階の外壁がつけられた。そして腰壁が立ち上げられ、窓台の高さは洋風建築のプロポーションに変えられた。外壁は下見板貼、ペイント仕上げとなり、窓も洋風につくり変えられた。その結果、のちの大正3(1914)年につくられる家齋館と双子のような形状の建物になる。時間軸からは、むしろ家齋館が尚裴館に合わせてつくられたものと判断される。

なお、この模型は岡田山キャンパスに移転する直前の山本通キャンパスを再現していることから、大正3(1914)年以降、昭和8(1933)年までの間に再度改築がなされたのかもしれない。ただし管見のかぎりにおいては、そのような史実は発見できておらず、模型制作の際に、正確に復元できなかった可能性もある。

尚裴館の設計者は定かではないが、おそらくは日本人の大工棟梁によるものと思われる。一方洋風意匠への改装については、どちらの説を取るにしても、オルチンが関わっていたものと

推測される。オルチンについては、後に詳述するが明治33(1900)年には神戸女学院の校舎の建設ならびに改修担当者になる。このような時間的な一致を考えれば、オルチンが尚裴館の改装の設計を担当していた可能性が高い。

オルチンの関与を裏付けるものに、明治33(1900)年八月の敷地周囲の塀の整備があった。神戸女学院では洋風意匠をベースとして、学舎のイメージが形成されつつあった。洋風意匠への改装はこのようなキャンパス整備事業の一環にあったと捉えることもできる。すなわち、和風スタイルでは全体のキャンパス・イメージにそぐわないということで、洋風意匠へと変じる必要が生じていた。

4) 第四期(明治39年から大正11年まで) — ^{ほうこう}葆光館・講堂・雨天体操場・家斎館・向上館

第四期は明治40(1907)年前後の時期で、大規模木造校舎と煉瓦造の講堂が建設される。このふたつの設計はオルチンとホイテだった。このような校舎整備は、明治42(1909)年の専門部と普通部の認可申請を見越しておこなわれた。そして実際に有利に働いたものと考えられる。大正期に入ると家斎館、向上館が建設される。

^{ほうこう}①葆光館

建築概要

明治39(1906)年に完成する。木造二階建てで一部が屋根裏を利用した三階建てになる。コの字の平面を有し、11の教室と教員室、応接室からなった。普通部専用の校舎として建設された。昭和34(1959)年まで、神港学園の本館として使用される。

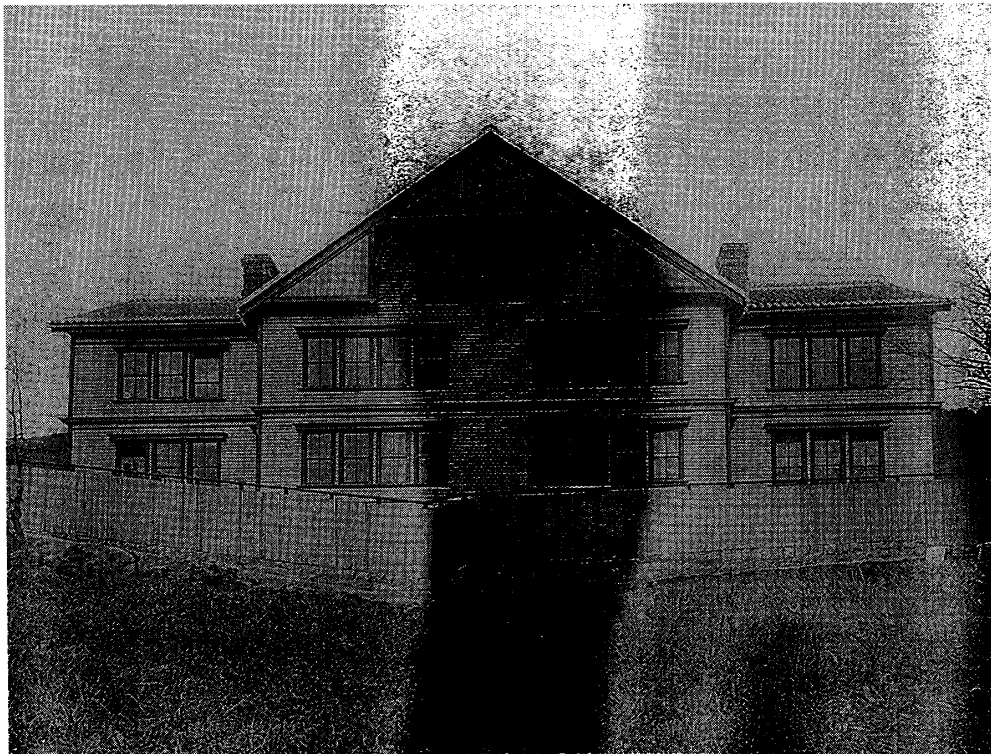


写真32 ^{ほうこう}「葆光館の外観(南面)」



写真33 ^{ほうこう}「葆光館の外観(北面)と運動場」の絵葉書

外観スタイル

外壁は下見板貼である。写真32、33からは南京下見ともよばれるイギリス下見板貼なのか、それとも水平目地がとられたドイツ下見板貼なのかは、判別はできない。基調となる下見板貼の外壁は黄色のペイントが塗られ、額縁をはじめコーナー部分の出隅、一階と二階、二階と屋根部分をそれぞれ分かつ水平のストリング・コース部分には、黄色と対比的に赤茶色に塗られることで、壁面が分割される。

小屋組の破風の部分は切妻となり、南側にはハンマービーム⁷²⁾・トラスが破風を装飾的に飾り、北側の破風は3ヶ所ともに一本の束が立つという簡素な意匠になる。基礎は煉瓦が表わしのまま用いられていた。

この校舎のスタイルと共通する建物がこの時期、大阪に出現していた。明治41(1909)年に完成した梅花女学校であり、同一の宗派の組合教会派^{ほうこう}だった。設計者は神戸女学院葆光館を設計したオルチン^{ほうこう}だった。オルチンは梅花女学校の理事でもあって、設計に深く関わっていた。この校舎は大阪市中で目立つ建物として次のように新聞⁷³⁾に紹介された。

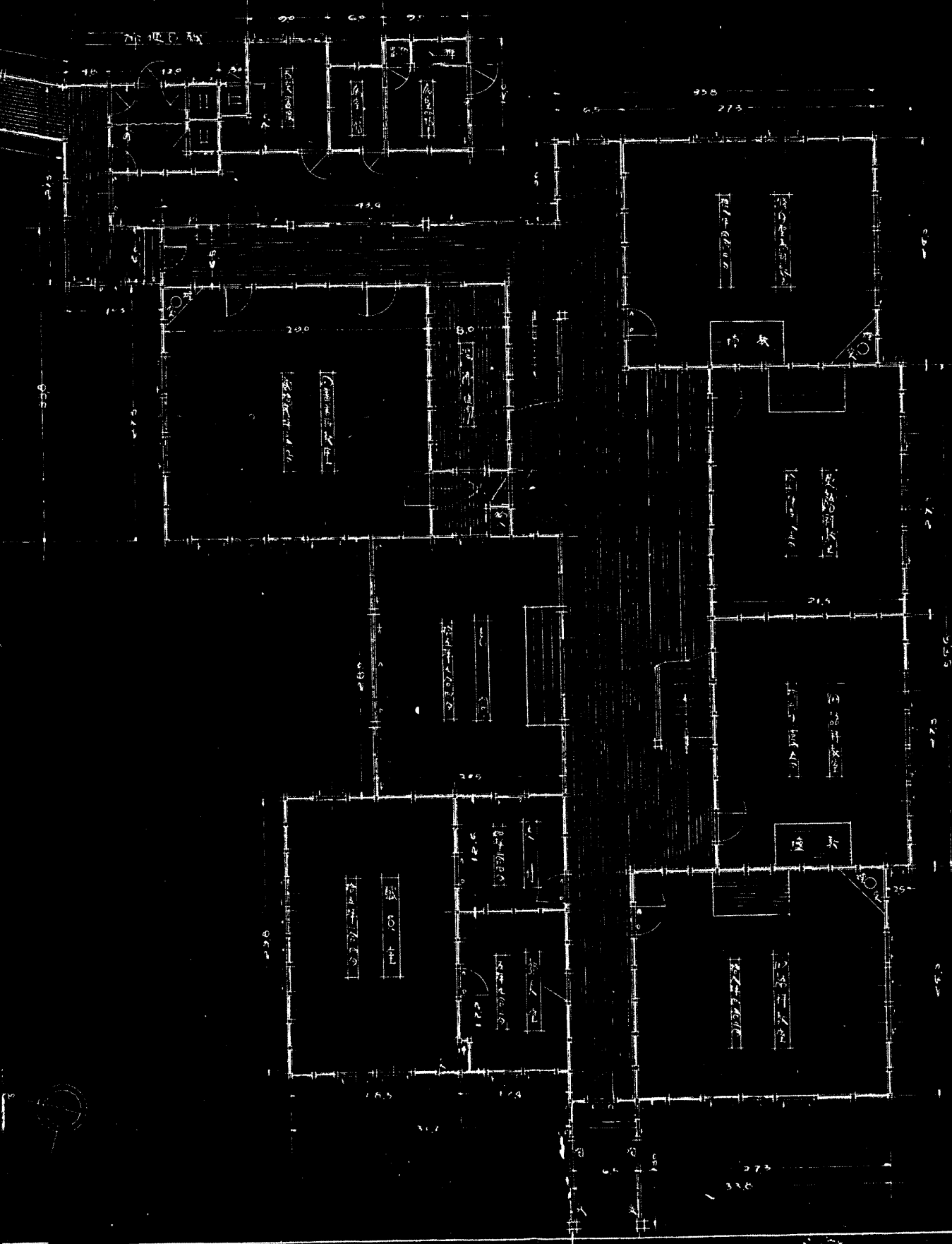
赤いスレート屋根を持つ黄色い建物が大阪の注目すべき景色のひとつであることは間違いない。米人オルチン氏が素人ながらこれを設計した。この、大きな、人目をひく、先端的な女学校

外壁の仕上げや見切り材と下見板を塗り分ける手法など、多くの点で葆光館^{ほうこう}と梅花女学校校舎は共通した。異なったものに、屋根の仕上げがあり、葆光館^{ほうこう}の屋根は棧瓦という日本では一

神戶女学院光館之圖

編尺壹分ノ圖

假収信存合



第一階平面圖

図17 光館の平面図1 (一階)

神戸女学院石見館二階平面図			
区分	床面積	床面積	床面積
洋館	155.67	141.47	22.30
廊下	8.08		
洋下	9.71		
洋下	14.39		
洋館	191.85	洋館	355.77

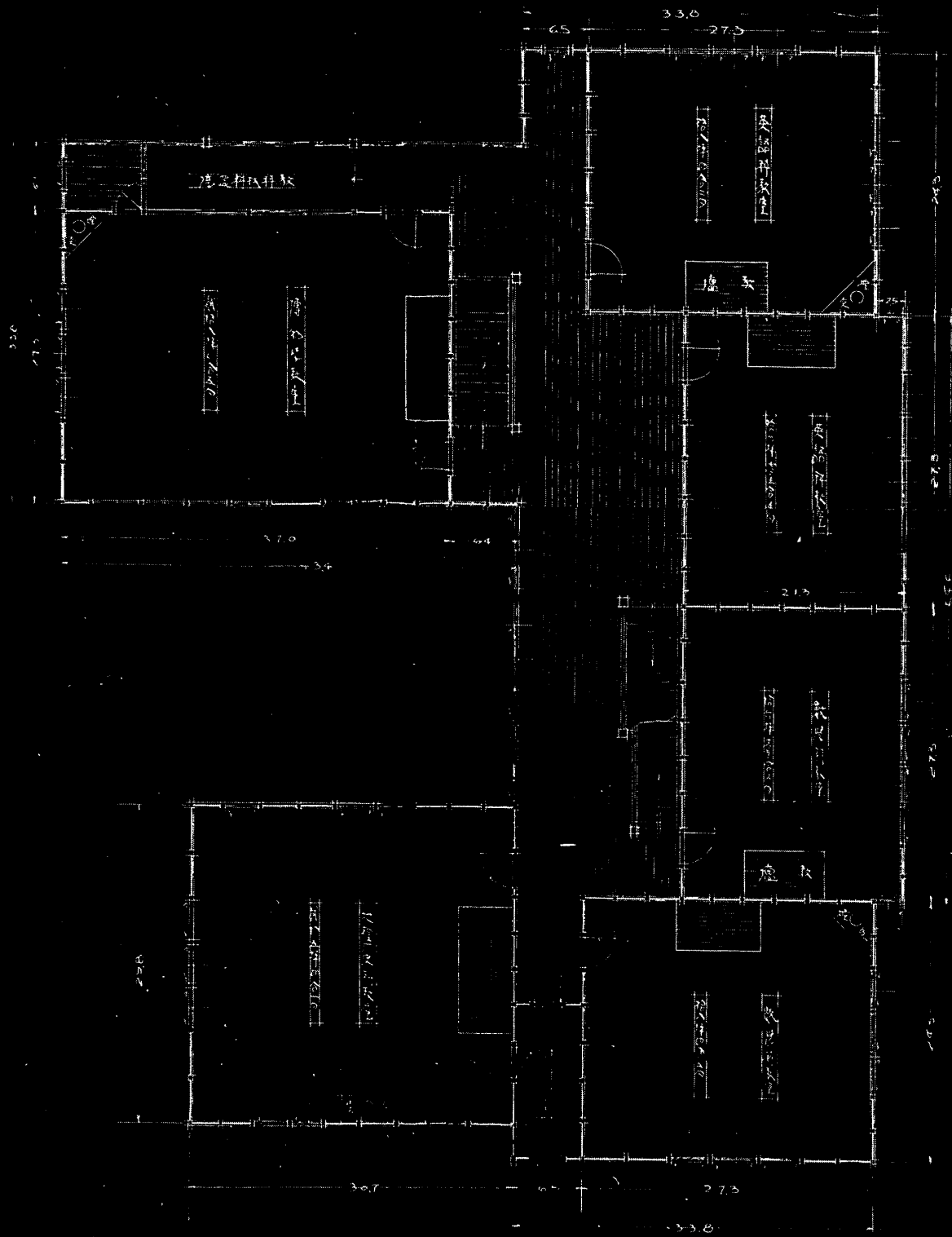


図18 石見館二階平面図

図18 石見館の平面図2(二階)

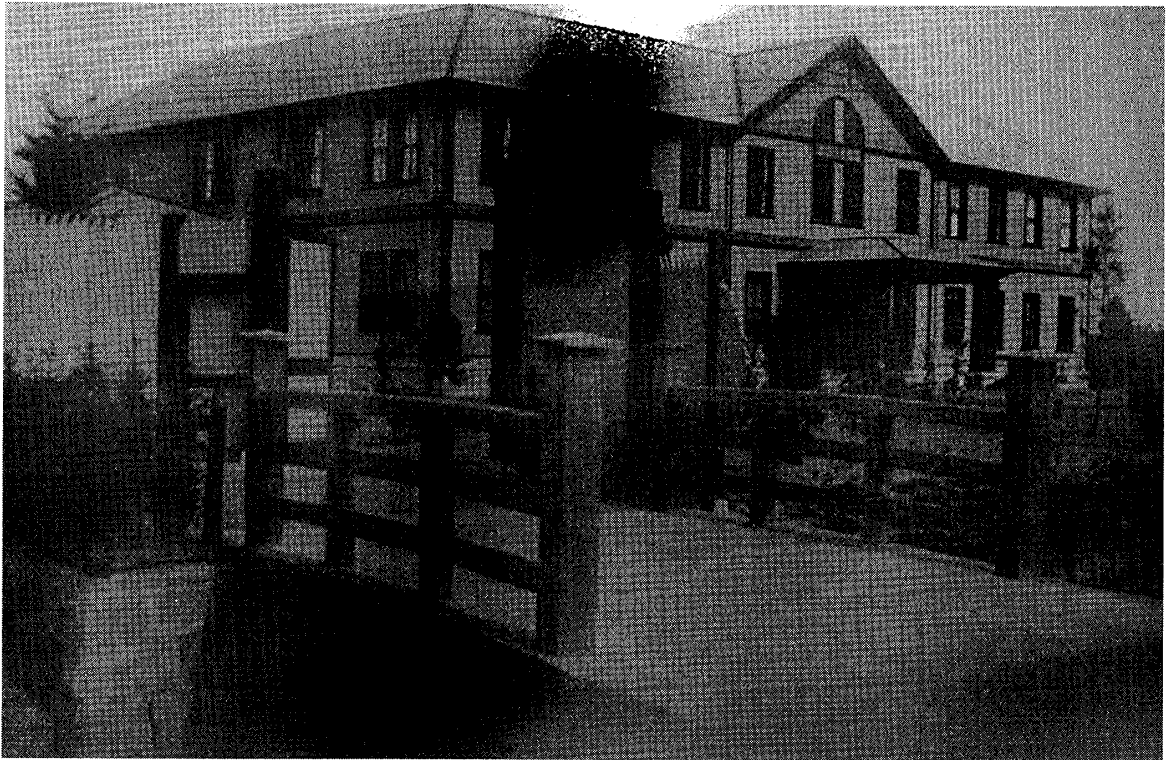


写真34 「梅花女学校・北野校舎の外観」

般的なものだったが、梅花女学校では人造スレート葺き⁷⁴⁾であった。

このような建築スタイルはすでに論じたように、スティック・スタイルと呼ばれた。前節でみた理化学館や音楽館ですでおこなわれており、その手法がここでも採用されていた。つまり、平板な壁面にメリハリを付ける意匠として用いられた。このスタイルはその後の洋風意匠に改められる尚装館の改められた建築スタイル、雨天体操場、家斎館でも採用されていた。このような建築スタイルは明治20年代から明治40年代前半にかけては、わが国のキリスト教主義の学校校舎や宣教師住宅に多く観察される。

一方類似する建築スタイルによって、府県立の旧制中学校など官公立学校の校舎がつくられる。その成立はキリスト教主義学校に比べ若干遅れたものの、その分、よりプランの定型化⁷⁵⁾が進展していた。このように考えれば、この時期の神戸女学院の校舎はわが国の一般的な学校とほぼ同様の建築位相にあったものと捉えることができる。

平面

発見できた平面図(図17、18、19)からは、一階は玄関部を中心に左右対称となり、国語科1、英語科1、修身聖書科1、図画書科1、の計5つの教室が配置され、各教室の入隅部分の角に暖炉が設けられていたことが読み取れる。このことから外観上、左右に煉瓦の煙突があったことを裏付ける。二階は数学科2、英語科2、博物学1、地理歴史科1、の計6つの教室があった。3階は国語教育科教室となっていた。

ここでの検討課題に、教室の大きさがある。この建物のなかで一番面積の小さな教室をみると、間口が27.3尺(約8.3メートル)間に直せば4.7間、奥行は21.3尺(約6.5メートル)間に直せば3.7間だった。この面積は文部省が明治37(1904)年にしめた「学校建築設計要項」⁷⁶⁾のなかの小学校の教室の大きさを定めた最低基準の数値、間口三間以上、奥行四間以上を満たしていた。

便所は別棟となっており、長い渡り廊下でつながっていた。水洗便所が普及するまでは汲み取り式便所であり、臭気や衛生面から、建物本体とは離して建てることが多く、ここでもそのような平面計画がとられていた。

②講堂

煉瓦造とスレート屋根

山本通キャンパスでは唯ひとつの煉瓦造建築であったこの講堂は、音楽館や理化学館とならび、キャンパスの顔となる。建築的規模としては、建坪百七十二坪有し、山本通キャンパスでは最大だった。写真35にみられるように傾斜地を敷地としたことで、北側からは二階建てだが、南側からは三階建てとなる。

構造的に垂直方向は煉瓦が積み上げられ壁面を構築するが、屋根直下の小屋組や、一階と二階の間の床など水平方向の部材は、木によって架構されていた。煉瓦造ならではの醍醐味は、一階の平面図から伝わってくる。一階部分は二階と三階の荷重を受けるために、煉瓦の柱が奥行方向・間口方向ともに約12尺(ほぼ3.6メートル)ピッチで入れられており、柱と壁の面積の割合が相当に高かったことが読み取れる。

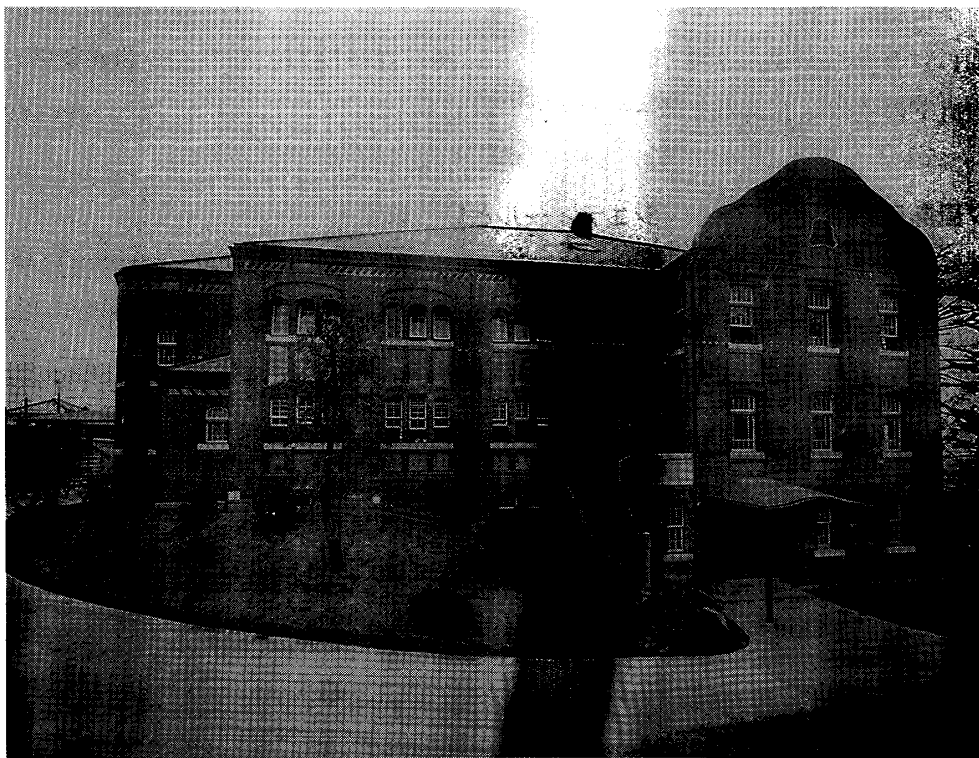


写真35 「講堂の外観(西面)」

屋根形状は寄棟と切妻のふたつがTの字を構成する形が基本になるが、平面形の突出に応じて屋根の形態に変化する。その素材は天然スレート葺きで、しかも鱗状に配されるという、手の込んだものが実現していた。現在では「天然」という名称をスレートの前につけなければ、人造スレート板と区別がつかないが、洋風建築になってはじめて日本に登場した屋根材で、明治期には「石盤」と呼ばれていた。

外壁は煉瓦が表わし仕上げとなる。煉瓦の積み方は小口面と長手面を交互に変えるというイギリス積みだったことが確認される。

煉瓦造というのは木造に比較すれば、およそ2倍以上の工費が必要だったから、今までの仮設的な木造建築と違って、より永久的なものが目指されていたと捉えることもできる。

外観のスタイル

ファサード構成をみると、柱型は外壁には突出しておらず、軒下まで壁が立ち上げられ、壁面には3連アーチがやわらかな楕形アーチに包まれるという形状をとる。窓台部分のみ白い御影石が用いられた。またその窓台の同じ位置で、壁柱の部分に白い煉瓦か石が詰め込まれ、水平にラインをみせる意匠が示されていた。装飾的な石帯飾りのひとつと考えられる。さらに後で詳述するが、軒下部分には煉瓦の積み方を変化させるデザインが施されていた。

山本通からは南立面が松の木ごしに見える。煉瓦の赤茶色は補色の関係にある松の緑色によく映えた。南面には、タレットと呼ばれる小塔が外観を飾る。それは建物の隅部に設けられ、通常は上階へと続く螺旋階段の室となるが、平面図(図22、23)から読み取れるように、ここでは外観を飾る装飾塔にすぎない。ドームの丸屋根はコロニアル・スタイルの時期にはなかったもので、本格的な洋風建築がこの時期には誕生していたことがわかる。

北立面には薔薇窓が穿たれるが、その中央には神戸女学院の校章の三つ葉が象られ⁷⁷⁾ていた。その直下の壁には五連の盲アーチが用意された。

オランダ風あるいはユーゲント・シュティールという意匠

外観意匠の上で、この講堂をもっとも特徴づけるものは、湾曲した形状の屋根破風⁷⁸⁾だった。それは、南・北・西の3面の外壁上部に立ち上げられていた。

詳細にみると、その破風はいずれもが頂点に達するまでに、二つの曲線が交わって出来る、逆茨状^{いばら}のへこんだ部分が左右に二箇所ずつ設けられていた。さらにそのことに呼応して、破風上部に取り付く笠木石と小屋組換気口のあいだに、雨押石、ドリップ・ストーンが破風の壁面を茨状^{いばら}に縁取る。その下部で雨押石は煉瓦の桁に自由曲線でつながる。また、破風中央に据えられた小屋組換気口では裾広がり状の縁取りの意匠となる。全体としては破風ばかりが誇張された頭でっかちの形状となる。そのような意匠上の仕掛けによって、巨大で重厚感のある煉瓦壁に動きが与えられていた。

このような意匠は、正当なヨーロッパ歴史様式に立脚した視線からみれば、デフォルメされたもので、なにやら奇妙な印象を受ける。それは設計したオルチンが素人建築家であったから

なのか。いや、そうではあるまい。

これまでに刊行された神戸女学院の学校史では、いずれも講堂のスタイルが「オランダ風」⁷⁹⁾という形容がなされていた。一般にオランダの伝統的な市街地の建築は、破風を段状や湾曲した形状に飾り立てて立ち上げる、にぎやかな⁸⁰⁾ものが多い。その影響を受けたものに英国のジャコビアン様式⁸¹⁾があり、そのスタイルは17世紀なかばには米国に持ち込まれ、中部大西洋沿岸の富裕層に好まれ、住宅に採用された。ジャコビアン様式の特徴のひとつに、妻部の破風の取り扱いがあって、そこでは茨とよばれる曲線^{いばら}が用いられることが多かった。それは米国では図20のような「フランダース風破風」と呼ばれた。

このことから推測すれば、ここで使用された「オランダ風」の意味とは破風、すなわちゲー

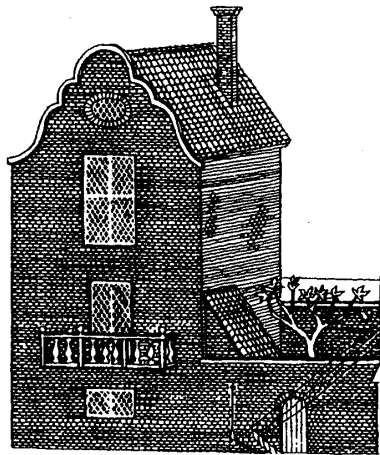


図20 「フランダース風破風の外観」



写真36 「平安女学院・校舎」

ブルを湾曲した形状に立ち上げていたことを根拠として、呼称されたものだろう。それは建築の専門用語でいう、ダッチ・ゲーブルという形態である。

このような「ダッチ・ゲーブル」は、明治なかばには関西のキリスト教主義女学校の校舎に出現していた。ハンセル設計の京都の平安女学院校舎(写真36)⁸²⁾で、明治28(1895)年のことだった。オルチンは関西在住の宣教師で、しかもアメリカン・ボード関連施設の建築部門の責任者でもあったことから判断すれば、その情報を得ていたことに間違いないだろう。さらに明治38(1905)年に仙台に完成する東北学院の中等部校舎⁸³⁾にダッチ・ゲーブルは出現することになる。その設計は後に詳述する神戸オリエンタルホテルを設計するデ・ランデ⁸⁴⁾だった。このように「ダッチ・ゲーブル」が神戸女学院講堂建設の直前にはキリスト教主義学校のなかである種の流行をみていたことも、背景にあった。

だが、講堂に出現した破風には、ジャコビアン様式にはありえない奇妙な意匠が含まれていた。前述したような、破風の笠木石下側の意匠であり、それは「オランダ風」というキーワードだけでは読み解けないものだった。一見土俗的な意匠を思わせる。おそらくそれは、当時中欧で流行しはじめていたユーゲント・シュティールという、新しい建築造形運動による影響だと考えられるのだ。

このスタイルはアール・ヌーボーの、ドイツ、オーストリアでの呼び名であり、ユーゲント・シュティールはアール・ヌーボーとともに、19世紀末から20世紀初頭にかけての建築や工芸など造形の世界を席卷する。そこでは、蔓草の形状のような、けっしてコンパスで描くことのできない自由曲線を多用した意匠が出現していた。それは、それまであったヨーロッパ歴史様

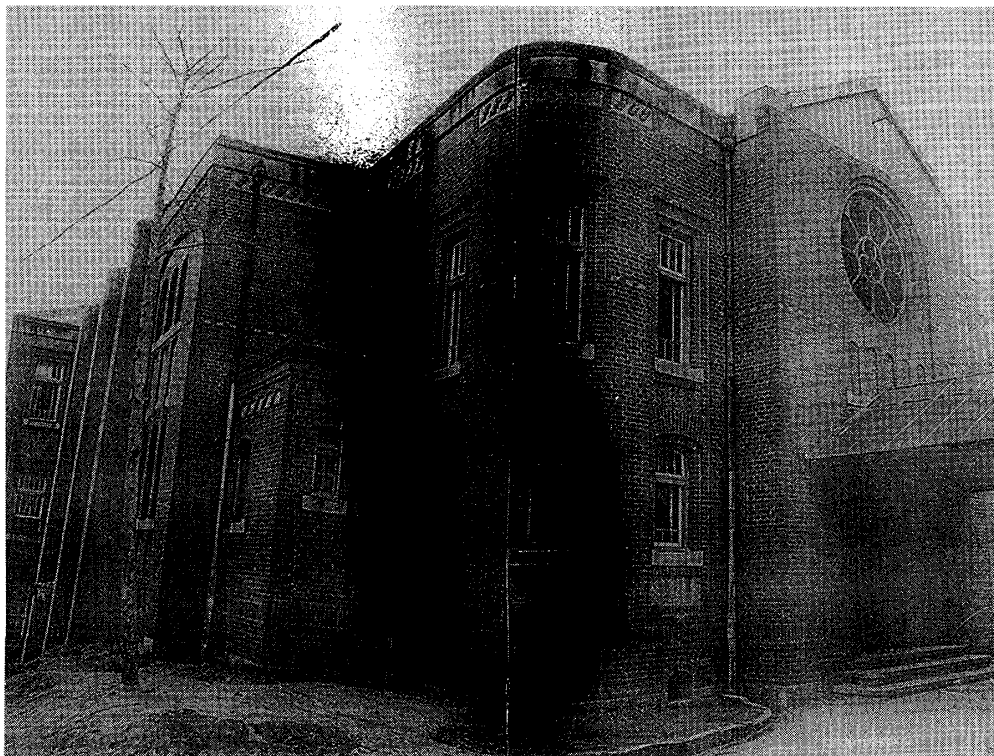


写真37 「講堂の外観(北面)」(神港学園時代)

式のスタイルを、細部の意匠から壊していった。

ここでの破風の形状からは、そのようなものの影響を如実にみることができる。そのような新しい試みは壁柱の柱頭部や軒下部の意匠(写真37)にもみられ、そこでは煉瓦がモルタル面に浮彫り状に埋め込まれ、斜め方向に角度をもったあしらいがなされており、これまでにない新しい造形意匠の試行がみてとれる。

オルチンはなぜ、欧米から遠く離れた日本で、このような新しい造形運動が巻き起こりつつあったことを知っていたのだろうか。神戸最初のユーгент・シュティールのスタイルは、山本通キャンパスから坂をくだった海岸沿いの旧居留地のホテルに、明治40(1907)年にたちあらわれた。ドイツ人建築家のデ・ランデによって設計がなされたオリエンタルホテルだった。このホテルの設計案は二年前に遡る、明治38(1905)年に懸賞付きのコンペティション⁸⁵⁾でおこなわれ、そのデザインは広く神戸じゅうに知れ渡っていた。想像するならば、オルチンはそのことを認識していた可能性が高い。だから、ほぼリアルタイムで新デザインを知ることができたのだろう。

ユーгент・シュティール説を採るプロセスのなかで、筆者は次のふたつの可能性をも検討した。ひとつはミッション・スタイルという文脈で、もうひとつは神戸女学院の校章のかたち、である。

前者からみると、湾曲した形状の屋根破風とは、実はミッション・スタイルの造形言語のひとつだった。その起源はスペイン風バロックに遡れる。米国でのミッション・スタイル⁸⁶⁾は明治28(1895)年以来、20世紀初頭のカリフォルニア方面で大流行する。ミッション・スタイルでは外壁は一般に、スタッコ仕上げによる白い壁と決まっていたが、ここでは剥き出しの煉瓦という素材が用いられたことと、破風の縁取りのカーブがバロックからも逸脱した、なかば自由曲線に近いものであるために、ミッション・スタイル説の可能性は消えた。

後者は明治18(1885)年に定まった三つ葉の校章であり、その形は湾曲した形状の屋根破風に似るものの、頂部の円の曲率が大きな違いや、逆茨状のへこんだ部分の数が左右にひとつずつしかない持ち得ないことなどから判断すれば、この説も消えた。ただ、このような考え方は全くの荒唐無稽なものではなく、破風に校章や社章などその建物の内容を示すシンボリックな意匠の採用はしばしば見られた。

講堂を特徴づけたこの破風は、神戸女学院の手を離れ、神港学園になってからは三角形のモルタル塗りのペディメントにつくり変えられる。

平面の特質

全体の平面形状としては、ほぼ左右対称のプランとなる。正式な入り口は北側の二階にあり、そこには車寄せが設けられていた。まずそこから建物内に入ると、広間があり、両脇が上階に上がる階段室になる。広間の正面はホールになり、南面して演壇が設置されていた。当時の様子は写真38からうかがえる。ホールの奥には来賓室と教室があった。ホールの上部は吹き抜けになり、演壇以外の面には二階席のギャラリーが廻るという構成になる。三階をみれば、広間

神戸女学院中央講堂平面図

箱石造南面・北面 第二階平面図



図22 「講堂の平面図2(二階)」

神戸商業学院 講堂 平面図

縮尺 1/100

建築士 藤田 豊

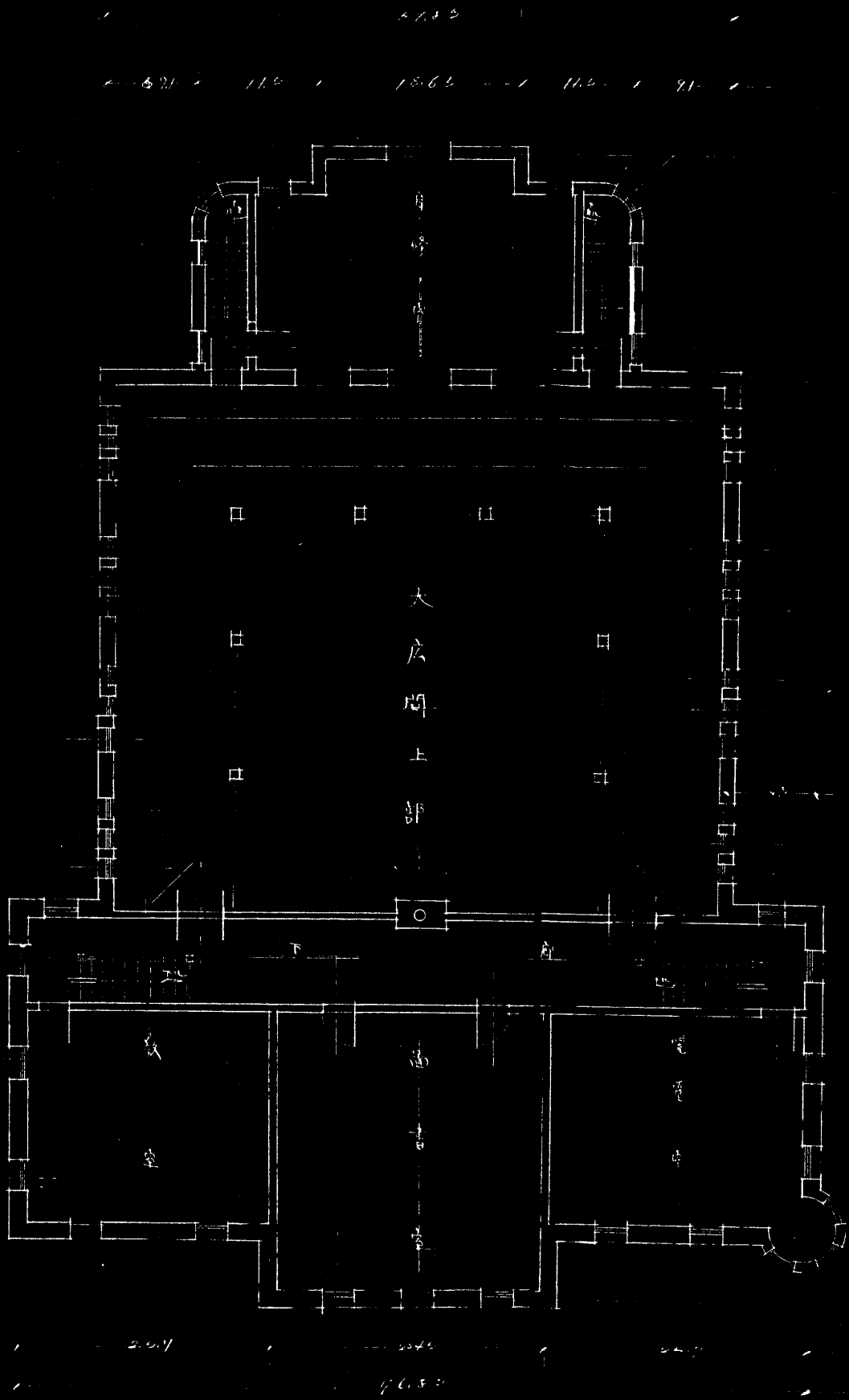


図23 「講堂の平面図3(三階)」

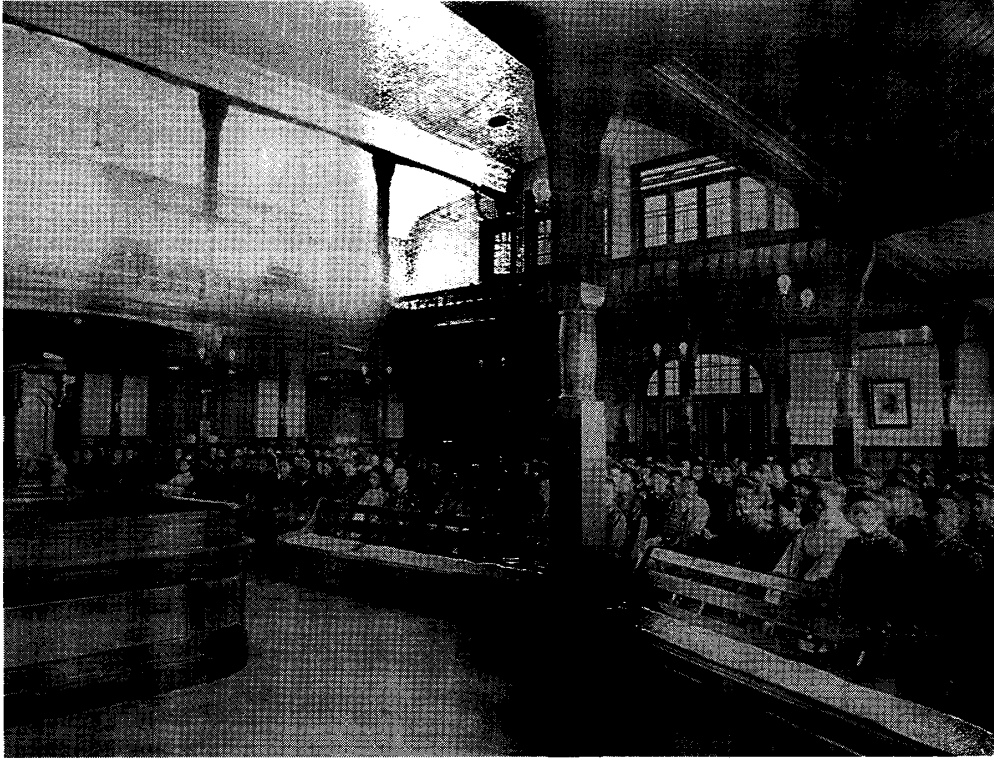


写真38 「講堂の内部」

の上は薔薇窓があったものの、生徒たちの自習室になっていた。ホールの奥の南面する場所は図書室となる。タレットはその閲覧室の南東隅にあった。一階をみると、建物の北側部分は開口部のない地下室となり、物置に充てられた。南側は事務所と校長室、応接室、教員室からなり、総務部門として本学院の中核部分をなした。その中間にボイラー室が設けられていた。

このように、この講堂は機能的には一箇所に多くのひとが集まるホール的な空間だけではなく、学校を運営していく上で必要な幾つもの要素が詰め込まれた、いわば複合的な施設だった。そのことはこの講堂に3つの出入り口が設置されていたことにうかがえる。第一は二階北側の車寄せのある正式な玄関部で、講堂への主要な導入路、第二は一階西側に取り付き、事務などの学校管理運営専用の出入り口、第三は二階西側に階段で取り付いた出入り口で、図書室や教室へと直接にアプローチできた。使用者ごとに分けると、第一は生徒も含めあらゆる人、第二は教職員たち、第三は主に生徒たち、というふうに設定されていたと考えられる。すなわち、あらかじめ動線が用途別に分離されていた点に、この講堂の平面計画上の特徴がある。

次に、この講堂全体の大きさを検討する。平面図からは、間口が76.85尺、すなわち23メートル29センチメートルで、一間に直すと12.9間ある。一方奥行は100.78尺、すなわち33メートル23センチメートルで、18.5間であることが判明する。この大きさはどのように建築的に位置づけられるのだろうか。

設計者オルチンは二十一年前の明治19(1886)年に大阪に土佐堀青年会館を設計⁸⁷⁾していた。この会館は日本における最初のYMCA会館で、写真39にあるように煉瓦造二階建ての建築だった。内部は教会堂のプランをもつ、約千名収容の大集会場を中心としたもので、後部と両側に

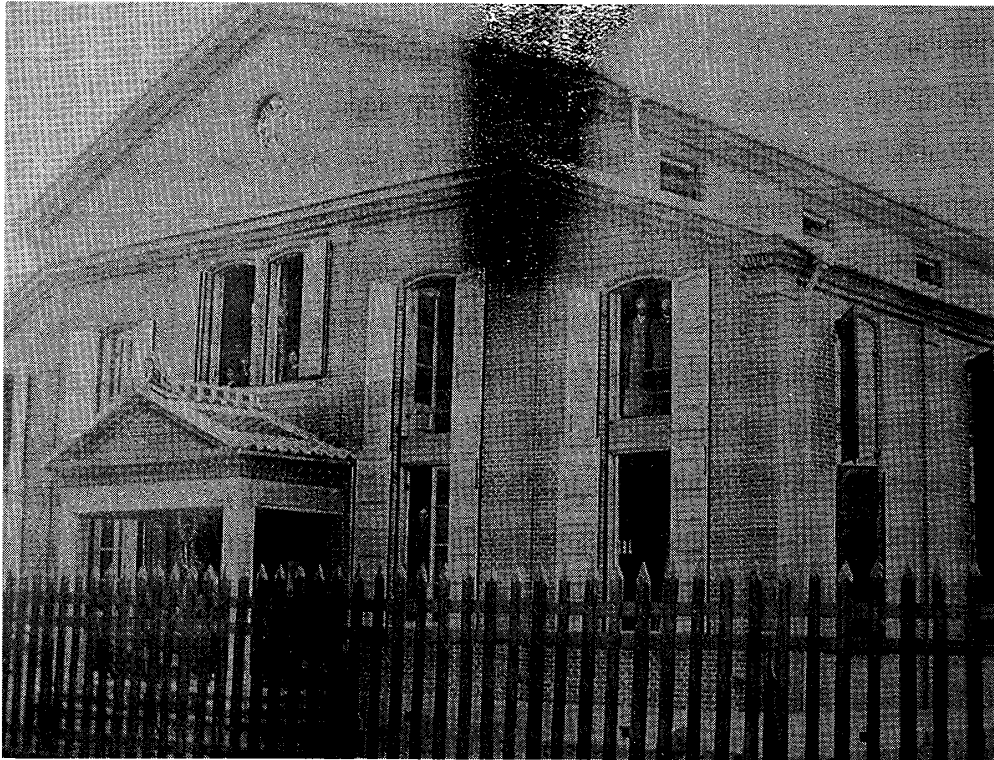


写真39 「土佐堀青年会館の外観」

二階席ギャラリーが設けられていた。当時としては巨大な建造物であり、間口は10間、奥行は11間であったことが判明している。神戸女学院の講堂を、この土佐堀青年会館と比べるならば、講堂は間口約1.3倍、奥行約1.7倍に大きくなってなり、建築面積としてはほぼ倍増していた。

このように、土佐堀青年会館を設計していた事実からは、オルチンには十分に設計能力があったと判断できる。そのような延長線上に、神戸女学院講堂の設計があったものと考えられる。言い方を換えれば、このような会館を設計した経験が生かされて、神戸女学院の講堂が設計されたものと捉えることができるだろう。

③雨天体操場

北側の運動場のもっとも山側の場所に、明治41(1908)年に完成する雨天体操場(写真40)は、大正6(1918)年に大幅に増築されていた。下見板張りに白塗りペイント仕上げの木造平屋の建築で、窓は上げ下げ窓だった。それは明治期・神戸女学院学舎に通奏低音のように流れるスティック・スタイルであった。その内部(写真41)をみると、小屋組が表わしにされたキングポスト・トラスが採用されていた。設計名は現時点では不明だが、オルチンの可能性もある。神戸女学院の手を離れた後、昭和13(1938)年の阪神大水害で西側部分は破壊され、東側部分のみ神港中学校の理科教室として使用された。

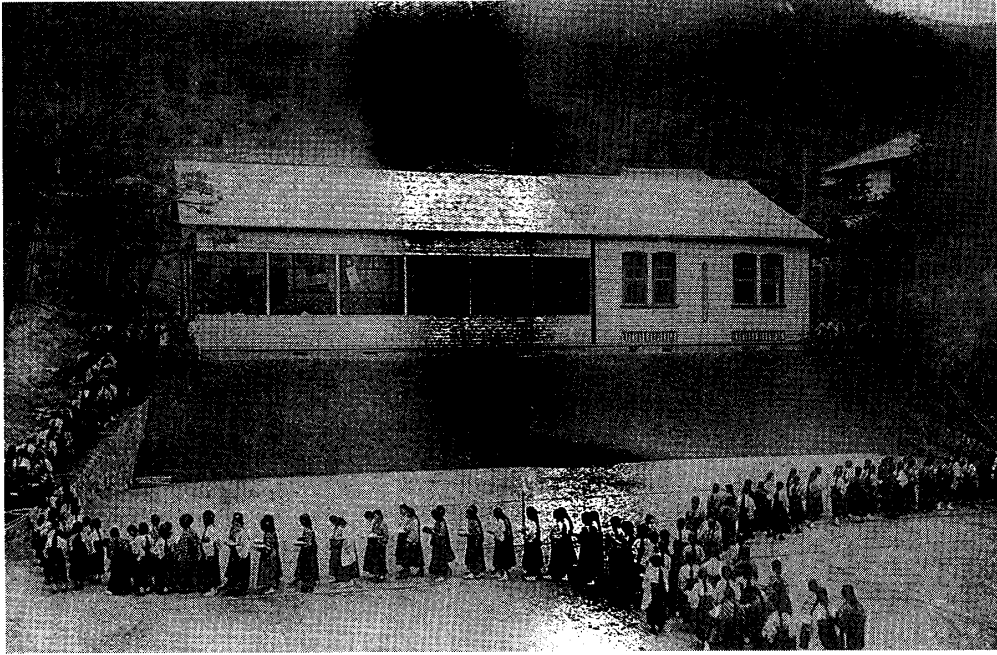


写真40 「雨天体操場の外観」の絵葉書



写真41 「雨天体操場の内部」

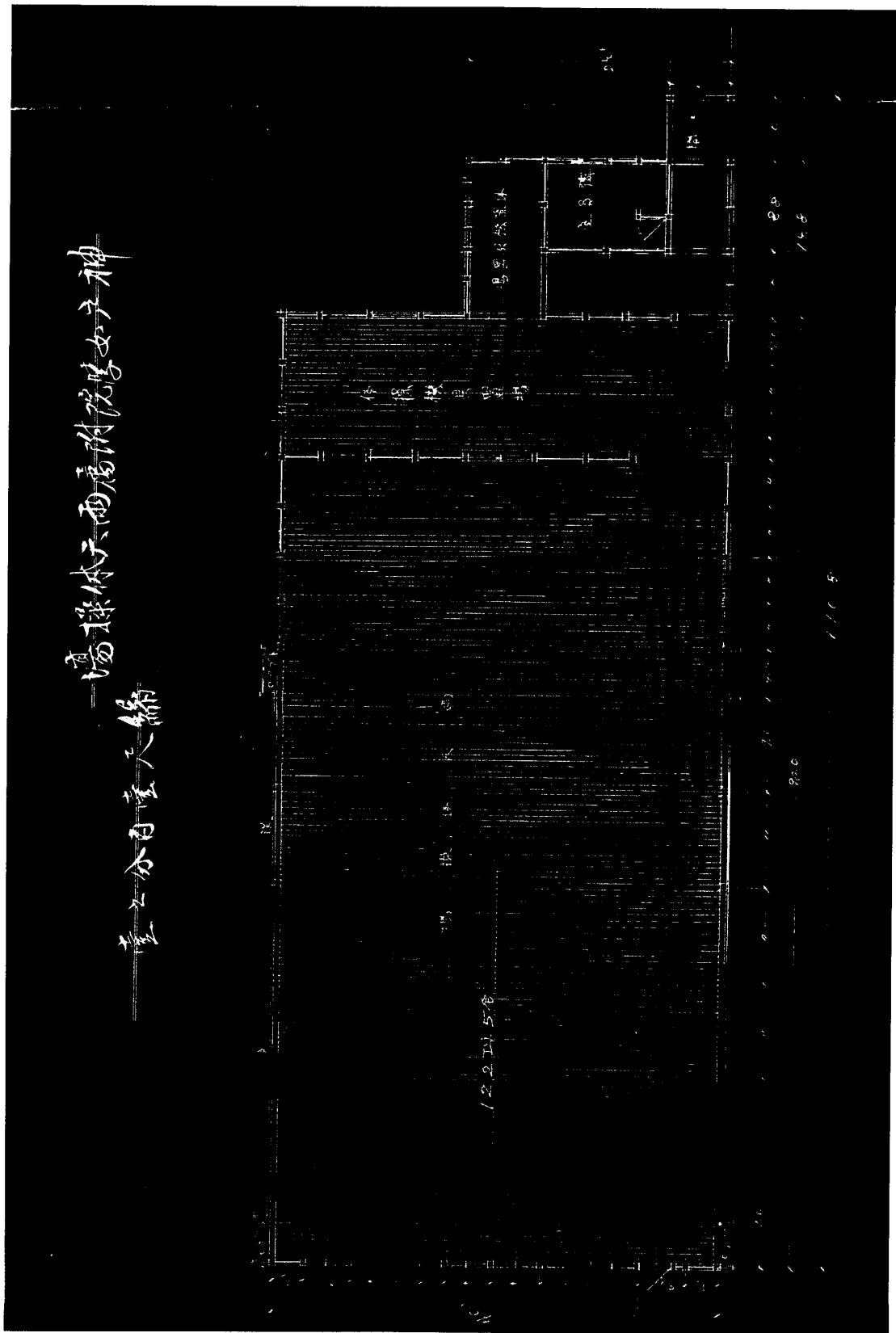


図24 「雨天体操場の平面図」

④家齋館

前節でみた尚褻館の横に建設された木造二階建ての校舎で、家齋館と呼称された。大正2(1913)年に、岡田山キャンパスの設計者でしられるヴォーリズによって設計され、翌大正3(1914)年に完成した。外壁は尚褻館と同じく洋風下見板張のスティック・スタイルであり、屋根の形状は瓦葺き寄棟が主体で、その東西軸に直交して北側に階段室と便所が入った棟が取り付く形状となる。

内部の部屋割をみると、一階は割烹室と床の間付きの和室の食堂、二階は大広間にもなる三十六畳の裁縫室と床の間付きの作法室などからなり、基本的には和室が主体であった。洋風の外観(写真42)を有したにもかかわらず、内部が和室というのは一見整合性に欠けるだが、改装後の尚褻館でも同様の現象をしめしており、キャンパス全体を洋風の外観で統一したために生じた齟齬と捉えることができる。

屋根下の小屋組はトラス構造とよばれる洋風建築の手法が用いられていたことが、後にみる図面から判明する。注目すべきはそのトラスを構成する垂直材に丸鋼が使われていたことで、太いバーで上から梁が引っ張られていた。すなわち垂直材には引っ張り力しか掛からないという構造力学が適用されたものだった。

この建物へのアプローチは、先に建設されていた尚褻館との間に新たにもうけられた共有の玄関から入るようになっていた。この玄関棟は家齋館からも尚褻館からも独立した一つの建築で、洋風の切妻破風をみせる。この新設の玄関棟の設計もまた、家齋館と同時におこなわれており、ヴォーリズ建築事務所によるものであった。そのことはのちに詳述する設計図から判明する。

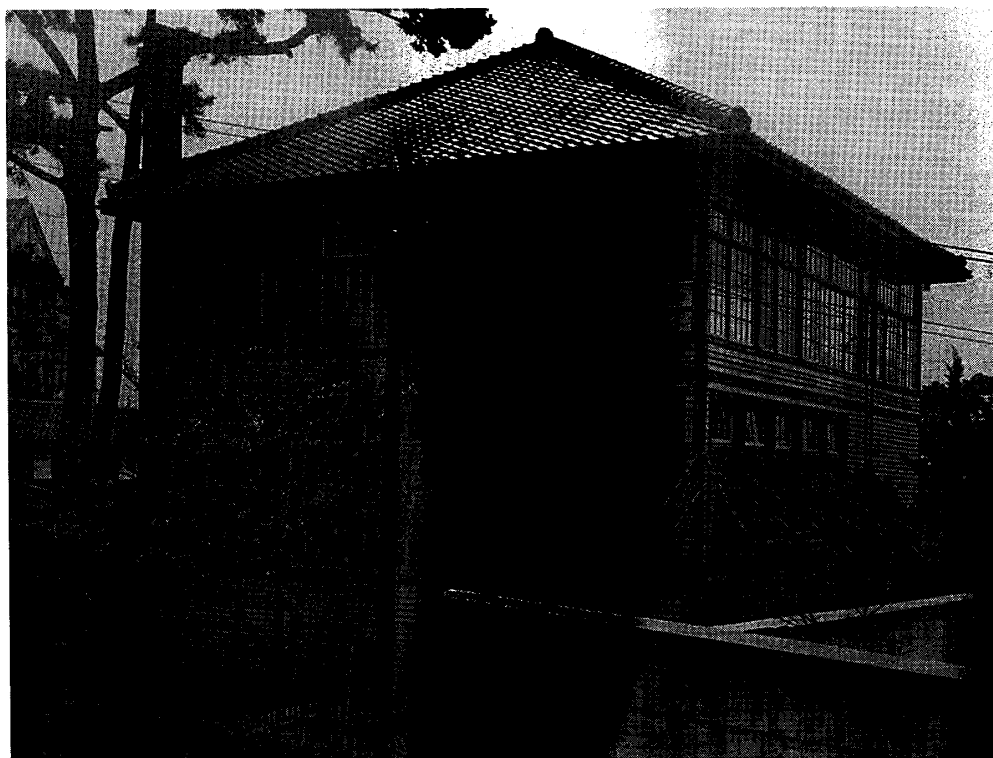


写真42 「家齋館の外観」の絵葉書

この玄関棟を挟んで家齋館は尚裴館とつながり、共通して家政のための空間がめざされた。つまり家齋館とは、先につくられていた尚裴館の内容を補完する目的があったものと思われる。尚裴館ではたしかに作法などをおこなうための空間設定がなされたものの、一方で同窓会などの会合する場所という性格も持ち合わせており、料理などの、より設備を要する専用の室ではなかった。そのため、この家齋館では待望の割烹室が実現することになる。

家齋館に関しては、合計25枚の設計図⁸⁸⁾が残されている。山本通のキャンパスのなかでは、唯一大半の設計図が揃う珍しいケースである。その内訳は平面図(図25、26)、立面図(図27、28)、断面図(図29、30)、屋根伏図、基礎伏図、断面図、小屋組詳細図、割烹室の什器図、階段詳細図、窓詳細図などから成るが、そこには図面番号が記されていない5枚の図面が含まれており、それらは正式な設計図になる前の、いわば下書き的な図面であったものと思われる。その5枚とは平面図と立面図がそれぞれ二枚ずつ、屋根伏図が一枚からなる。それらの図面は、屋根伏図を除けばいずれもその左端にはokという文字がみえ、つづいてJ.H.Vというサインが確認される。

J.H.Vとはどういう人物なのか。当初筆者はW.M.V、つまりウィリアム・メレル・ヴォーリズ自身が直接に図面のチェックをおこなっていたと考えていたが、そうではなく、大正元(1912)年12月にヴォーリズ合名会社建築部⁸⁹⁾に入っていたJ.H.ヴォーゲル⁹⁰⁾がこれらの図面のチェックを担当していたことが判明する。ヴォーゲルはオハイオ州立大学で建築を学んだ技術者であり、建築設計については素人だったヴォーリズよりもはるかにその知識は豊富だったのだろう。そのために、その役をヴォーゲルが担当することになったものと推測される。次章で詳述するが、日本人スタッフの村田幸一郎や吉田悦蔵、佐藤久勝らは大正2(1913)年という時点では、ヴォーリズ合名会社建築部に入って、それほど年月が経たない時期であったから、各人が設計に関して意志決定する段階に至っておらず、専門家による判断が必要であったのだろう。

ヴォーゲルによるチェックが入れられた図面を検討する。まず一階平面図は西側の開口窓について、英語で指示⁹¹⁾が記されていた。二階平面図と屋根状図についてはとくに記載はない。正面姿図(図27)では内部の階段の割付が記され、側面姿図(図28)では屋根勾配を30度とし、一階の開口部の高さを少し全体に上部に上げることが指示されていた。ここからは、間取りというプラン面や外観ファサードというデザイン面などのチェックにとどまらずに、平面図と立面図がリンクする、階段の高さと位置、あるいは屋根の形状と勾配の関係など、間違い易い部分が重点的に検討されていたことがわかる。すなわち、日本人のスタッフがつくった設計素案がいかにして訂正され、正式な図面が完成していく過程が、ここに読み取れるのだ。いずれも書き込みは鉛筆がペンを使った、フリーハンド⁹²⁾によるものであった。ここからは、ヴォーリズによる設計体制の一端が読み取れる。

25枚の設計図のうち、5枚のチェック図面以外については制作日の記載がある。11月10日の日付が入った階段詳細図をのぞけば、それ以外は皆、11月20日から11月29日の間に作成されている。つまり、わずか10日間で図面がつくりあげられていた。またその制作順序として、最初に一階と二階の平面図がつくられ、それを受けて、翌日から翌々日にかけて立面図が完成され、

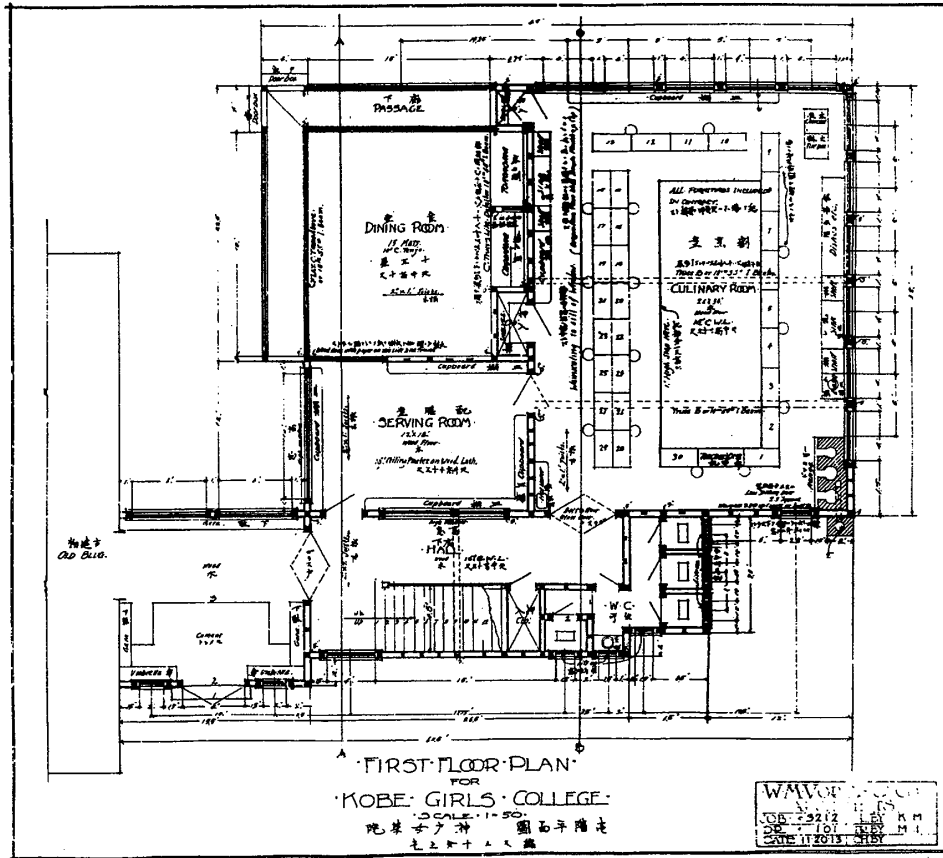


図25 「家斎館の平面
図1(一階)」

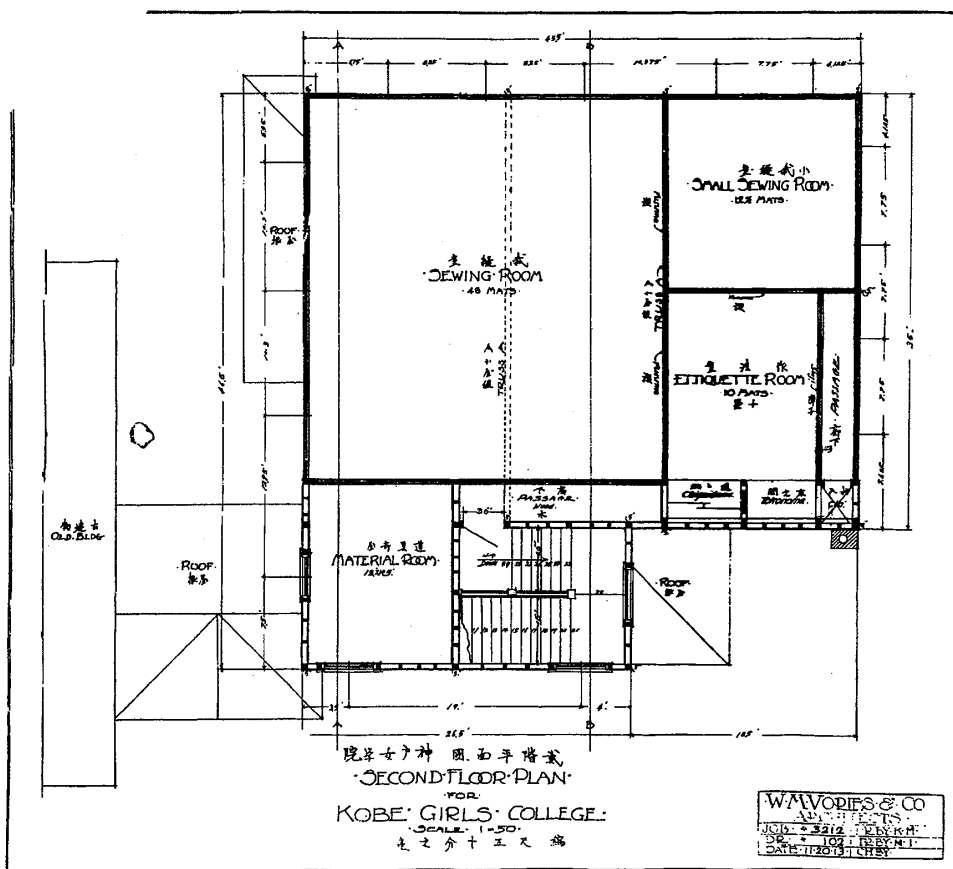


図26 「家斎館の平面
図2(二階)」



図27 「家斎館の正面姿図」

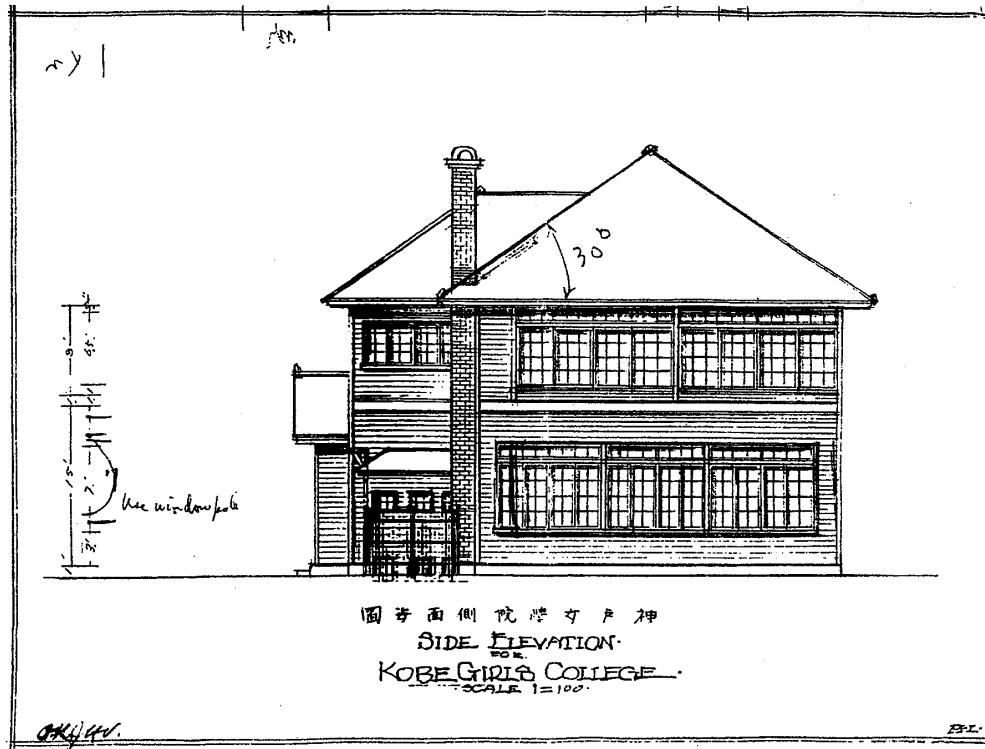


図28 「家斎館の側面姿図」

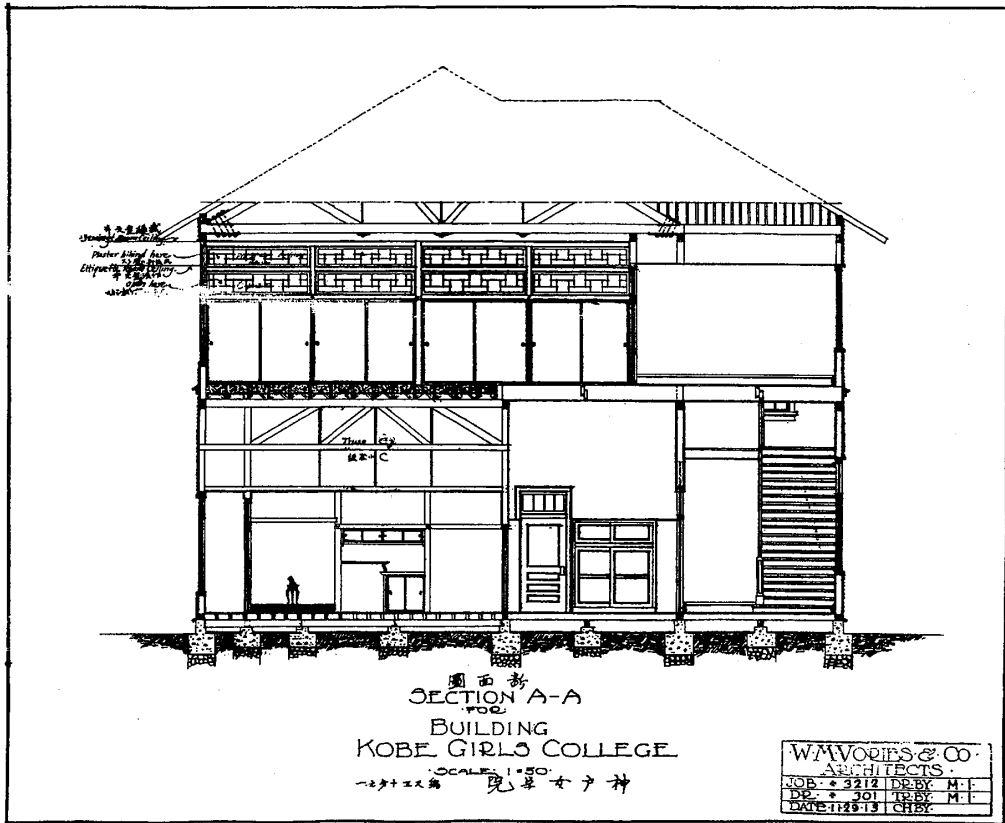


図29 「家斎館の断面図1」

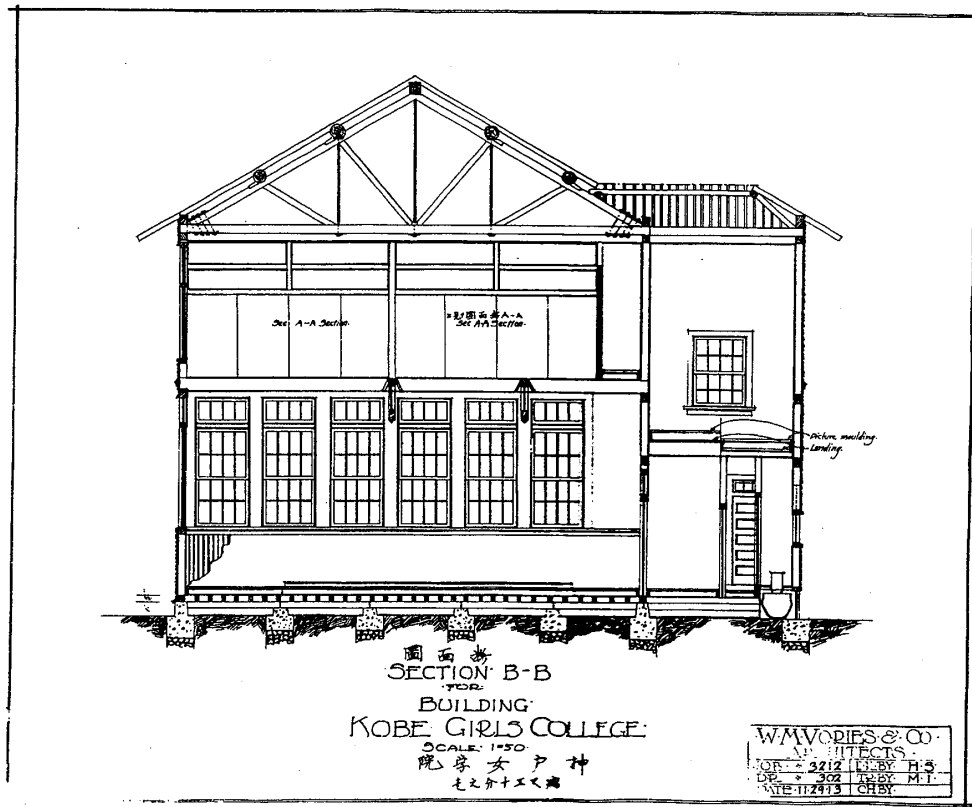


図30 「家斎館の断面図2」

次には基礎伏図、そして屋根伏図、小屋組の詳細図、断面図へと進んでいったことがわかる。

また、25枚の設計図のうち18枚には、ドローイング⁹³⁾担当者名と、トレーシング⁹⁴⁾担当者名がサインされており、名と姓がイニシャルで記入されていた。ここからは、どういう人物が具体的に関わっていたのかが、判明⁹⁵⁾する。

そのイニシャルのうち、もっとも多く登場するものは M.I であり、その名を推測すれば、おそらく大正 2 (1913) 年にヴォーリズ合名会社建築部に入った井上政一だった。ほかにイニシャルが確認される人物は、小屋組図面に H.S とサインがあったのは佐藤久勝、一階平面図ならびに二階平面図には K.M とあり、村田幸一郎のことだろう。村田幸一郎は明治 38 (1908) 年より、建築部の創設時より在職し、のちに神戸女学院岡田山キャンパスの建設の際にも大きな役割を果たすことになる。階段や窓廻り、割烹室の什器類など詳細図を担当した K.E については特定ができていない。

ここからは、次のことが判明する。まず、もっとも重要な平面図についてはヴォーリズの右腕のような存在だった村田幸一郎が最初に立ち上げ、断面図や小屋組の構造については、日本人スタッフとしては三番目に古い、佐藤久勝が担当していた。すなわちプランの骨格については、主要メンバーによって組み立てをおこない、それに基づいて、附随する要素が決定されていったことが読み取れる。

さて、家齋館は築後、間が浅かったことで、岡田山へのキャンパス移転の際に解体されて、その用材は岡田山に運ばれ、同窓会館に生まれ変わった。実際には家齋館に対するヴォーリズによる思い入れがあって、このように部材の転用がなされたのかもしれない。

⑤ 向上館

神戸市立諏訪山小学校⁹⁶⁾の木造校舎を移築したもので、外観(写真43)は簡素な和風の平屋建て建築だった。大正11(1923)年に建設される。その平面図(図31)によれば、廊下部分が吹き放ちとなり、二教室からなった。

5) そのほかの建築

詳しく触れることができなかったものに、炊事場や炊婦宿舎、沐浴場、外人宿舎などの建物がある。いずれもが第3期と第4期の端境期に位置づけられるが、おそらくは尚裴館の洋風への改装もこの間に該当するものと思われる。



写真43 「向上館の外観」

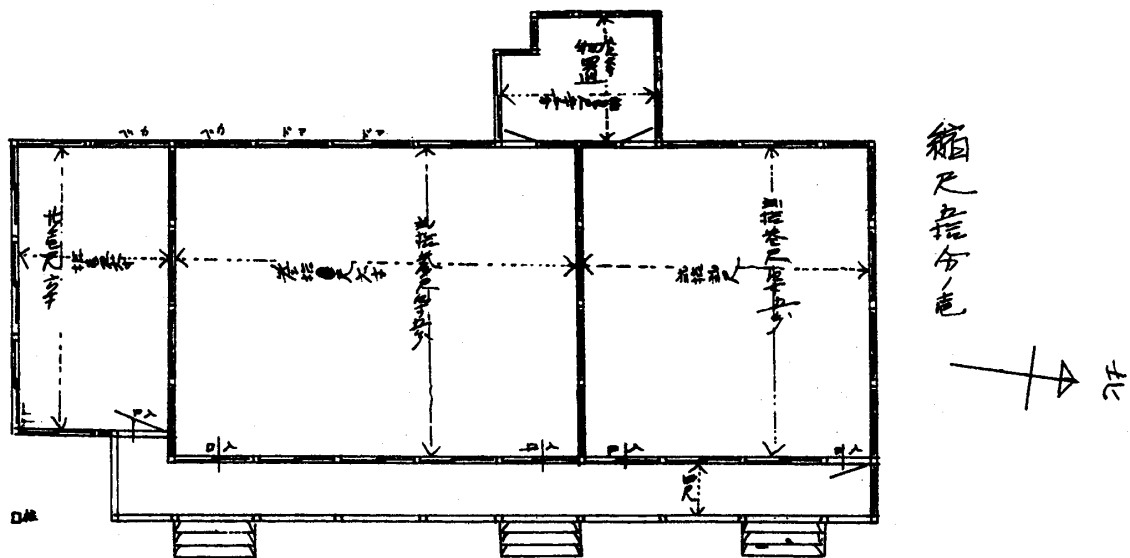
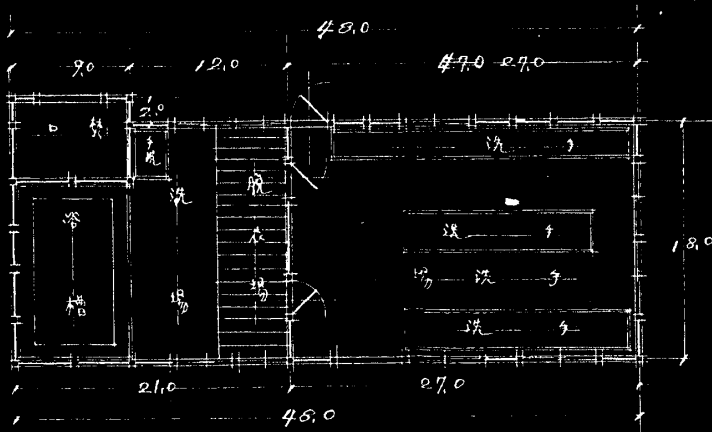


図31 「向上館の平面図」

浴室兼洗濯場の平面図

縮尺 1/50



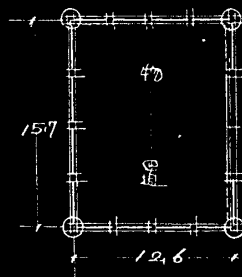
神戸女学院

縮尺 1/50

尚取鏡前平面図

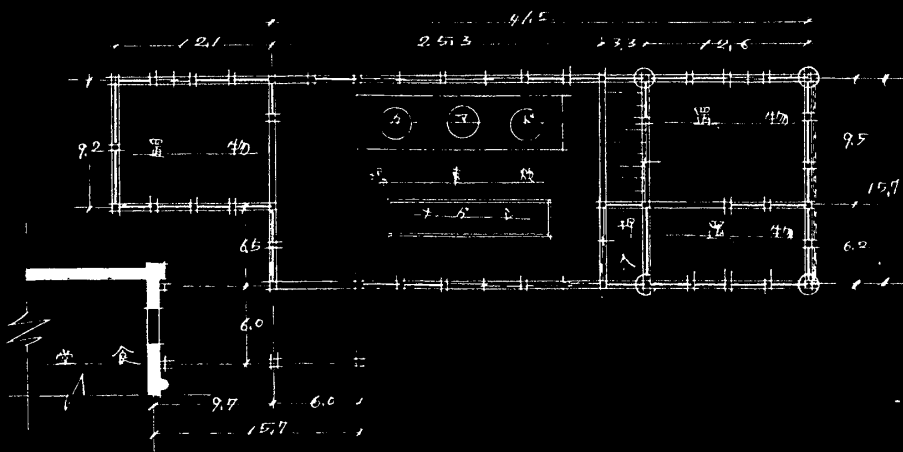
次車場平面図

縮尺 1/50



式階

尚取平面図



臺階

図32 「浴室兼洗濯場の平面図」

ここで指摘しておくことは、炊事場や炊婦宿舎、沐浴場の建設がいずれも明治37(1904)年におこなわれており、また建築スタイルの上では、簡素な和風の意匠を取ったということである。外壁の仕上げをみれば、炊事場は下見板張りで洋風要素もみられ、炊婦宿舎は縦の板張仕上げ、沐浴場は基礎が煉瓦に漆喰壁となる。屋根は炊事場が切妻のほかは、みな寄棟となっていた。沐浴場は浴室と洗濯場からなった。図32はその平面図である。

外人宿舎はホルブルックの家としてつくられる。一階玄関部にはポルティコが付き、外壁は下見板張りとなった。

6) 幻の構想

どのようなプランとスタイルであったのかは定かではないが、この土地に校舎を高層階とする建築家ヴォルフの提案⁹⁷⁾があったことを最後に記しておく。

山本通キャンパスを対象として計画されたもので、実現はしなかった。キャンパスの高層化が計画され、昭和2(1927)年10月には基本設計がなされていた。設計者・ヴォルフは米国伝道会の華北派遣宣教師でありながらも、建築家でもあって、松山女学校の設計に関与していた。その内容とは寄宿舎と住宅を別の場所に移転して、校舎と管理棟だけを山本通に残すというもので、総務館と定員955人の校舎の建設が予定され、工費は50万ドル及び100万ドルが計上された。だが、基本設計の完了された翌月の11月には現キャンパスの岡田山が敷地予定地として見出され、このヴォルフの計画は流れた。

7) 小結

以上、明治8(1875)年から大正11(1922)年の47年間をみると、大きく建築のスタイルが変容していた。その背景にはモデルとして存在した米国の建築がこの間に大きく変化したことを反映している。米国は19世紀の後半から20世紀の初頭に著しく経済成長を遂げ、そのために建築のスタイルも変遷が著しく、きわめて短期間でデザインのサイクルが変わる。

本章での建築スタイルを分析する際に、テキストのひとつとして使用した、建築家のレスター・ウォーカーによる『図説アメリカの住宅』⁹⁸⁾によれば、神戸女学院の校舎と時代的に関連する米国での建築スタイルとしては、次のようなものが挙げできる。時間軸順に並べてみると、1865年のスティック、1870年の第二帝政式、1875年の盛期ビクトリアン・ゴシック、1880年のクイーン・アン、イーストレイク、1885年のリチャードソン風ロマネスク、ノルマン、シングル、1890年の城館風、ジョージアンリバイバル、1895年のミッション、1900年のチューダー、1905年のクラシックリバイバル、ライト風、1910年のバンガロー、とあり、ほぼ5年刻みでその流行が変化していたことが読み取れる。このような事象が、神戸女学院学舎の建築に影響を及ぼしていた点も指摘できる。

IV 設計者の肖像

以上みた4つの時期の共通点は、校舎の設計が建築の専門家ではないアメリカン・ボードの宣教師、もしくは神戸女学院教員によって担われていたことだ。つまり、建築学を修めた専門家によることなしに全校舎がつくられていた点に、山本通キャンパスのひとつの特徴がある。

ここでは各期を代表する設計者の肖像についてみる。なお第二期については設計者名が特定できていないが、プロフェッショナルな建築家によるものではなかったと推測される。

1) 第一期の設計者 ジェローム・デイヴィス

ジェローム・デイヴィスはアメリカン・ボードの宣教師であって、建築の専門家ではなかったが設計を担当した。このようにアメリカから来た宣教師のなかには建築設計の心得がある者も多く、岡田山キャンパスの設計者・ヴォーリズについてはあまりに有名だが、後に詳述する第三の時期の大講堂を設計するオルチンもそのひとりだった。

デイヴィスは最初、神戸伝道区の宣教師で、明治5(1872)年に神戸の宇治野に開校した宇治野村英学校の校長をつとめた。宇治野村英学校は神戸ホームに先行する教育機関であり、そこでアメリカン・ボード最初の女性宣教師であったタルカットとダッドレーが教えていた。デイヴィスは神戸ホーム校舎の完成を見届けた直後の明治8(1875)年11月21日に上洛し、新島襄、山本覚馬と同志社の設立をおこなう。そのため宇治野村英学校は神戸女学院、同志社の共通の祖⁹⁹⁾といわれることになる。

デイヴィスの経歴をみれば、1838年にニューヨーク州に生まれ、南北戦争に北軍兵士として従事し、その後シカゴ神学校を卒業した。明治4(1871)年来日し、神戸から京都に移って以来、終生同志社の教育に尽くし、明治43(1910)年に72歳で亡くなっている。明治40(1907)年からは神戸女学院の理事をつとめた。



写真44 「デイヴィスの顔」



写真45 「ホルブルックの顔」

2) 第三期の設計者 マリー・アンナ・ホルブルック

マリー・アンナ・ホルブルックは神戸女学院で最初の本格的な理科教師だった。また医師でもあり、宣教師でもあった。専門家ではなかったが音楽館と理化学館というふたつの建物の設計をおこなった。

1854年に生まれ、明治13(1880)年にマウント・ホリヨーク・セミナリーを卒業したあと、ミシガン大学で医学を学び、米国での女性第一号の医学博士となる医者だった。神戸女学院では明治25(1892)年から明治29(1896)年と、明治40(1907)年から明治43(1910)年の間、教員をつとめた。ホルブルックが校舎設計を担当したのは前者の時期だった。

来日した目的は、日本においてのマウント・ホリヨークをつくりあげることであり、講義科目は生理学と衛生学の担当希望だった。が、理科教育全般を教えることになる。また、華麗な洋館の校舎を設計していたが、一方で日本婦人の「米国かぶれ」を嫌ったという。明治43(1910)年に56歳で亡くなる。

なおホルブルックについては、米国伝道会宣教師文書を中心とした若山晴子による研究¹⁰⁰⁾がある。

3) 第四期の設計者 ジョージ・オルチン

ジョージ・オルチンは宣教師であり、^{ほうこう}葆光館や講堂などの設計を担った。神戸女学院との関係は、音楽館を建てる時点で音楽に詳しい経歴を買われ、設計に関与したといわれる。明治33(1900)年の時点で校舎の建設および改修の担当となる。これが具体的にどの建物を指しているのかは詳しくわからないが、明治33(1900)年8月には校地の周りの塀などの整備がおこなわ

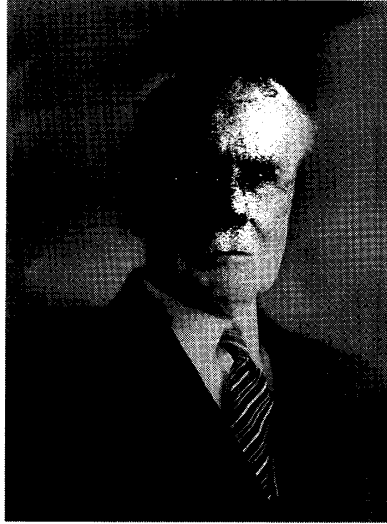


写真46 「オルチンの顔」

れ、写真4でみられるような煉瓦造の塀が築造されていた。

オルチンは明治39(1906)年から大正7(1918)年まで神戸女学院の理事をつとめていた。葆光^{ほうこう}館や講堂の設計はちょうどこの時期と重なり合う。また一時は理事長に就任しており、このことからいかに神戸女学院と深く関わっていたかがうかがえよう。

オルチンが建築担当になったのは、工学の心得があったためとされるが、具体的にその内容については定かではない。工学の心得があったことで、アメリカン・ボードの日本に来た伝道団のなかでの建造物委員会のメンバーになったものと考えられる。

前章で触れたように、来日四年目の明治19(1886)年に大阪で土佐堀青年会館を設計していた。この設計¹⁰¹⁾は聖公会の宣教師と競われて、オルチン案が選ばれてできたもので、「パン瓦の家」として、明治前期の大阪名物の建築として知られた。また神戸女学院だけではなく、大阪の梅花女学校や松山の東雲女学校などにおいてもその校舎を設計していた。建築にくわえて造園も得意であったという。実際に再来日した昭和6(1931)年には岡田山キャンパスの庭園計画についても、深く関わることになる。そのことは続稿にて詳述する。

オルチンは1852年に、英国のロンドン郊外に生まれ、青年時代にカナダに渡り、その後米国のウィリアムズ大学を卒業する。明治15(1882)年にオルチンはアメリカン・ボードの宣教師として、日本に来日し、大阪の川口居留地を拠点に38年間、布教活動をおこなった。賛美歌の編纂の立役者として、日本の宗教音楽に対して、多大な貢献をおこなった。大正9(1920)年に退職し、米国に帰り、昭和10(1935)年ニューヨーク郊外で死去した。83歳だった。

なおオルチンについては、米国伝道会宣教師文書を中心とした若山晴子による研究¹⁰²⁾がある。

4) その他の設計者

第一期では宣教師のアッキンソン、第四期では教員のホイテが、それぞれ校舎の設計に関わっていた。

アッキンソンは神戸伝道区の重鎮で、明治6(1873)年来日した。1842年に生まれ、明治41(1908)年に死去した。明治40(1907)年からは神戸女学院の理事をつとめた。

ホイテは1874年に生まれ、マウント・ホリヨークを卒業し来日した。昭和41(1966)年に死去した。

またなぜ、設計依頼がなされたのかは定かではないが、岡田山キャンパスの設計者、ヴォーリズが家齋館の設計をおこなっていた。ちなみに大正3(1914)年の頃は、ヴォーリズが建築事務所を開設して間もない時期にあたり、広島女学校や関西学院中学部など、わずかな学校の校舎を設計していたにすぎなかった。ヴォーリズについては続稿で詳細に論じる予定である。



写真47 「アッキンソンの顔」



写真48 「ホイテの顔」

V 「外人都市」神戸との関係

1) 洋風校舎の衝撃

神戸の山手に出現したこのようなキャンパスの景観はいったいどのように捉えられていたのだろうか。大正期の神戸で活動したキリスト教主義の社会事業家・賀川豊彦は神戸女学院のことを次のように記した。

神戸女学院のチャペルの煉瓦の色と其の前に繁る雑木との調和は何とも云えぬ程よい。夜ライブラリーから漏れる瓦斯の光もよい。¹⁰³⁾

このような、校舎の醸し出すエキゾチックな景観が明治末期には生まれていた。「当時の少女たちのあこがれを集めた」とは先述の和島芳男の言であるが、このような学舎が演出する「異国情緒」は神戸女学院というブランド形成に視覚面から寄与したものと考えられる。このような洋風校舎を打ち立てること自体が、キリスト教主義にもとづく新しい時代のありようをしめすモデル提示であり、その教育的効果が期待できるという考えもあったのだろう。さらに神戸女学院の大講堂では海外からの著名な文化人たちの講演会や音楽会がひらかれ、神戸に存在した数少ないホールとしての機能を果たした。すなわち地域や社会に開かれていた一面があったことを指摘できる。このことは今日の神戸女学院が見失って久しいと思われるが、重要なことだった。

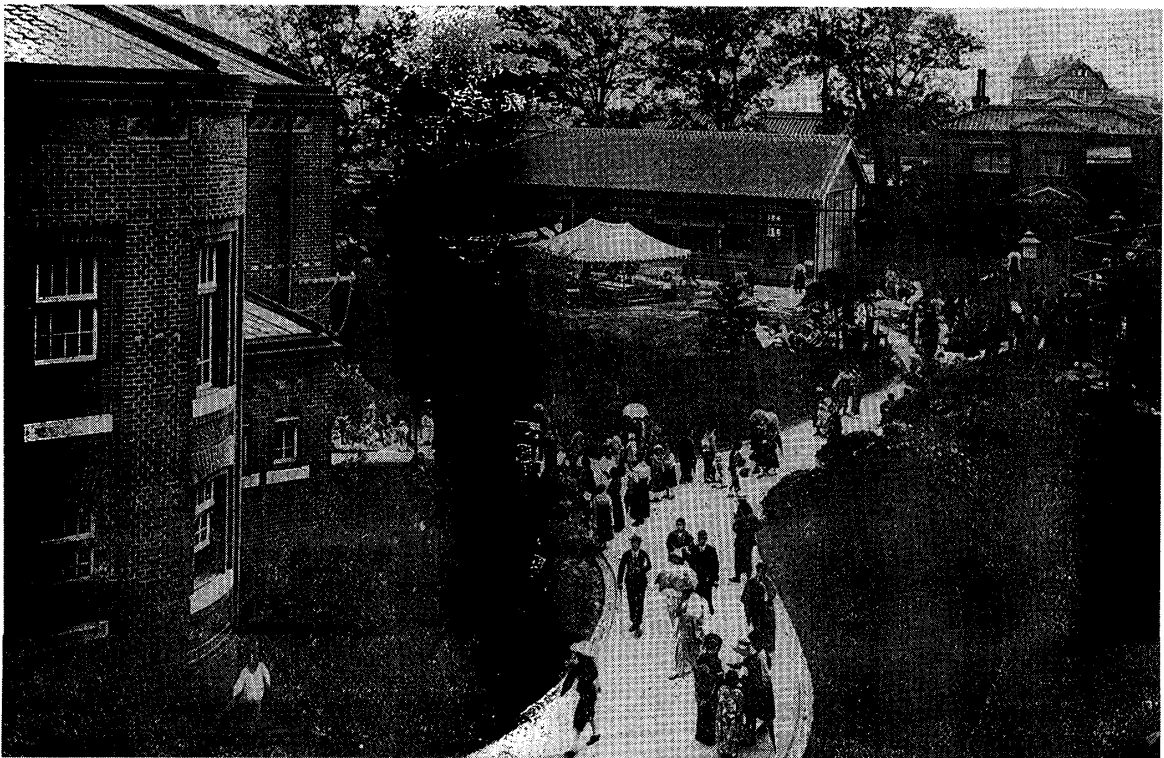


写真49 「キャンパス内のバザー風景」

このような華麗な洋風校舎の出現とは、神戸女学院だけの特権ではなかった。開港都市には横浜、長崎でみられた。長崎では活水女学院、横浜ではフェリス女学校、共立女学校などがいずれも洋風校舎で衆目を浴びていた。開港都市ではなかった福岡や広島では福岡女学院校舎が、広島女学院校舎がそれぞれ、町唯一の西洋館として注目を浴びた。もちろんこの時期には、小学校や県庁など官公庁の施設には擬洋風スタイルが採用されはじめていたが、それらは大工棟梁が見よう見まねで設計したものであったから、素人ながらも西洋人によってデザインされ、つくられた建造物はインパクトが強かったものと考えられる。このようなキリスト教系女子教育施設は、全国各地で視覚的にも瞳目の対象として存在した。

当時の神戸におけるキリスト教教育の様相をみると、神戸女子神学校が明治13(1880)年に神戸・花隈に神戸女学院創設のダッドレーとタルカット、そしてバロウスの三女子宣教師によって開設され、三年後の明治16(1883)年に神戸居留地山二番(現、中山手六丁目)に新校舎が建設される。神戸女学院と同じく組合教会派だった。一方、南メソジスト派のものとして、ランバス記念伝道女学校が神戸居留地山二番(現、中山手六丁目)に明治21(1886)年に開設され、明治32(1899)年に新校舎が建設される。すなわち賀川豊彦の云う「耶蘇寺」街の一段山側には3つのキリスト教主義女学校が並んだ。

2) 「外人都市」神戸

神戸女学院が所在した神戸という都市特有の現象が生じていた。「外人」都市という文脈である。周知のように開港地としてスタートした町だから、外国人が多数在留しているのは不思議ではないが、神戸女学院キャンパスがあった山手界隈は教会や学校、会館などキリスト教に関わる施設が集中して建設された。そのことを賀川豊彦は大正なかばに、次のように記す。

下山手通は耶蘇の寺町。神港、浸禮、オール・セイント、メソヂスト、神戸、青年、羅馬の七教会堂に耶蘇教徒集会所と云ふものがある。¹⁰⁴

ここから読み取れることは、神戸の山手の雑居地には横浜や長崎と同様に「耶蘇の寺町」通りが形成されていた。そこに隣接して、神戸女学院が位置していた。このことは重要な要素と考えられる。神戸女学院がひとりその学舎のスタイルでもって、異国趣味を醸成したのではなく、この界隈一帯にこのような空気があって、そのひとつに神戸女学院があったといえる。

明治から大正期にかけての神戸には、各種学校¹⁰⁵も含めると数多くのキリスト教主義の学校が開校していた。とりわけ下山手通りには多くの学校が設置されていた。聖家族女学院をはじめ、聖マリア女学院、キリスト教青年会外国語学校、神戸英清学校などが挙げできる。つづき、中山手通りには、神戸女子神学校、松蔭女学校、イングリッシュ・ミッション・ボーイズ・スクール、パルモア女子英学校、があり、北長狭には、パルモア英学校、神戸仏語学校、神戸青年英学舎があった。当時は神戸市外であった青谷には加奈陀(カナディアン・アカデミー)学校が、原田には関西学院が、開校していた。

国際都市の指標のひとつ、外国公館設置の状況をみると、明治44(1911)年時の資料¹⁰⁶⁾であるが、21の国が神戸に領事を置き、そのうち10の国が山手通もしくは中山手か下山手に所在していた。英国・米国の各領事館は海岸通りを拠点としたものの、フランス・イタリア・ポルトガル・スペイン・オランダ・ベルギー・ロシア・中国などの領事館は山手通境界にあって、いかに国際色のある町であったかがわかる。長崎はこの時期にはすでに衰微しはじめ、神戸と横浜だけが真の意味での「外人」都市になっていた。

では、宣教師たちにとってどのように捉えられていたのだろうか。アメリカン・ボードの宣教師のベリー博士は明治6(1873)年4月15日付の報告書¹⁰⁷⁾で次のように記した。

神戸がミッション活動のための有望なステーションとしての重要性をもっていることを確信に至るのであります。この帝国の諸地方から上流社会の若い男たちも女たちもまた外人との接触を通して能うかざりのものを学びとるために神戸に集まってまいります。そして多くのものが神戸の自然の風光に魅せられて、ここを永住の地と致します。

いうまでもないことだが、神戸とはアメリカン・ボードの宣教拠点だった。

また、都市という観点で捉えれば、明治の神戸とは開港地であって、全国各地からの移住者による新興都市であった。

ここで注目されることは、神戸の著名な実業家の多くが、キリスト教に理解を示し、財政的支援をおこなっていたということだ。YMCA 神戸基督教青年会館建設事業の寄付者一覧¹⁰⁸⁾からは、神戸女学院の援助者であった九鬼隆輝や川崎芳太郎、松方幸次郎、武藤山治など神戸の新興実業家の名がうかがえる。このことから判断できるのは、ある時点までは相当にキリスト教に寛容な「自由な」空気がこの町にはあったものと思われる。

神戸女学院がこの地で成立しえたのは、このようなキリスト教受容の条件が整った「外人都市」という文脈があったことも、一因として指摘できる。

3) 神戸市区改正計画によるキャンパス移転

各地の居留地は明治32(1899)年に一斉に日本に返還され、神戸という「外人」都市は発展の加速度を上げて、明治の終わりには日本人による自律した「大神戸」が形成されつつあった。大正6(1917)年の大阪毎日新聞兵庫県附録によれば、「神戸市の発展とは殆ど奇跡に近い人文上の一大変化である」と記されていた。神戸市は「外人都市」にとどまらずに、大正期には人口や経済規模で京都市を抜き、東京市、大阪市に次いで日本第三¹⁰⁹⁾の大都市になっていた。東京・大阪が江戸期以来の三都を形成したのに対して、神戸市は兵庫の津があったものの規模の上では比較にならないくらい小さな町だったから、ほぼゼロから一挙に明治維新以降の五十年間で人口を五十万人とした。そのような意味では、明治から大正期までの間、神戸ほど成長した都市はなかったといえる。

神戸女学院はそのようななかで、神戸という都市の発展と歩みを共にしたといえる。このこ

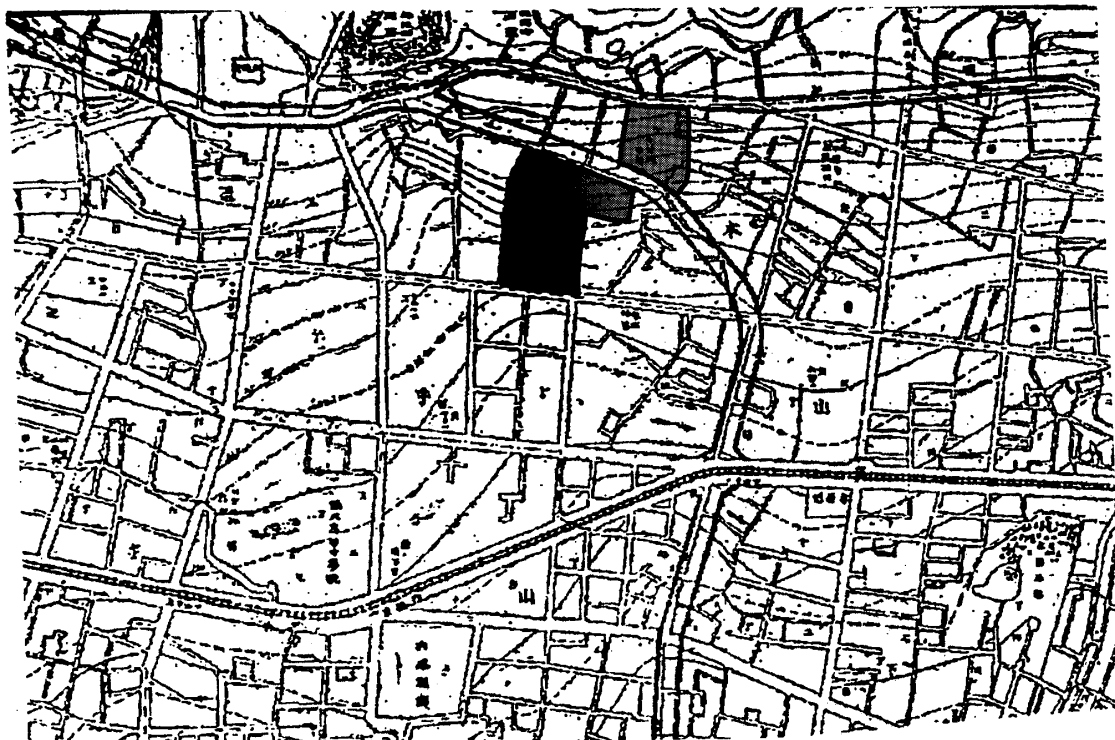


図33 「道路計画図」：『神戸又新日報』大正2(1913)年3月29日
 「網かけ部は神戸女学院敷地を示す」

とも、神戸女学院の成長した事由のひとつであろう。

だれも予想すらつかなかった神戸の急激な市街地拡大は、至るところで歪みを生じさせ、新たな都市計画が必要となる。最初に打ち出されるのは、大正2(1913)年の神戸市区改正案¹¹⁰⁾だった。

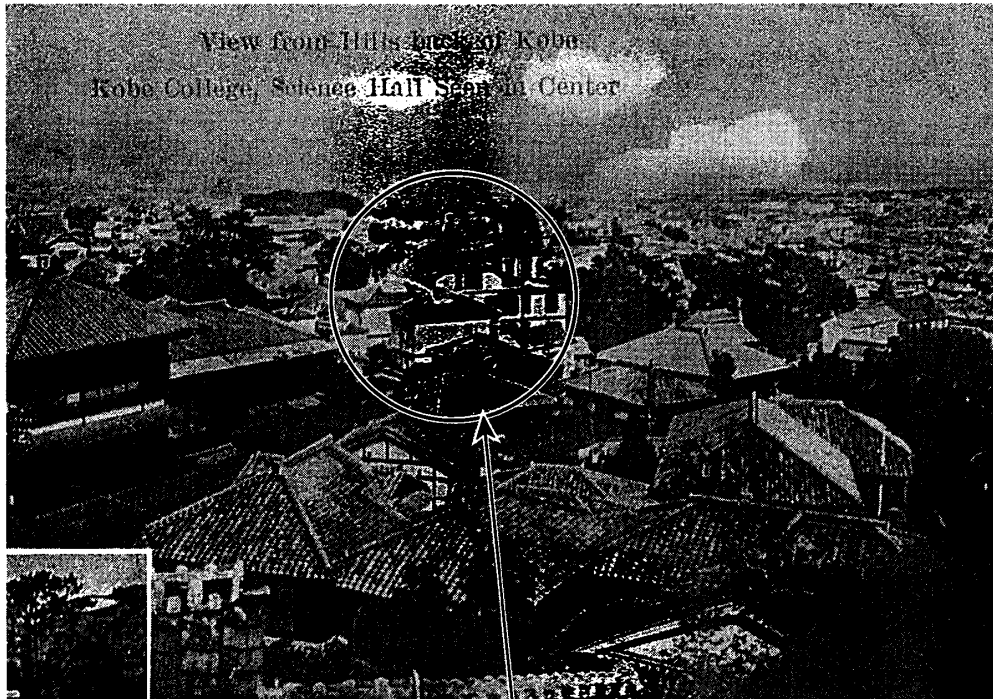
その計画は葺合から須磨までの市内を対象としたもので、道路や電車道による街路網計画が主であったが、路線によっては建築物の制限もうたわれていた。神戸女学院が位置する山本通についても「山麓道路」¹¹¹⁾計画によって家屋が削られるという指針が打ち出されていた。図33に示されるように、その「山麓道路」は中山手通三丁目市電停留所から諏訪山へむかって大きくカーブして再度筋まで18メートルの幅員で予定されていた。神戸女学院の敷地には直接は掛からないものの、運動場との間に大きな道路が新設されるために、隔たりができることが予想された。それまでは幅員3メートルほどの小路に近い道に市営の路面電車が敷設されることが計画された。緑あふれる住宅地だった山本通を、市街地へと変える試みだった。当然のことだが、学舎としての環境はふさわしいものではなくると危惧された。神戸女学院側は様々な意味で動揺を抱いたようだ。

その計画は大正11(1922)年5月頃¹¹²⁾よりより本格化し、「山地道路」と呼称され、北野町本願寺別院の南側から神戸女学院の裏に出て、平野天王橋に達する道幅十間(18メートル)のものが予定された。これは海岸、中央とならび、神戸を縦貫する三大幹線のひとつとして計画された。当然交通量が増大することは予測された。このようなことがキャンパス移転を推進した背



神戸女学院

図34 「神戸首部」 大日本帝国陸地測量部 昭和7(1932)年
S 1:10,000



理化学館

写真50 「住宅に^{いにゅう}囲繞された神戸女学院」(中央に見えるのは理化学館)の絵葉書

景にはあった。

神戸女学院の敷地を危うくするものは道路計画だけではなかった。大正7(1918)年当時、神戸市内を縦貫する東海道本線が神戸市を南北に分断する障害物として問題化しており、その解決法として鉄道の地下化が決定¹¹³⁾していた。それは二案あって、一案は春日野道から地下にもぐり下山手7丁目で地上にでるもの、二案は春日野道から地下に入るものの、「北野町及神戸女学院の地下」を走り、花隈町8丁目で地上に現われる計画だった。当然トンネル上部の建物には影響を与える可能性も考えられた。

その後に計画内容の変更¹¹⁴⁾があって、この2つの計画案は実現されることはなかったものの、神戸女学院転出に拍車をかけた。

このような大正期に胎動しはじめる都市計画が、神戸女学院を郊外へと移転させる大きな契機になったことも、最後に指摘しておきたい。

図34の地図は昭和7(1932)年のもので、神戸女学院が山本通にあった最後の様態を示す。写真50のように周囲には住宅が建ち並び、市街化していたことが読みとれる。

結 語

以上考察してきたが、明治期における山本通のキャンパスからいったいなにがいえるのか。

- 1) 神戸女学院は神戸ホームというキリスト教主義の寄宿学校として開校する。その敷地は山本通にあって、最初から新築校舎を有していた。組合教会派のアメリカン・ボードが運営したミッション・スクールのひとつだった。明治8(1875)年から昭和8(1933)年までの58年間、同一の場所に存続できたのは、居留地という、すでに完成した市街地ではなく、諏訪山麓の畑地の市街化が進展中の「外人雑居地」にあったことが関係する。
- 2) 山本通にあったキャンパスとは将来が予測できない状態で開始され、女学校(1880年)、高等科(1891)、専門部(1907)と次々にレベルアップしていく教育内容の変容にともない、隣接地を買収し校舎を建設し、キャンパスを整備していく。すなわち計画に制約が多かったキャンパスだったともいえる。このようなプロセスは近代期におけるわが国の多くの私立学校にみられるものと共通する。高等科設置のモデルとして、米国の女子大学のマウント・ホリヨークがあった。
- 3) 学舎のスタイルとは時間軸に沿えば4つに分類され、いずれもが木造を基調とした洋風建築からなった。第一の創設時期にはコロニアル・スタイル、第二の時期はコロニアル・スタイルのなかでのスティック・スタイルの誕生、第三の時期は華麗な洋風意匠のクイーン・アン・スタイルの展開、第四の時期は木造のほかに煉瓦造が誕生する。このような変容は神戸女学院に固有の現象ではなく、同時期に建設された他のキリスト教主義学校で共通する建築様態であったことが指摘される。とりわけ同じアメリカン・ボードが運営に深く関わった同志社や梅花女学校の校舎と重なりあう要素が多い。また第三と第四の時期の間の明治30(1897)年には尚装館という和風スタイルの校舎も出現していた。第四期の煉瓦造講堂にはユージェント・シュティールという新しい造形運動の影響が表れた建築意匠がうかがえる。
- 4) 設計者という観点からみれば、デイヴィス、アッキンソン、ホルブルック、オルチン、ホイテと、アメリカン・ボードの宣教師が設計を担った。ホルブルック、ホイテは神戸女学院の教員でもあったが、いずれも建築の専門家ではない人たちによって設計がなされていたことに特徴がある。また後の岡田山キャンパスの設計者ヴォーリズが一棟手がけていた。
- 5) 神戸女学院が位置した山手界限は、外国人の住宅だけではなく、キリスト教教会やキリスト教主義学校が建ち並び、「外人都市」としての神戸を象徴する場所だった。そのなかで神戸女学院の華麗な洋風校舎群は明治期の神戸を代表する建築として、注目を浴びた。一方で、神戸の急激な発展は都市計画の始動につながる。そのためにキャンパスに隣接し幹線道路が敷設されることになる。そのことを契機として、キャンパス移転が本格化する。

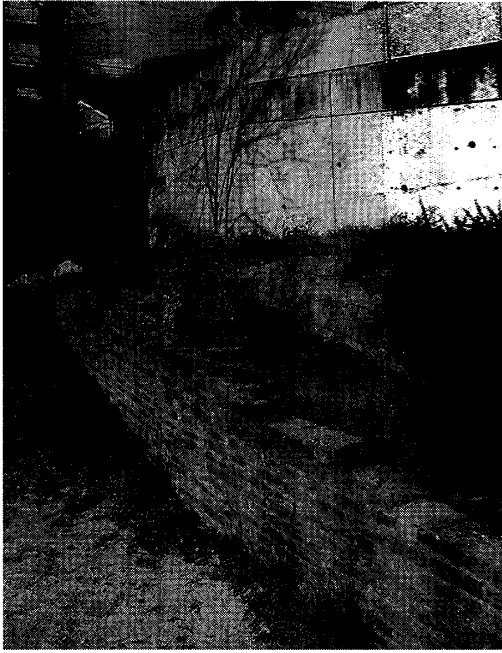


写真51 「北側運動場に残る煉瓦造の堤」

後 記

文献ゼミを受講する十数人の女学生と一緒に、山本通の旧キャンパス跡を訪れたのは昨年(2003)の初夏のことだった。元町駅に降り立ち、坂を登ればフランス・ルネッサンス風の旧兵庫県庁舎がある。その北側に屏風のように聳える現兵庫県庁舎の間を抜けると、相樂園に出逢う。向かいにはこうべ小学校(旧山手小学校と旧諏訪山小学校の敷地跡)がある。その北側を右折すると、かつての神戸女学院の敷地に直面する山本通だ。もしここに残り続けていれば、と考える。元町にも三宮にも徒歩で行ける。十分に町中だ。このことから郊外にある今とはもう少し異なった校風になっていたものと想像される。

1920年代から30年代にかけてのひとつの郊外ユートピアとして位置した「阪神間」も阪神大震災でとどめをさされ、いわゆる「ふつうの町」化が進行している。神戸の山本通ではかつての「外人雑居地」を特徴づけた華麗ながらも、風変わりな風貌の洋館群の多くは失せ、やはり「ふつうの町」化が進行する。かつての女学院の敷地の西側に数十メートルの地点にあった明治期の異人館も地震で瓦解し、あれから十年経った今も更地のままにある。こうやって、町が形成された時期の特徴的な色合は少しずつ薄れていくのだろう。

今年の秋再び、今度はひとりでこの旧キャンパスに向った。当時の配置図と照合しながら、ひととおり現在の様態を検証した直後に、細い坂道の向こうにひとつの古い洋館を見つけた。この界隈ではただひとつの神戸女学院と同時代の建物といってよい。そこで、神戸女学院と明記された一枚の絵葉書を見ることになった。これまで未見の角度からの撮影である。予期せぬ発見はどこに隠れているかわからない。ある意味で地霊との交感である「町歩き」は、思いもよらないインスピレーションの教示にとどまらず、得難い新史料を授けてくれた。

謝辞：本学非常勤講師の魚住香子先生には、お世話になりました。

写真・図版の出典一覧

- 写真1 「神港学園に残る石碑」：筆者撮影
- 写真2 「明治十四年頃の神戸市」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真3 「大正後期から昭和初期の神戸女学院の南面からの全景」の絵葉書：葉山徳仁所蔵
- 写真4 「神戸女学院正門」の絵葉書：社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会 所蔵
- 写真5 「明治二十六年の神戸女学院」（建設中の理化学館）：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真6 「全景・南面」模型(1)：筆者撮影
- 写真7 「全景・東面」模型(2)：筆者撮影
- 写真8 「全景・北東面」模型(3)：筆者撮影
- 写真9 「講堂・南面」模型(4)：筆者撮影
- 写真10 「教師館・寄宿舍・南東面」模型(5)：筆者撮影
- 写真11 「教師館・寄宿舍・南面」模型(6)：筆者撮影
- 写真12 「講堂・教師館・寄宿舍・屋根」模型(7)：筆者撮影
- 写真13 「音楽館・東面」模型(8)：筆者撮影
- 写真14 「理化学館・南面」模型(9)：筆者撮影
- 写真15 「理化学館・西面」模型(10)：筆者撮影
- 写真16 「尚裴館・家齋館・東面」模型(11)：筆者撮影
- 写真17 「尚裴館・家齋館・南面」模型(12)：筆者撮影
- 写真18 「尚裴館・家齋館・北面」模型(13)：筆者撮影
- 写真19 「葆光館・南面」模型(14)：筆者撮影
- 写真20 「雨天体操場・南面」模型(15)：筆者撮影
- 写真21 「第一校舎の外観」：写真帖『神戸女学院千八百七十五年千九百二十五年』神戸女学院. 1925
- 写真22 「第一校舎(右側)と第二校舎(左側)の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真23 「同志社旧第二寮(1876年)の外観」：河野仁昭『キャンパスの年輪同志社今出川校地』同志社大学出版部. 1987
- 写真24 「海岸女学校」：『青山学院九十年史』青山学院. 1965
- 写真25 「中舎の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真26 「講堂(1888年)の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真27 「理化学館の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真28 「理化学館 玄関ホール」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真29 「音楽館の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真30 「音楽館 玄関ホール」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真31 「尚裴館(1897年)の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真32 「葆光館の外観(南面)」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真33 「葆光館の外観(北面)と運動場」の絵葉書：社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会 所蔵
- 写真34 「梅花女学校・北野校舎の外観」：『梅花学園100年の歩み』梅花学園. 1977
- 写真35 「講堂の外観(西面)」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真36 「平安女学院・校舎」：筆者撮影
- 写真37 「講堂の外観(北面)」（神港学園時代）：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真38 「講堂の内部」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真39 「土佐堀青年会館の外観」：『大阪YMCA100年史』大阪キリスト教青年会. 1982
- 写真40 「雨天体操場の外観」の絵葉書：社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会 所蔵
- 写真41 「雨天体操場の内部」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真42 「家齋館の外観」の絵葉書：社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会 所蔵
- 写真43 「向上館の外観」：神戸女学院大学図書館 所蔵
- 写真44 「デイヴィスの顔」：『同志社女子大学125年史』同志社女子大学. 2000
- 写真45 「ホルブルックの顔」：神戸女学院大学図書館 所蔵

- 写真46 「オルチンの顔」：神戸女学院大学図書館 所蔵
 写真47 「アッキンソンの顔」：神戸女学院大学図書館 所蔵
 写真48 「ホイテの顔」：神戸女学院大学図書館 所蔵
 写真49 「キャンパス内のバザー風景」：神戸女学院大学図書館 所蔵
 写真50 「住宅に囲繞された神戸女学院」(中央にみえるのは理化学館)の絵葉書：社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会 所蔵
 写真51 「北側運動場に残る煉瓦造の堤」：筆者撮影

- 図1 「築地六番館」：『都史紀要九東京の女子教育』
 図2 「フェリス女学校」：『真理と自由を求めて—明治学院120年の歩み—』明治学院. 1997
 図3 「共立女学校」：『日本絵入商人録』1887
 図4 「兵庫神戸実測図」内務省地理局測量課 明治16(1883)年 S1:10.000
 図5 「神戸兵庫名勝絵図」柴田正・熊谷幸助 明治19(1886)年 縮尺なし
 図6 「略配置図」：『神戸女学院史創立五十年』神戸女学院. 1925
 図7 「第二校舎の立面」：『七一雑報』
 図8 「美美新教会英和学校」：『日本絵入商人録』1887
 図9 「寄宿舎(西側)の平面図1(一階・二階・三階)」：神戸女学院所蔵
 図10 「寄宿舎(東側)の平面図2(一階・二階)」：神戸女学院所蔵
 図11 「理化学館の平面図(一階・二階)」：神戸女学院所蔵
 図12 「建設時の同志社・ハリス理化学館」：『同志社百年史通史編一』同志社. 1979
 図13 「音楽館の平面図(二階)」：神戸女学院所蔵
 図14 理化学館・音楽館の屋根状図とアプローチ方法の模式図：筆者作成
 図15 「尚裴館・家斎館の平面図1(一階)」：神戸女学院所蔵
 図16 「尚裴館・家斎館の平面図2(二階)」：神戸女学院所蔵
 図17 「葆光館の平面図1(一階)」：神戸女学院所蔵
 図18 「葆光館の平面図2(二階)」：神戸女学院所蔵
 図19 「葆光館の平面図3(三階・一階附属屋の生徒便所)」：神戸女学院所蔵
 図20 「フランダース風破風」：マリー・ミックス・フォーレイ『絵で見る住宅様式史』鹿島出版会. 1981
 図21 「講堂の平面図1(一階)」：神戸女学院所蔵
 図22 「講堂の平面図2(二階)」：神戸女学院所蔵
 図23 「講堂の平面図3(三階)」：神戸女学院所蔵
 図24 「雨天体操場の平面図」：神戸女学院所蔵
 図25 「家斎館の平面図1(一階)」：神戸女学院所蔵
 図26 「家斎館の平面図2(二階)」：神戸女学院所蔵
 図27 「家斎館の正面姿図」：神戸女学院所蔵
 図28 「家斎館の側面姿図」：神戸女学院所蔵
 図29 「家斎館の断面図1」：神戸女学院所蔵
 図30 「家斎館の断面図2」：神戸女学院所蔵
 図31 「向上館の平面図」：神戸女学院所蔵
 図32 「浴室兼洗濯場の平面図」：神戸女学院所蔵
 図33 「道路計画図」：『神戸又新日報』大正2(1913)年3月29日
 図34 「神戸首部」大日本帝国陸地測量部 昭和7(1932)年 S1:10.000

注

- 1) 雨天体操場建設時につくられたものかと考えていたが、神戸女学院が手放した後の昭和13(1939)年の大水害の後に築造された可能性も否定できない。
- 2) 『神港創立六十周年記念誌』神港学園. 1984
- 3) 昭和30(1955)年に刊行
- 4) 同志社については、前久夫「同志社の近代建築」(上)。(中)。(下)『同志社談叢』第二号. 第三号. 第四号同志社社史資料室1982. 1983. 1984、などがあり、関西学院については山形政昭「関西学院キャンパスの研究(上)」『関西学院史紀要創刊号』1991. 「関西学院キャンパスの研究(下)」『関西学院史紀要第二号』1992. 関西学院がある。明治学院については、旧宣教師館(インブリー館)の保存修復の際の、鈴木博之らによる建物調査報告書ならびに保存修理工事報告書がある。また鈴木博之らによる、旧神学部校舍兼図書館(記念館)と礼拝堂(チャペル)についての建物調査報告書がある。
- 5) 『神戸女学院史 創立五十年』神戸女学院. 1925
- 6) 明治16(1883)年当時、アメリカン・ボードのなかでも、3つの伝道会社があつて、中部伝道会社は神戸女学院、東部伝道会社は梅花女学校、太平洋伝道会社が同志社を担当していた。
- 7) 『都史紀要九 東京の女子教育』東京都公文書館. 1961、に掲載の絵からは、海鼠壁の平屋建ての建物と二階建てのヴェランダ付きの建物の二棟が確認されるが、どちらが築地六番館なのかは不明。
- 8) 『フェリス和英女学校六十年史』フェリス和英女学校. 1931
- 9) 『横浜共立学園六十年史』横浜共立学園. 1938
- 10) 前掲7)『都史紀要 東京の女子教育』に詳しい。
- 11) 吉住英和「川口居留地のキリスト教と学校」『大阪川口居留地の研究』思文閣出版. 1995
- 12) 『聖和八十年史』聖和女子短期大学. 1961
- 13) 『神戸市名所案内記』日東館書林. 1897
- 14) 井上琢智「内地雑居地と川口居留地」『大阪川口居留地の研究』思文閣出版. 1995
- 15) 前掲11)吉住英和「川口居留地のキリスト教と学校」『大阪川口居留地の研究』と同じ
- 16) 前掲13)と同じ
- 17) 前掲13)と同じ
- 18) デフォレスト「神戸女学院の歴史」『神戸女学院 第五十年報』(めぐみ第五号付録)1924
- 19) 鉄筋コンクリート造の神戸市立諏訪山小学校が写っている。この建物は大正10(1921)年11月に完成していたから、それ以降、昭和八年までに間に撮影された写真と考えられる。
- 20) 岡本道雄「近代日本の女子教育と神戸女学院」『神戸女学院 百年史各論』神戸女学院. 1981
- 21) 溝口靖男「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院」『神戸女学院 百年史各論』神戸女学院. 1981
- 22) 平塚益徳編『人物を中心とした女子教育史』帝国地方行政学会. 1965
- 23) 前掲20)と同じ
- 24) その教育レベルの高さは、当時の女子教育に関する最高教育機関であった女子高等師範学校の教育修業年限よりも、1年間長かったことにはうかがえる。
- 25) 和島芳男は『神戸女学院 八十年史』神戸女学院大学. 1955のなかで、校舎の建設が第一期は明治20(1899)年前後で、第二期は明治二十六(1893)年、第三期は明治四十(1907)年にわたったことを指摘している。
- 26) 大学の設置は、日本女子大学、東京女子大学に次ぐもので、この時点で女子高等教育の最高学府としてのポジションを得ることになった。
- 27) 前掲5)と同じ
- 28) 前掲5)と同じ
- 29) 前掲5)と同じ
- 30) 前掲5)の『神戸女学院史 創立五十年』および前掲25)の『神戸女学院 八十年史』によれば、明治10(1877)年に建設されたとあるが、デフォレストによれば、明治11(1878)年とされ、その後に刊行された『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院. 1976、では明治11(1878)年説が採択されている。本

稿でもこの説を採りたい。

- 31) 西口忠「川口居留地と同志社」『新島研究』第九十五号、同志社大学、2004
- 32) 現在、田辺キャンパスへ移築され現存する。
- 33) 『同志社女子大学125年史』同志社女子大学、2000
- 34) 『都史紀要 四築地居留地』東京都公文書館、1957
- 35) 山手百二十番地にあり、メソジスト・プロテスタント・ミッション・アングロ・ジャパニーズ・スクールといった。『日本絵入商人録』1887
- 36) 現在の青山学院につながる。『青山学院九十年史』青山学院、1965
- 37) レスター・ウォーカー『図説アメリカの住宅』三省堂、1988
- 38) 胴蛇腹のことを指す。
- 39) 藤森照信『信州の西洋館』信濃毎日新聞社、1995
- 40) 小断面の細い柱材を釘で打ち付けフレームとするもので、間柱構造ともいわれ、のちの枠組壁構法として普及する。江口敏彦『洋風木造建築』理工学社、1996、に詳しい。
- 41) 前掲37)と同じ
- 42) 藤森照信『日本の近代建築(上)』岩波書店、1993
- 43) 文部省の営繕組織の最初の責任者であった山口半六が設計した。保存の際に幾分か切り取られたものの、奏楽堂として東京・上野に現存する。
- 44) 『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、1976
- 45) 屋根に付いた窓を指し、明かり取りという機能だけではなく、外観を飾るという意味がある。
- 46) 前掲37)と同じ
- 47) 半切妻屋根と呼称されることもあり、寄棟と切妻を折衷した屋根形状であり、三角形の部分をジャーマン・キャッツという。
- 48) 理化学館という名称が理科学館にいつの時点で変更されたのかについてはあきらかではないが、遅くとも大正5(1916)年には変更されていた。ここに掲載した図11に「理科学館」と記されていた理由は明治26(1893)年の竣工時の図面ではないことによる。『創立四十年 私立神戸女学院沿革史』1916、参照。
- 49) イギリス人で、イギリス聖光会系の三一神学校教師として来日し、神戸を拠点に事務所を開設した居留地建築家だった。建築作品としてキリスト教主義学校ではプール女学校(明治23年)、桃山中学校(明治24年)、平安女学院明治館(明治28年)があり、現存する住宅としては、旧ハンセル自邸のほか旧ハッサム邸などがある。坂本勝比古『神戸の異人館』神戸市教育委員会、1962、に詳しい。
- 50) 明治30(1897)年に財政的な問題で廃校になる。
- 51) 濃尾震災の被害を鑑み、明治26(1893)年に撤去される。
- 52) コーニスとアーキトレープの間の帯状部を指す。
- 53) アメリカ人建築家のJ.H.ヴォーゲルの設計。活水高等女学校はヴォーリズと共同で設計をおこなった。大正6年以来上海で建築事務所を開設する。
- 54) 前掲37)と同じ
- 55) 1830年代に米国にもたらされ、当初は公共建築に用いられ、その後に富豪や新興成金の壮大な邸宅に取り入れられた。円錐屋根の塔屋も表れた。米国では石造が木造に置換された点に特徴がある。
- 56) クイーン・アンの特徴のひとつでもある。
- 57) 国指定の重要文化財で、弘前市に現存する。設計は敬虔なクリスチャンであった大工棟梁の桜庭駒五郎による。
- 58) アメリカン・ボード最初の宣教師で、ダニエル・クロスビー・グリーンという。神戸を拠点として活動した。建築設計については専門家ではない。明治40(1907)年からは神戸女学院の理事をつとめた。
- 59) ドイツ人建築家で、エンデ・アンド・ベックマン建築事務所の代理人として来日し、横浜山手に建築事務所を開設する。ほかに明治学院記念館がある。
- 60) 河野仁昭『キャンパスの年輪』同志社大学出版部、1985、に詳しい。

- 61) 若山晴子「ソール書簡一訳および註(六)」『学院史料』第15号. 神戸女学院史料室. 1997
- 62) 山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』博士論文. 1993、中尾嘉孝氏の御教示
- 63) 現在でもその傾向は続いている。とりわけ地方では根強いものがある。
- 64) 『めぐみ』第十七号. 神戸女学院同窓会. 明治30年12月30日. 1897
- 65) 近代和風については初田亨・大川三雄・藤谷陽悦『近代和風建築』1992. 株式会社建築知識、などが定義付けをおこなっている。
- 66) 前掲64)と同じ
- 67) 川島智生『近代日本における小学校建築の研究』京都工芸繊維大学博士論文. 1998、のなかで明治期の神戸の小学校について詳しく論じた。
- 68) 前掲64)と同じ
- 69) 『神戸女学院八十年史』神戸女学院大学. 1955、『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院. 1976、では明治33(1900)年説が採用されている。
- 70) 『神戸女学院史 創立五十年』神戸女学院. 1925、では明治38(1905)年説が採用されている。
- 71) 前掲5)『神戸女学院史 創立五十年』と同じ
- 72) つち形梁といい、イギリス中世の教会堂の小屋組で発達し、構造的に上部の荷重を合理的に受けるとどまらず、意匠的にも美しさが追求されたものである。
- 73) 『ミッション・ニュース』米国伝道会日本伝道団. 1909年3月. に掲載された。大阪毎日新聞の記事の転載だったという。若山晴子「ジョージオルチン使と賛美歌—米国伝道会宣教師文書を中心として—」『新撰賛美歌』研究』神戸女学院大学. 新撰賛美歌研究会編. 新教出版社. 1999、のなかに詳しく論じられている。ここでの翻訳も若山晴子によるものである。
- 74) 足立節治『石綿スレートの歴史 その一』私家本. 1961
- 75) 文部省営繕組織の建築技師・久留正道らによる雛形の設計が定型化や標準化を進展させた。文部省大臣官房会計課建築掛では明治28(1895)年4月2日に「学校建築図説明及設計大要」をまとめ、より具体的に学校建築の設計について指示をおこなうことになる。
- 76) 菅野誠・佐藤讓『日本の学校建築 資料編』文教ニュース社. 1983
- 77) 「風雪にたえ五十七年—赤レンガ校舎こわされる」『私神港新聞』第二十号. 1964. 4. 9
- 78) 前掲31)と同じ
- 79) 『神戸女学院八十年史』神戸女学院大学. 1955、のなかではじめて現われる記述であり、そのことは『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院. 1976、にも引き継がれている。
- 80) 「オランダ建築」『世界建築事典』鹿島出版会. 1984
- 81) 英国のジェームズ一世時代(1603~1625)の建築様式で、ルネッサンス初期にあたる。
- 82) 『写真で見る 125年史』平安女学院. 2000
- 83) 堀勇良『外国人建築家の系譜』日本の美術 8 No447. 至文堂. 2003
- 84) ドイツ人建築家で、明治36(1903)年来日し、建築設計事務所を主催する。朝鮮総督府、風見鶏の館などの作品がある。
- 85) 坂本勝比古「異人館建築物語」『神戸居留地の三分の四世紀』神戸新聞総合出版センター. 1993.
- 86) 前掲37)と同じ
- 87) 『大阪 YMCA100年史』大阪キリスト教青年会. 1982
- 88) 『神戸女学院原設計図集 1913-1955 I』一粒社ヴォーリズ建築事務所. 奥付き不明
- 89) 明治43(1910)年に滋賀県近江八幡に設立され、建築部はその柱のひとつとなる。当初、米国より来た建築技術者、G・チェーピンが加わり、チェーピンは後に米国における近江ミッションの代表者となる。
- 90) 前掲53)の活水女学館の設計者だが、ヴォーゲルはオハイオ州立大学で建築を学んだ技術者だった。
- 91) 小さく崩して記されていたために、そのスペルの判別は困難をきわめ、現時点で読み取りはできていない。

- 92) 設計図を定規やコンパスを用いずに指一本で描くこと。基本構想やスケッチに多く用いられる。
- 93) 図面の作成で、この後トレーシングをおこなう。
- 94) 図面の清書で、烏口でインキングする。
- 95) 山形政昭『ヴォーリズの建築』創元社、1989、のなかの表2「近江ミッション建築部—主要部員の在職期間」に詳しい。
- 96) 大正10(1921)年に鉄筋コンクリート造に建て変わるため、不要となり売却される。写真3の「大正後期から昭和初期の神戸女学院の南面からの全景」の絵葉書は、新しく改築されたこの鉄筋コンクリート造校舎から撮影されたもの。
- 97) 『神戸女学院 八十年史』神戸女学院大学、1955
- 98) 前掲37)と同じ
- 99) 『同志社女子大学125年』同志社女子大学、2000
- 100) 「米国伝道会宣教師文書」に関する様々な報告(三)—ホルブルック書簡に見る「神戸女学院」初年度の状況—『学院史料』第16号、神戸女学院史料室、1998
- 101) 前掲87)と同じ
- 102) 神戸女学院大学、新撰賛美歌研究会編『「新撰賛美歌」研究』、新教出版社、1999
- 103) 賀川豊彦『地殻を破って』福永書店、1920
- 104) 前掲103)と同じ
- 105) 『神戸市政大観』大住栄吉、1933
- 106) 『神戸紳士録』木内氏蔵版、1911
- 107) ベリー博士の1873年4月15日附報告書による。溝口靖夫「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院」『神戸女学院百年史 各論』神戸女学院、1981、のなかに引用。
- 108) 『神戸とYMCA 百年』神戸キリスト教青年会、1987
- 109) 『神戸市民読本』神戸市役所、1925
- 110) その下敷きとして、明治19(1886)年に提案された市区改正およびに道路改良があった。
- 111) 「神戸都市計道路網で削られる町並(二)」『神戸又新日報』大正2(1913)年3月30日
- 112) 「都市計画の図上に描かれた大神戸の道路網」『大阪朝日新聞』大正11(1922)年5月27日
- 113) 「決定の地下線」『神戸又新日報』大正7(1918)年10月22日
- 114) 「神戸市街を走る電車更に十四哩路線延長」『神戸又新日報』昭和2(1927)年7月28日や「三千五百万円を投出し更に市電を六線敷く」『神戸又新日報』昭和4(1929)年1月3日、などから判明する。

(原稿受理 2004年12月3日)